



他者理解を促す教育の在り方 高校英語教科書における国際理解教育とジェンダー理解：教科書から意識へ

末澤，奈津子

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2020-09-25

(Date of Publication)

2021-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7896号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007896>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



2020年6月22日提出

他者理解を促す教育の在り方
高校英語教科書における国際理解教育とジェンダー理解：
教科書から意識へ

神戸大学 大学院 国際協力研究科

地域協力政策専攻

指導教員 山内乾史教授

1411027I

末澤 奈津子

目次

論文要旨	1
はじめに：本稿の目的	4
第 1 章：無意識のバイアス	
第 1 節：潜在認知の科学的証明	6
第 2 節：潜在連合テスト Implicit Association Test：IAT	8
第 3 節：無意識のジェンダーバイアス	11
第 4 節：まとめ	13
第 2 章：日本の英語教科書研究	
第 1 節：英語教育における理論的基盤	14
第 2 節：英語教科書における国際理解研究	19
第 3 節：英語教科書におけるジェンダー研究	30
第 4 節：リサーチギャップとリサーチクエスション	33
第 3 章：英語教科書における多様性の研究	
第 1 節：英語教科書<コミュニケーション英語>における多様性	35
第 2 節：国際理解尺度を用いた質問紙調査	43
第 3 節：教員インタビュー 英語教育における英語規範と国際理解	54
第 4 節：まとめと考察	56
第 4 章：英語教科書におけるジェンダー研究	
第 1 節：英語教科書<コミュニケーション英語>における男女比	65
第 2 節：英語教科書<英語表現>における男女比	74
第 3 節：学習者作文を元にした男女の異なるジェンダー観	83
第 4 節：まとめと考察	91
第 5 章：結論	
第 1 節：先行研究への貢献	93
第 2 節：教育的示唆	97
第 3 節：本調査における限界	100
付録 1：英語コミュニケーション教科書まとめ（2017 年度版）	102
付録 2：英語コミュニケーション教科書まとめ（2000年度版）	137
参考文献	171

論文要旨

本論文は、日本の高等学校の英語教科書を例として、国際理解及びジェンダーの観点から教科書と学習者に潜む「無意識のバイアス」を炙り出すことを目的としている。「無意識のバイアス」とは、ある特定の社会集団に対する小さな偏見に由来した固定概念が、個人の認識しない意識下で、重要な判断や意思決定に影響を与える認知とされる。例えば、Rubin (1992)の実験では、心理学を専攻する大学生らにアメリカの標準的な英語で録音した講義を聞かせる時に、金髪で青い目の白人の女性の写真を見せながら流した時と、黒髪の典型的なアジア系の女性の写真を見せながら流した時では、同一の音声であるにも関わらず、後者の写真の方が、学生は英語に訛りがあるように聞こえたと報告した。この実験は、人は「アジア人の英語は訛りがある」という思い込みや偏見によって、容易に誤りを起こすことを説明している。Goldin & Rouse (2000)の調査では、圧倒的に男性の比率が高かったアメリカのオーケストラ楽団員を採用する際、応募者と審査委員の間にスクリーンを設置するブラインド・オーディション方式で審査を行うと、予選を通過し、最終審査で採用される女性の比率が数倍高くなった事実を示した。これらの二つの例は、人は容易に思い込みや固定概念によって、正当な判断ができなくなり、その誤りに対して、無自覚であることが多いことを示している。つまり、人は「無意識のバイアス」からは逃れることは不可能であるのであり、本論文は、教科書における作成者や編集者の「無意識のバイアス」を表出させることを試みるものである。

日本の学校教育で使用される教科書は、法的拘束力を持つ学習指導要領に沿って作成され、各教科における知識の伝達の役目を果たすと同時に、人間教育としての模範的・規範的なあり方を示すように構成される。現行の学習指導要領で言えば、「持続可能な社会づくりのために、一人ひとりが、多様な他者を尊重する」ことを目的とする人間教育である。教科書の内容や題材で言えば、いじめを助長するような暴力的な題材、森林を伐採して経済活動を推進するといった現代社会の要請に逆行するような内容、天皇制、新興宗教、政治批判など、ある特定の集団にとって不利益な話題や、一般的な社会通念や倫理観から外れた話題も教科書には登場しない。教科書検定制度のため、表記や題材、記述において不可とされた教科書は発行することができないからである。しかしながら、題材や内容の選定に関して、合格・不合格となる明確な基準があるわけではなく、教科書の作成から編集、検定の可否まで、すべて教科書に携わる人間の「常識」や「良識」によって判断され、その当時の社会状況・時代背景を投影する価値観によっても大きく変わるのが実情である。

本論文の構成を述べる。第1章では、「無意識のバイアス」について社会心理学の知見に基づき説明を行った。第2章では、日本の英語教育における理論的背景を説明した後に、教科書研究を国際理解の観点及び、ジェンダー理解の観点から先行研究を述べた。従来、日本の英語教科書研究においては、異文化理解という観点において、登場人物の国籍が調査され、日本と米国の二項対立に対して異論が提出されていた。さらに近年の教科書では、中国やモンゴル、ブラジルなどの、英語が外国語として使用される国の登場人物も描写される傾向となった。ジェンダーの観点では、日本だけでなく、世界的に見ても男性優位の傾向はどの教科書においても指摘されている事実である。本論文では、多様な登場人物が出現しているのか、及び、教科書の男女不平等傾向は改善されているのか、というリサーチクエスチョンをたてて、調査分析と解釈を行った。

第3章では、国際理解の観点から、現行の高等学校の教科書11冊と2000年に発行された教科書の11冊の登場人物と題材・内容の構造分析を行った。その結果、2000年の教科書で多数検出された英米の文化を伝えるユニットやレッスンが現行の許可書では消失し、従来の文章を読んで物語を理解するという教科書から、実在する社会的偉業や功績を修めた日本人が多く登場し、ある種のメッセージ性の強い教科書に変化したことが判明した。なお、英語教育の目的として国際理解を深めるという目的が示されていることに着目して、現行の教科書で学んだ大学生ら（英語専攻と英語非専攻 50名ずつ）100名に質問紙調査を行った。その結果、一般的な国際社会の諸問題に対して、より深い態度と関心を示したのは、英語非専攻の学生群の方であった。また、ほぼ全員が「人や友人をその人の出身や出自で選んではいけない」という質問に同意しているにもかかわらず、「英語教師は、英語を母語とする人が良い」という質問に対しても、高い割合で同意が得られた。つまり、無意識のうちに、英語を母語とする教師に対する自動的な選好が行われているということが判明した。

第4章では、第3章で使用したのと同じ教科書についてジェンダーの観点から分析を行った。その結果、2000年の教科書の方が、現行の教科書よりも女性の登場人物が多く、男女平等の方向には改善されていない事実が判明した。題材や内容に関して言えば、2000年の教科書では、教科書作成者のジェンダー観が如実に示されていた。例えば、家庭内の性別役割の国際比較であったり、女性の社会進出であったり、「結婚して幸せな人生を送る」という表記であったり、多様な価値観が教科書に示されていた。一方、現行の教科書では、2000年の教科書で見られた男女の性別役割や不平等に関する題材は、すべてなくなり、一見、男女平等が前提という表象が示されているように見える

にも関わらず、全登場人物で言えば、社会的な偉業を達成した人物や、国際貢献をした人物においては、圧倒的に男性優位な構造が表象されている事実も判明した。また、「無意識のバイアス」として教科書に示された項目としては、レストランや農家で余剰廃棄される食料を、困っている人々に配るという社会的意義のある活動を示すレッスンで、「ひとり親世帯」ではなく、「母子家庭」という表記が存在した。また「男女平等を達成するために教科書はどうあるべきか。」という題で、学習者ら（150名）に作文を依頼したところ、男子学生は社会を基軸に、女性は自身の家庭を基軸に考えている結果が示された。また、実際にあった教科書を例に、育児放棄された白熊を、動物園に勤務する飼育者の男性が育て上げたという話に関して、養育者の男性を「father(父親)」とするか「mother(母親)」とするかという問いでは、9割の学習者らが「母親」と示した。つまり、育てる役割は、母親が担うという学習者らに存在する「無意識のバイアス」も表出されたと考えることができるのである。

第5章では、本論文のまとめとして、教育的示唆及び調査における限界点について述べた。教育的示唆としては、現行の教科書表記に関して述べている。例えば、国際理解の観点から言えば、黒人が社会の中で虐げられ続けた話ではなく、白人と黒人が一致団結して行うスポーツ競技の話がみられる。あるいは、日本軍が行った朝鮮半島での強制的な統治の話ではなく、戦争を体験した発明家の安藤百福や漫画家のやなせたかしの経験が、発明や漫画に活かされたという話がみられる。つまり、直接的で暴力的な表現から、間接的で平和的な内容の教科書に変化したといえるのである。ジェンダーの観点から言えば、性別役割に関して語られることも、男女はこうあるべきという価値観は一切なくなり、表面上は、男女平等を強く意識した構成に変化した。つまり、わずか20年の間で、国際社会の様々な問題が問題として提示されなくなり、模範的な場面ばかりの教科書、言い換えれば、争いや偏見のない画一化された理想的な教科書に変わったのである。そのような教科書で学ぶことによって、多様な他者を知り、認めることができるのかという疑問を筆者は抱く。それを補完する役目としての教員について述べると、本論文で得られた知見からは、教員自身にも「無意識のバイアス」があることを認識し、気づかぬうちに特定の学習者らに対する否定的な見解を与えている可能性を自覚し、常に自らを内省し、従来の固定概念や価値観に捉われて、本質的な判断を見誤ることがないように律する必要があるということになる。そして、現実社会との乖離を批判的に指摘できるような教員としての資質を日々の自己研鑽において重要であると指摘した。

はじめに：本稿の目的

「あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、持続可能な社会の担い手となる」そのような文言が、日本の学習指導要領に明記されて久しい。学習指導要領に準拠した教科書は、知識の伝達の役目を果たすと同時に、人間教育としての模範的なあり方を示す。したがって、いじめを助長するような暴力的な題材、森林を伐採して経済活動を推進するような現代社会と逆行するような内容、天皇制、新興宗教、政治批判など、ある特定の集団にとって不利益な話題や、一般的な社会通念や倫理観から外れた話題は教科書には登場しない。教科書検定という制度はあるものの、題材や内容の選定に関して、合格・不合格となる明確な基準があるわけではなく、教科書の作成から編集、検定の可否まで、すべて教科書に携わる人間の「常識」や「良識」によって判断される。

例えば、“Soldiers fight. We love the Hinomaru flag.” これは、1907年に教科書検定を合格した日本初の高等女学校で使用された武田錦子著の *Girls English Readers* の Lesson 34「戦争ごっこ」に記載された一文である。この露骨な国家主義が反映された教科書は、当時は「相応しいもの」であっただろうし、戦後には「相応しくないもの」として墨で塗られ、一世紀が過ぎた現代では、題材になることすら「あり得ないもの」である。このように、学校で使用される教科書は、その当時の社会状況・時代背景を投影する価値観によっても大きく変わる。

一方、人間には、普遍的に誰しものが持つ「無意識のバイアス」が存在する。無意識のバイアスとは、ある特定の集団に対する小さな偏見に由来した固定概念であり、物事の判断基準に対し、無意識に影響を与える認知とされる。そして、人間がどんなに平等主義でありたいと望んだとしても無意識のバイアスの元では、それは不可能とされ、性別・年齢・国籍・民族・社会階層や集団的特徴の異なる他者に対し、正当な判断や行動が気付かぬ内に阻害されることも起こり得る。

例えば、Rubin (1992)は、心理学を専攻する大学生らにアメリカ標準英語で録音した講義を聞かせた。その音声を流す時に、白人女性の写真を見せながら流した時と、アジア系女性の写真を見せながら流した時では、同一の音声であるにも関わらず、アジア系女性の写真の時のほうが、学生は英語に訛りがあるように聞こえたと報告した。この実験は、人は「アジア人の英語は訛りがある」という思い込みや偏見によって、容易に誤りを起こすことを説明する。そして、そのエラーに対して、人は無自覚であることが多い。

本稿は、日本の高等学校の英語教科書を一例に、教科書と学習者に潜む無意

識のバイアスを国際理解の観点及びジェンダーの観点から炙り出すことを目的とした。「グローバル化」という言葉が定着し、従来の他国の文化を理解する異文化理解ではなく、地球を一つの単位とした全体主義的な物の見方が重視される中、指導要領に記載されている「国際理解」の「国際」とは教科書においてどのように示されているのであろうか。また、男女という2つの選択ではなく、LGBTという性的嗜好も含めた多様な他者への認識や理解も促進されつつある日本社会において、教科書は「ジェンダー」という問題をどのように扱っているのであろうか。無論、教科書である以上、特定の社会集団や団体への差別的な記述や偏見を助長するような表記は存在しないのが前提である。しかしながら、ある年代の一定数の教科書を一つのテキストとして比較し、構造分析を行った場合、教科書の著者や編集者が「意図していない」バイアスを可視化させることは一定の教育的意義を有するのではないだろうか。

第1章では、無意識のバイアスについて社会心理学の知見に基づき説明を行う。第2章では、日本の英語教育における理論的背景及び教科書研究を国際理解の観点及び、ジェンダー理解の観点から先行研究を述べる。第3章では、国際理解の観点から、第4章では、ジェンダーの観点から実験結果の報告及び考察を行い、第5章では、結論と教育的示唆を述べていく。

第1章：無意識のバイアス

第1節：潜在認知の科学的証明

本節では、無意識のバイアスの心理学的用語である潜在認知について述べる。また本稿における「偏見(prejudice)」「ステレオタイプ(stereotype)」「差別(discrimination)」の定義と相互の関係性は、Dovidio, Hewstone, Glick, & Esses (2010)によると、偏見とは、対象の集団に対する否定的な態度とし、その態度には信念や感情や行為も含まれると示している。ステレオタイプとは、この偏見を引き起こす認知基盤とされ、特定の社会集団に対して抱く通常好意的でない集約的なイメージ及び、他者を認知する先行判断の大きな基準となるとされている。加えて、差別とは、対象となる集団や個人に対して、偏見に根ざした否定的な感情を有し、直接的に相手に危害を加える行為や、自分の所属する集団や別の集団を有利に扱い、対象となる集団や個人が不利益を被る間接的な行為も含まれるとしている。これらの定義に依拠し、以下に現在の差別・偏見研究について概観する。

差別や偏見が社会的課題として研究や調査対象となったのは、1920年代以降とされている。それまでは、人間の身体的特徴における差は、生物学的要因に起因し、知性や道徳性に欠ける集団に対して嫌悪感を抱くことは、至極当然な反応であるとされた。歴史上の数々の残虐的な行為や事件は、そのような集団に対して、支配し、隔離し、排除することが正当化されていた事実を物語る。

第二次世界大戦後の米国における公民権運動や、アジア諸国の植民地支配からの独立とともに、人権意識や平等主義的な価値観が普及したにも関わらず、ある特定の社会集団や個人に対する差別意識や偏見はなくなる。その理由を説明するアプローチとして、現在の認知心理学や社会心理学の分野では、意識と無意識が影響する二過程モデルが主流とされている。二過程モデルとは、人間の行う情報処理には2つの種類があり、一つは、意識的注意を向けながら遂行される統制的処理と、もう一つは、意識的注意を伴わずに遂行される自動処理とされ、意識的な明白な差別と、本稿が注目する無意識による差別と区別されるという論である。

この研究は、米国で黒人に対する人種差別を検証した Devine (1989)に代表さ

れ、彼女は、プライミング効果¹を利用し、白人が黒人に抱くステレオタイプを次の方法で証明した。

2つの白人の被験群に対して、黒人を想起する単語(**black** や **nigger**)と無関係の単語をランダムに8割と2割の割合で、瞬間的に目の前のスクリーンに提示する。そのすぐ後に、人種不詳のドナルドという架空の人物のやや攻撃的な話を読んだ時に、黒人関連語を8割示された被験者群の方が、彼をより暴力的な人物であると査定した。ドナルドの話には一切、黒人に関連する話題は登場しない。つまり、被験者が意識しない程度の瞬時の間でも、黒人関連語による記憶の活性化が、脳内における攻撃性概念へのアクセスを高め、対象人物の印象形成に影響を及ぼす効果を示したことを証明する。両群は、前もって人種差別や平等性に関して、質問紙で統制された被験者群であり、人種に対する平等性や黒人への差別意識が無いことも事前に確認済みである。

この研究は、反人種差別主義を掲げている人間でさえも、意識的な統制が困難な状況では、経験や伝聞を通じて形成された黒人に対するステレオタイプが無自覚に表出するということを証明した。以後、偏見や差別の研究は、意識可能な顕在レベルと、意識化が困難な潜在レベルを区別して捉える必要性があると広く認知される契機となった。

この潜在的な態度を測定する目的として、Greenwald (1998)らによる潜在連合テスト(Implicit Association Test : IAT)が開発された。このIATの特徴は、回答者は自らの反応や回答がどのような意味を持つのか知ることができず、意図的に回答を歪めることが不可能とされる。従来の自己の内省に基づく質問紙調査では、差別や偏見の質問に対して、人は社会的に望ましいとされる回答を選ぶ傾向があり、従来の研究手法とは一線を画すことから脚光を浴び、重要なツールとみなされた。次節でIATについて説明を行う。

¹脳内で先行する刺激の処理が、後続する刺激に影響を及ぼす効果

第1章：無意識のバイアス

第2節：潜在連合テスト(Implicit Association Test : IAT)

Greenwald (1998)らが開発した IAT は、無意識による自動的な選好を、刺激に対する反応時間の差で明らかにした。その方法は、テスト A 及びテスト B のそれぞれにかかった所要時間と誤答数の和を比べる方法である。表 1-1 に初期の IAT の一部を示す。

表 1-1：潜在連合テストの例

テスト A			テスト B		
花や 良い意味 の単語		虫や 悪い意味 の単語	虫や 良い意味の 単語		花や 悪い意味 の単語
○	幸福	○	○	優しい	○
○	バラ	○	○	醜い	○
○	悪魔	○	○	デイジー	○
○	幸福	○	○	陽気	○
○	ブヨ	○	○	毒	○
○	楽しむ	○	○	スイセン	○
○	吐く	○	○	友だち	○
○	愛	○	○	ムカデ	○
○	苦痛	○	○	バラ	○
○	陽気	○	○	天国	○
○	ユリ	○	○	損害	○

筆者作成・改変(下線筆者)

この IAT を受けた多くの人々に共通することは、テスト A の方がテスト B よりも、所要時間も誤答数も少ないことであった。一般的に広く受け入れられて

いる認識である「虫よりも、花に対する自動的な選好」である。

結果は、化学や文学など様々な領域での博士号取得者でも、所要時間の平均の差は 16 秒と報告し、一般的な人間が 100 メートル走るのに掛かる時間とほぼ同等だと説明している。

この現象が明らかにしたことは、過去の経験や伝聞を通して蓄積された情報は、共通の特徴(花と良いもの・虫と悪いもの)同士は同じカテゴリーとして結びつきを助ける。一方で、テスト B の(花と悪いもの・虫と良いもの) という、特徴を有しない語同士の結びつきは妨げる働きである。

つまり、自らの意思と脳の処理との間に生じるズレであり、人間の脳は過去の情報の蓄積からは逃れられないと説明した。花と虫の IAT から数ヶ月後、人種 IAT²が開発された。

結果は、花と虫の研究と同様、多くの被験者に「白人への自動的な選好」が見られた。現在では、Project Implicit という WEB 上で人種 IAT を受けることが可能である。Banaji & Greenwald (2013)は、人口統計学的に人種 IAT を受けた人々を分類すると、アメリカ社会におけるほとんど全ての集団において、75% もの人々が自動的な白人への選好を示したと報告する。この 75% という数字が当てはまらない集団は、自身のことを部分的に、あるいは完全にアフリカ系アメリカ人と回答した人々であった。

「自動的な白人への選好」という結果と「偏見」は結びつくのかという疑問に対しては、敵意や嫌悪などの直接的な偏見に基づいた行為よりも、社会の中で当事者が何の躊躇いもなく行われている行為に偏見が潜んでいることが問題とされている。

例えば、McConnell & Leibold (2001)では、白人インタビュアーと黒人インタビュアーでは、IAT での自動的な白人への選好が高い者ほど、黒人インタビュアーと話す際の快適さや友好性³が低いことを報告し、Bertrand & Mullainthan (2004)では、写真のない全く同じ内容の履歴書がある会社の採用担当へ送付し

²著名なアフリカ系アメリカ人の名前と著名なヨーロッパ系アメリカ人の名前を花と虫に置き換えたもの。

³笑顔や長く話す、視線をそらす、言い淀みなど友好性や冷淡さを示すノンバーバル行動の頻度を数えて得点化を行い測定した。

た場合、白人を想起する名前(Emily や Greg)の方が、アフリカ系を想起する名前(Lakisha や Jamal)よりも、面接の通知を知らせる電話が50%も上がったと報告した。この自動的な選好を測るIATは、現在では、対立する様々なカテゴリーに応用される。若者と老人、アメリカと日本、同性愛者と異性愛者、男と女に代表されるジェンダーなどである。次節では、ジェンダーに関する無意識のバイアスの研究を紹介する。

第1章：無意識のバイアス

第3節：無意識のジェンダーバイアス

本稿におけるジェンダーとは、Connell & Pearse (2015)が定義するように、従来の生物学的に区別される男女の性差という二項対立ではなく、社会における個人及び集団間における関係性とあり方とする。しかしながら、未だに男性と女性に対するあるべき姿を期待する価値観や固定概念が、社会のあらゆる場所で存在し、文化的な規範として深く根づいている事実は否めない。

無意識のジェンダーバイアスに関する研究は、Goldberg が 1968 年に行った無作為実験に代表される。彼は、筆者が男性名(John T. McKay)と女性名(Joan T. McKay)で記された全く同じ内容のエッセイを学生に読ませたところ、男性の名前のエッセイの方に、より高い評価がついたことを報告した。

後に、ゴールドバーグ・デザインと名付けられたこの調査法によって、社会におけるジェンダー不平等の存在を示す目的や、男女が平等に評価される目的のために、様々な研究が行われた。

無意識のバイアスの代表的な例である Goldin & Rouse (2000)の調査では、圧倒的に男性の比率が高かったアメリカのオーケストラ楽団員を採用する際、応募者と審査委員の間にスクリーンを設置するブラインド・オーディション方式で審査を行うと、予選を通過し、最終審査で採用される女性の比率が数倍高くなった事実を示した。

Moss-Racusin (2010)では、大学院の理学部の教授が女子学生よりも男子学生を優先的に研究室の管理を任せることを指摘し、かつ男子学生のメンターになりたがる傾向があると指摘した。Issac et al. (2011) では、就職面接においても、同程度の能力を持つ候補者の場合、女性よりも男性の候補者の方が、雇用される可能性が高いことが証明された。

ジェンダーに関する IAT においても、Nosek (2002)らは、テストを受けた大学院生 83 名の大半が、男性を表す単語(Man や Son)と理系とされる科目(数学や物理や天文学)を結びつけ、女性を表す単語(Woman や Daughter)と文系とされる科目(歴史や文学や心理学)を結びつけたことを指摘した。そして、女子学生の多くが数学とジェンダーに対するネガティブな固定概念を保有していること

を明らかにした。彼女らは、社会の風潮や自身の経験などを通して、自然と数学に対する苦手意識を持ち続けてきたと回答した。

このジェンダーに根差した固定概念は、人間の行動や意識に負の影響を及ぼすことをステレオタイプスレットとされる。

Spencer (1999)らの研究では、数学が得意であると自負し、事実、数学のレポートで 80 点以上を修めた名門大学の学生の男女 56 名に対し、大学院入試に使用される数学の問題(GMAT : Graduate Management Admission Test)を解くことを求めた。半分の 28 名には「性別による得点差が確認された」と報告し、残りの 28 名には、「性別による得点差が確認されなかった」と報告したところ、前者においては、女性の受験者の点数は男性の受験者よりも低く、後者の場合では、男女の得点の開きが検出されなかった。

この研究は、女性が本来発揮できた力が、ステレオタイプスレットによって阻害された事象と、先にステレオタイプスレットを除去することで、本来のパフォーマンスを女子学生が発揮できたことも示している。

無意識のバイアスという言葉は、日本では、主に社会参画の場面で近年注目を浴びている。多様な属性や階層の人々が働く企業では、慣例や当然と認識されていたことでさえも、無意識のバイアスに相当するとされている。例えば、雑用や宴席の幹事は若手の仕事という「習慣」や、定時で帰る社員はやる気がないという「思い込み」や、育児中の女性に営業の仕事は無理という「決めつけ」などである。

これらの些細な無意識のバイアスの積み重ねが、仕事に対する個人の熱意を奪い、生産性の低下を引き起こすという。したがって、個人に対する職場環境の向上が、最終的には会社全体の成長に繋がるという趣旨である。具体的な実践例としては、管理職や役職者などの立場や影響力のある人物が、無意識のバイアスに対して、意識的に自省し、他者の無意識のバイアスに対する気づきを促し、予めステレオタイプスレットを排除するように勤めなければならないとされている。

第1章：無意識のバイアス

第4節：まとめ

本章では、無意識のバイアスを社会心理学の知見に基づいて概略を述べた。端的に言えば、無意識のバイアスとは、脳内に蓄積された固定概念や情報によって、本来の正しい判断や行動が阻害されることを示す。そして、当人が、自身の差別や偏見に気づかないことが、この無意識のバイアスの大きな問題である。

この無意識のバイアスを英語教科書に当てはめてみると、教科書作成者は、当然、差別や偏見を助長するような記述は避けるであろうし、題材や内容に対しても細心の注意を払う。しかしながら、無意識のバイアスは、自身の意思と無関係な自動的選好として表出されるのであれば、英語教科書では、題材・内容で伝えたいメッセージの部分ではなく、些細な記述や表記に現れるということになる。無意識のバイアスの研究は、主に教育心理学や認知心理学を基盤としており、教科書を研究対象として取り扱った先行研究は筆者の調査の限りでは検出することができなかった。しかしながら、英語教科書における国際理解やジェンダー研究は研鑽がなされている。次章では、日本の英語教科書研究について概観する。

第2章：日本の英語教科書研究

第1節：英語教育における理論的基盤

本節では、日本の英語教科書研究を述べる前に、現在の日本の英語教育の潮流を紹介する。

2020年度より、英語が日本の小学校で活動から教科となり、アジアや欧米諸国から来日する観光客は、英語で道案内を求める時代となった。英語ほど世界中に広く普及し、使用されている言語は他にはない。その要因として、グラッドル(1999)は、19世紀までのイギリスの産業や通商国家としての主権的な地位と政治的な帝国支配、そして20世紀のアメリカの経済的優位、情報技術や航空技術の進歩が伴って、世界全土における英語の圧倒的地位を確立した、と説明する。

図1は、Kachru (1992)が示した世界における英語のモデルであり、The inner circle（中心円）と示される国は、英語がその国の主要言語として機能する国であり、各地の英語に様々な訛りや表現があるものの「norm providing：規範を与える国（筆者訳）」と表現し、米国、英国、アイルランド、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドと定義している。

The outer circle（周辺円）と示される国では、英語が重要な第二言語として、社会の中で機能し、インド、フィリピン、ジャマイカ、マラウイなどの、かつて米国と英国の植民地とされた国である。規範においては、「norm developing：規範を確立しつつある国（筆者訳）」とされ、「Singlish」に代表されるような、独自の英語の変化において、規範と実際の使用の乖離がしばしば見受けられる。

The expanding circle（拡大円）と示される国は、国内での英語使用の言語環境はほぼ皆無であり、英語を国際的な言語として認識している国である。日本や韓国や中国やブラジルなどの国とされ、その規範は、中心円の国への「norm-dependent：規範依存（筆者訳）」であるとされる。

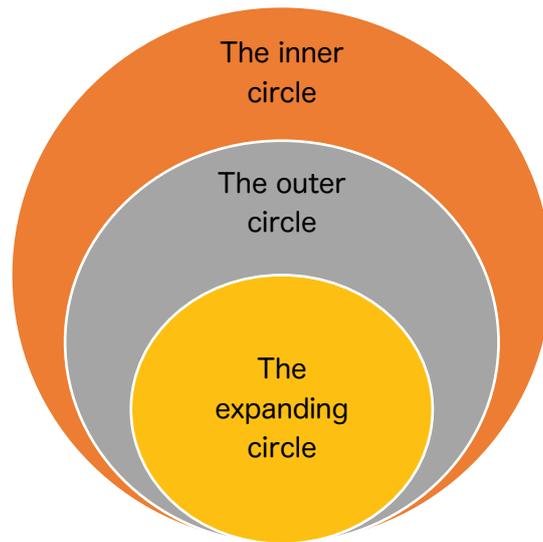


図2-1 : Kachru (1992)世界における英語のモデル

本節で紹介する応用言語学や教育学の研究者らが提唱する理論は、大きく分けて二つの流れがある。一つは、アングロ・サクソン民族の母語でしかない英語が、他の言語に比べて圧倒的な権力を示す現状に対する警鐘及び批判的な立場を取る「英語帝国主義論」と、もう一つは、世界的に英語が普及し、母語が異なる人々の共通語として理解され、どのような英語も対等で公平な立場を示す「国際英語論」である。

図2は、英語帝国主義論及び、国際英語論の概要を示したものであり、以下に説明を行う。

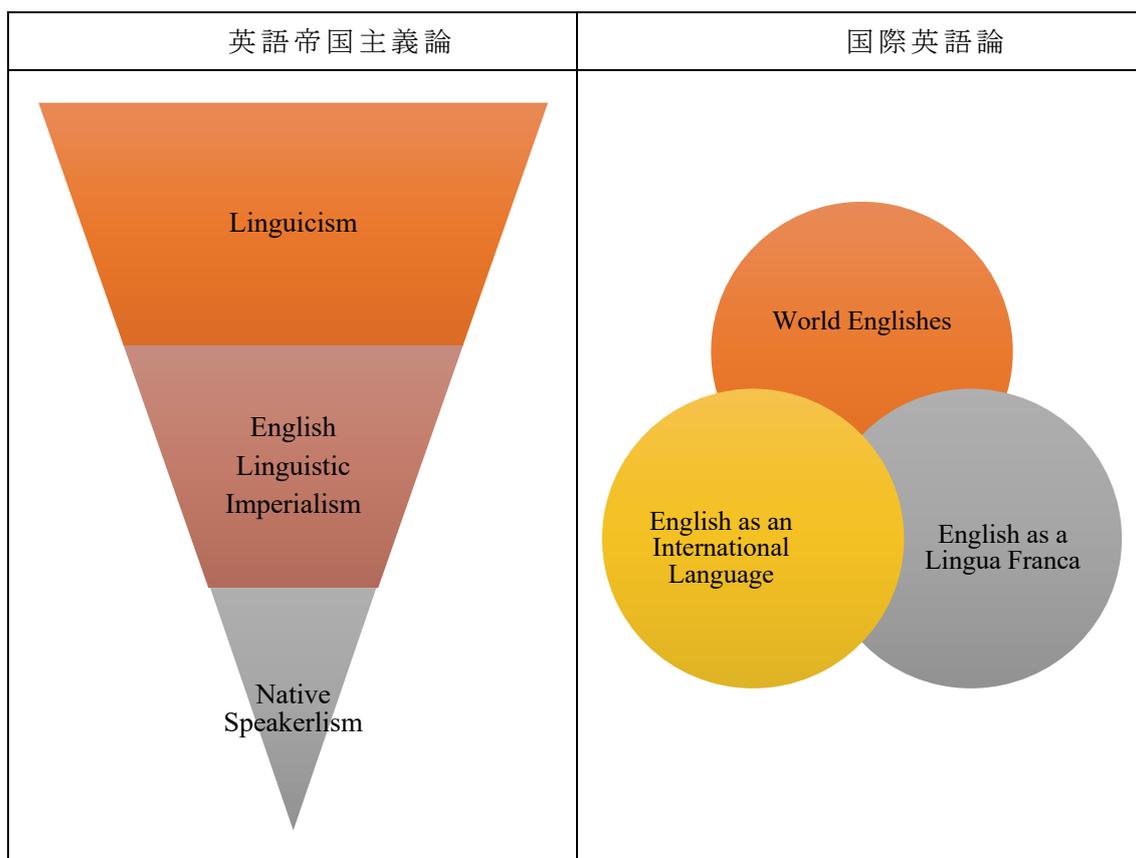


図2-2：本稿で用いる応用言語学・教育学の理論（筆者作成）

「English Linguistic Imperialism：英語帝国主義論」に関連する理論として、Skutnabb-Kangas (1994)の「linguicism：言語差別主義」がある。それは、母語によって被る差別や不平等を意味し「言語をもとに定義される諸集団間の権力と（物質的・非物質的な）資源の不均等な分配を正当化、効率化、再生産するのに使われるイデオロギー、構造、実践」と説明される。

英語帝国主義論とは、言語差別主義の下位に位置づけられており、Phillipson (1990)は、世界的な英語の影響力とその他の言語間の構造的・文化的不平等の構築、継続的な再構成による支配と説明する。加えて、英語の世界的な普及や影響力が、他の言語や文化の力を弱め、消滅させる危険性も示唆している。

さらに、その英語帝国主義には、Holliday (2006)が指摘するところの「Native-Speakerism：母語話者規範（筆者訳）」が存在する。端的に言えば、英語が第二言語や外国語として機能する国の英語教育において、理想とする教師や教授法は、ネイティブ・スピーカーと呼ばれる英語母語話者であるという論である。

Phillipson (同)の調査では、西アフリカ諸国のシラバスでは、英語母語話者の言語能力が完全に理想化され、久保田(2015b)でも、日本の中等教育機関で働く外国人指導助手の出身国が一部の国に集中しており、彼らの英語こそが正当な規範と認識されることに懸念を示している。

一方で、Davis (2003)は、ネイティブ・スピーカーという言葉自体が、非常に流動的な概念であると説明し、ネイティブ・スピーカーを定義する要因としては、生まれ育った環境で使用された言語、文法や語彙の直感的な判断、言語能力の高さ、他者からの承認、自身の帰属意識やアイデンティティなど様々な要因が交錯したものとしているが、本稿では、国際英語論との比較の関係上、中心円の国で生まれ育った人々の母語ないしは、第一言語としての話者をネイティブ・スピーカー（英語母語話者）と定義する。

一方、国際英語論の立場を取る研究者らは、英語が、母語が異なる人々の意思疎通の手段として機能する状況に注目し、見解に多少の相違はあるものの、一貫して共通することは、Widdowson (1994)が主張するように「English Ownership: 英語の所有権」は、もはや英語母語話者に属するものではない。言い換えれば、英語学習の目標は、母語話者ではなく、独自の英語で構わないという考えである。

例えば、Kachru (1992)は、世界的な英語の普及により、英語の発音や文法がその土地で独自に変化し、多様な「varieties : 変種」があると説明する。それらの変種には、英語母語話者の英語も含まれ、インド英語も、シンガポール英語も、日本語英語も、すべてが対等であると主張する。

「English as an International Language : 国際言語としての英語」を主張するSmith (2003) も、英語は「International Auxiliary Language: 国際補助語」であり、誰もがコミュニケーションの目的のために英語を使用するのであり、英語はどの国にも属しておらず、母語話者を規範とする必要はない立場を示している。

本名(1990)も、どのような英語を規範としても、結局は英語の学習過程で各自の母語と母文化を組み込み、英語の多様化は避けることは出来ないと主張し、英語の多様化における解決策として、以下の2点を強調する。1) 互いの英語の違いを認め合う寛容な態度と、2) 「English as a lingua franca : リンガフランカとしての英語」の観点であり、外国語として英語を学ぶ学習者や英語を使用す

る人々の直接の会話から、相互理解を図るための核となる発音や文法、コミュニケーションスタイルに及ぶ実証的な研究の方向性を示している。

現在の日本の英語教育においては、グローバル社会における共通言語としての英語を学ぶという国際英語論の立場であり、教科書の作成や構成も同様に变化する。次節では、英語教科書における先行研究の紹介を行う。

第2章：日本の英語教科書研究

第2節：英語教科書における国際理解研究

本節で紹介する先行研究の英語教科書は、すべて中学校の教科書を対象としたものである。中学校の教科書の登場人物は、「アメリカ出身のアメリカ人」や「中国出身の中国人」であり、出身と国籍が同一として固定されている。つまり、移民や2世の人々は登場しない。

加えて、登場人物の身体的特徴にしても、人種という観点から言えば、アフリカ系アメリカ人や韓国系カナダ人は一切登場しない。アメリカ人や、イギリス人の登場人物は皆、金髪の白人が大半である。

その表象に対して、学習者が登場人物に親しみを感ずるための教科書作成側の意図か、あるいは、その表象自体が教科書における無意識のバイアスかは、判別することはできないが、国籍やルーツに関わる登場人物の情報は一切登場していないのが現状であり、人種に関する観点では議論を行うことができない。

唯一、国籍を中心に行った分析が、本節で紹介する国際理解の観点である。本来、日本の国際理解教育には2つの意味があると魚住(2000)は示す。一つは、悲惨な戦争を繰り返さないために「人の心の中に平和の砦を築かなければならない」というユネスコ憲章の理念を受けた教育を示し、正義、自由、人権及び平和促進をスローガンとする「ユネスコ型」国際理解教育とされる。

もう一つは、日本の高度成長と国際化に伴い、世界で活躍する日本人の育成を目指した国際化の時代に対応する「臨教審型」の国際理解教育である。具体的には、臨時教育審議会⁴や教育課程審議会の答申の趣旨を反映した1989年告示の学習指導要領に示される国の教育政策として行われ、異文化理解や外国語能力の向上に重心が置かれた教育である。

本節で取り上げる先行研究は後者と関連する。日本の論文や図書の学術データベースであるCiNiiによると、国際理解の教科書研究は、1990年代以降に多く検出される。本節で紹介する先行研究の選定基準は、量的な調査と年代の比較研究が行われているものを基準として選考し、以下に三点紹介する。

⁴ 1984年8月に国会で可決された臨時教育審議会設置法に基づいて総理府に置かれ、当時の中曽根康弘内閣総理大臣の直属の諮問機関を示す。

一つ目は、江利川(1992)の「戦後の英語教科書にみる異文化理解の変遷」であり、戦後の1949年発行の教科書から1990年発行の教科書まで4期にわたる54冊を調査している。江利川(1992)の調査で明らかになったことは、戦後すぐの教科書では、設定場所や登場人物の9割をアメリカ(人)が占めており、主人公のJackとBettyを中心に、当時の米国の中産階級の生活を描いており、日本人及び日本は、ほとんど登場しない。

その登場人物比が、80年代初期には、日本(人)と米国(人)がほぼ互角の値で登場し、90年代初期より日本(人)が米国(人)を上回る値で構成され、登場人物の多国籍化や脱米国化が顕著になると報告している。これらの傾向を、江利川(1992)は、教科書の国際化と称し、国際化した日本社会における異文化接触の機会の増加を鑑みた結果と、臨時教育審議会答申で言及された自国への深い認識と敬愛を現したものと述べている。一方で、伝統的な伝記や文学教材は、依然として欧米中心である事実を指摘している。

二つ目は、金田(2005)の「日本の中学校英語教科書にみる異文化理解-題材の観点からの教科書分析」である。同氏は、江利川と同じ分析方法を採用し、1997年と2002年の30冊を分析している。

金田(2005)の報告によれば、アメリカ人の登場人物及び、中心円の登場人物の割合は他の国に比べると、依然として高い比率を保持するものの、2002年の教科書では、設定場所や舞台がほぼ日本であり、外国人観光客や日本在住の外国人が意思疎通の手段として英語を使用する構成に変化したことを報告している。

三つ目の長谷川(2016)の「中学校英語教科書における題材の取扱い」では、2002年と2012年の36冊を対象としている。長谷川(2016)の調査によれば、2012年の方が、登場人物の国籍の数が減少し、日本人の次に登場する人物の国籍が中心円の国が半数を占めていると報告し、登場人物や内容の多様化の必要性を指摘し、母語話者規範の脱却を訴える。

確かに、近年の中学校の教科書には、インド人や中国人、ブラジル人が登場し、一見すると英語の多様化が進んでいるようにも見受けられる。しかしながら、実際の教科書の中身においては、日本人と中心円出身の英語話者との会話が大半であり、また日本以外の場所で登場するのも中心円の国であり、未だ

に、英語は中心円の国を規範とするような印象を受ける。馬淵(2007)は、外国語科の目標である異文化理解と日本とアメリカを中心とした英語教科書の構成に対して、二項対立的な異文化理解が、多様性への感受性を低下させ、固定的、陳列的、反当事者的な文化の捉え方を助長すると批判している。

本節のまとめとして、国際共通語としての英語とは、各地域に根付き、土着の文化と融合して変容した独自の英語を示す。しかしながら、現状の中学校の教科書においては、英語の独自性と平等性についての理解が促進される要素も少ないと言わざるを得ないであろう。

以下は、先行研究をまとめた図表である。江利川(1992)と金田(2005)は、調査方法がほぼ同じであるため統合して示す。表 2-1 は、江利川(1992)と金田(2006)の各時代の教科書の特徴と学習指導要領における国際理解に相当する目標を示す。表 2-2 は数値データ、図 2-3 は、主人公の国籍別の推移、図 2-4 は、設定場所の国別の推移、図 2-5 は、国名・地名・題材の推移をグラフ化した。図 2-6 は、長谷川(2016)のデータをグラフ化したものである。

表 2-1：登場人物の国籍の変遷と学習指導要領の記載内容

	発行年	教科書の特徴	国際理解に相当する箇所
江利川 (1992)	1949年	登場人物・舞台・題材共に米国の一極集中が顕著に示されている。	英語を話す国民について知ること（1947年）
	1972年	米国の独占状態が続くが、日本人・アフリカ人・アジア人が登場する。	外国語を通じて外国の人々の生活やものの見方について基礎的な理解を得させる（1969年）
	1981年	日本人と米国人の値はほぼ互角になり、日本人が米国で活動する題材。中南米や中東アラブ地域の出現や少数民族に関する題材も登場	外国語を通じて外国の人々の生活やものの見方について基礎的な理解を得させる（1977年）
	1990年	日本はすべての項目で米国を抜いて一位になる。日本人が日本を舞台に活動する題材に加え、アジア人の登場が顕著になる。	外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを測ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う (1989年)
金田 (2005)	1997年	日本文化の発信が増加 他の地域と比べると、米国人は依然高い割合で登場する。	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う (1998年)
	2002年	日本に関する記述が大幅に増加し、環境問題や共通語としての英語を題材にした課も登場する。	

筆者作成

表 2-2 : 江利川(1992)と金田(2005)の調査結果

	出版年	日本	米国	英国	その他英語圏	西欧非英語圏	旧ソ連東欧	アジア	中東	アフリカ	中南米	その他
主人公	1949	1	88	0	0	3	0	0	0	0	0	0
	1972	8	59	2	0	4	2	2	0	2	0	1
	1981	36	37	1	4	2	1	1	0	1	1	2
	1990	32	32	4	3	3	0	2	0	1	0	3
	1997	34	20	4	7	3	0	3	0	6	0	10
	2002	35	24	1	18	0	0	7	1	2	2	9
設定場所	1949	3	78	3	0	4	0	0	0	0	0	0
	1972	5	59	4	1	2	1	0	0	2	0	0
	1981	18	37	4	3	3	1	1	1	2	1	3
	1990	34	27	5	4	3	0	5	1	3	1	3
	1997	44	10	1	1	3	0	2	1	1	0	16
	2002	70	9	2	4	0	0	7	0	1	1	20
国名地名題材	1949	3	27	11	0	21	0	3	0	0	0	3
	1972	23	31	16	3	13	3	5	0	3	2	2
	1981	40	33	11	6	18	2	8	1	4	4	0
	1990	41	39	16	17	22	1	17	2	5	1	4
	1997	25	20	6	3	2	0	10	1	6	2	13
	2002	34	24	6	10	3	1	15	2	3	3	6

筆者作成

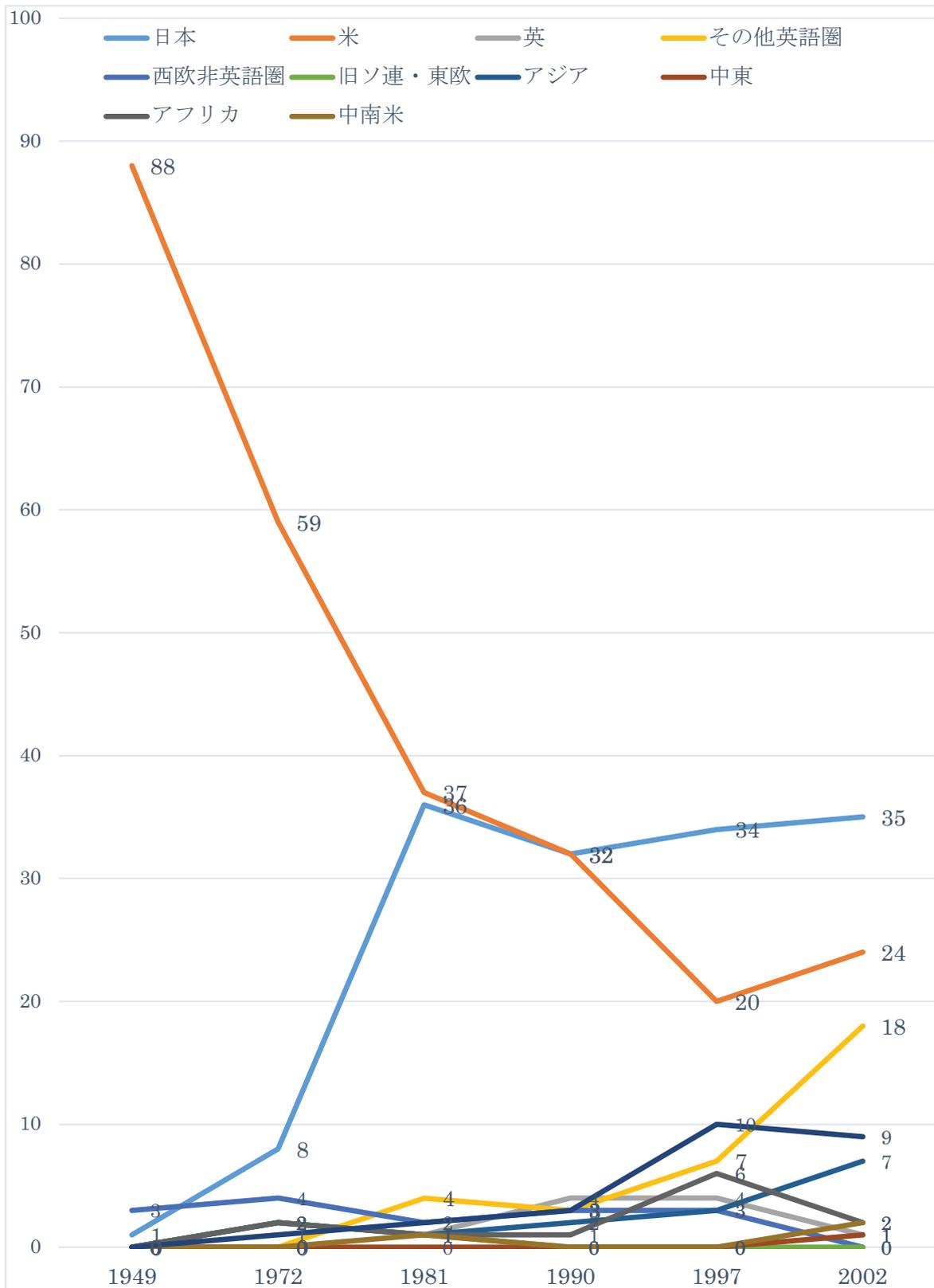


図 2-3 : 英語教科書における主人公の国籍推移(筆者作成)

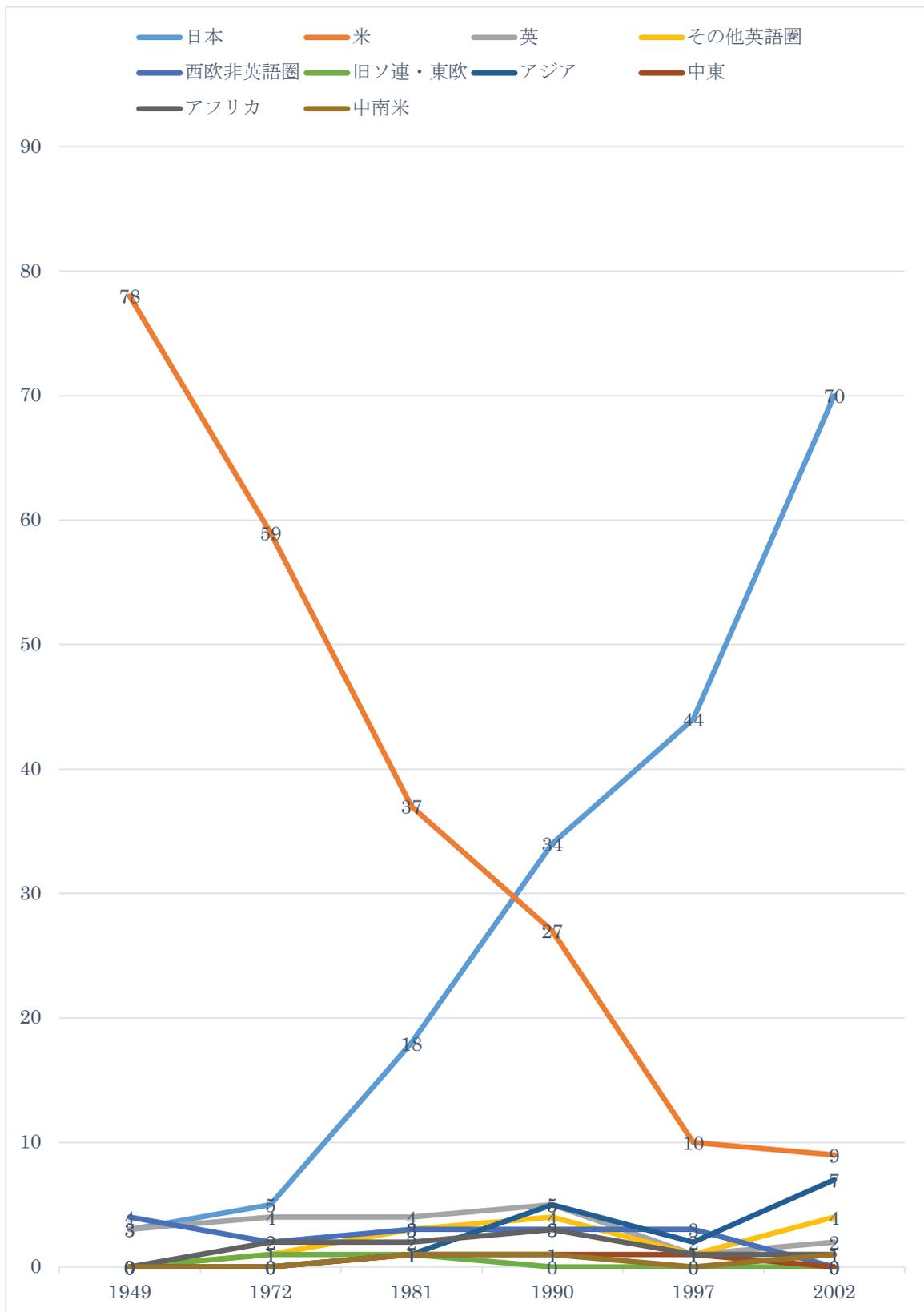


図 2-4 : 英語教科書における設定場所の国別の推移 (筆者作成)

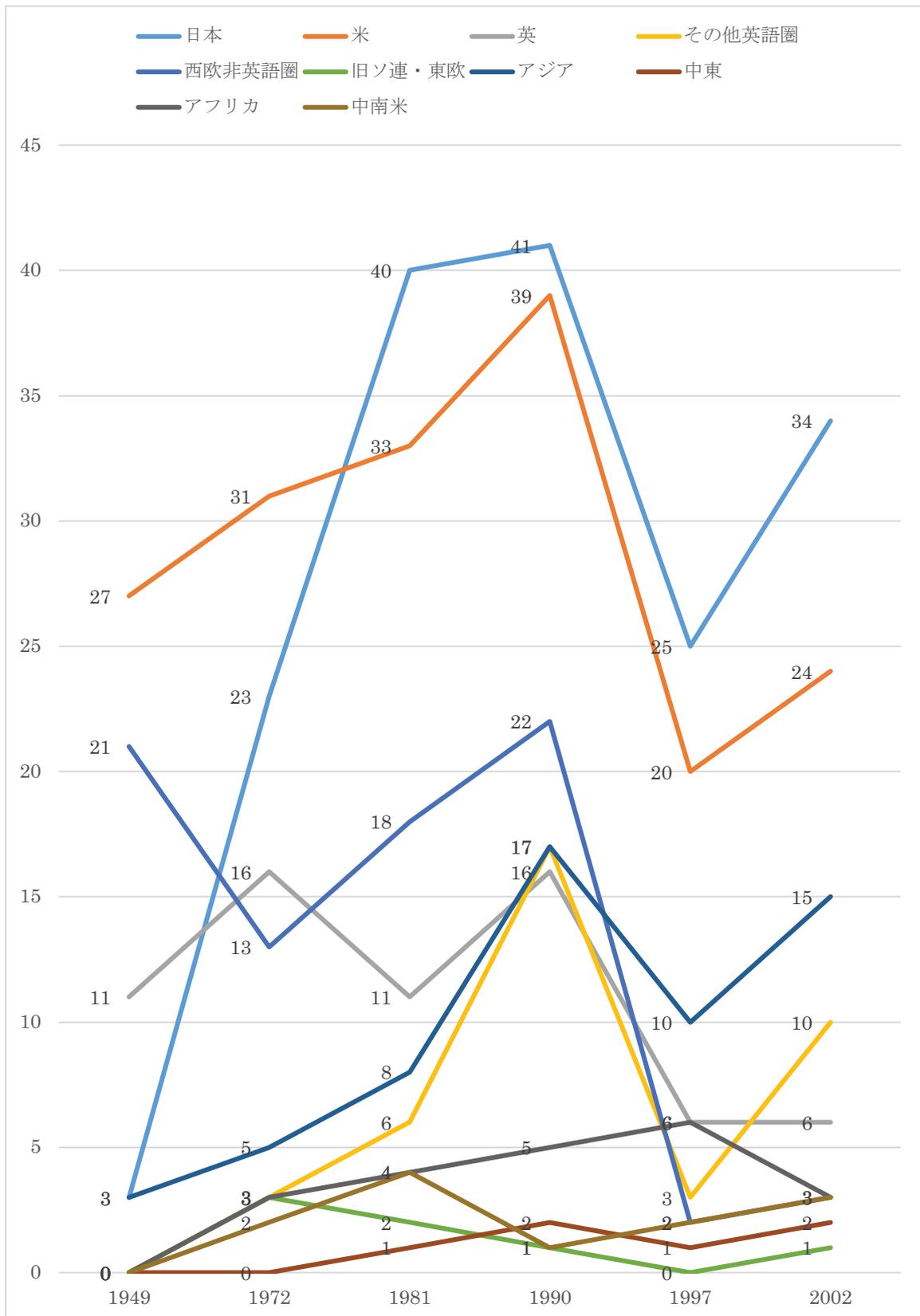


図 2-5 : 英語教科書における国名・地名・題材の推移 (筆者作成)

表2-3：長谷川(2016)における登場人物の国籍の比較

教科書名・出版社	登場人物の国籍の数 (英語を母語とする国の割合)	
	2002年	2012年
Columbus 21 English Course 光村図書	10 (65%)	6 (56%)
New Crown English Course 三省堂	6 (60%)	5 (60%)
New Horizon English Course 東京書籍	4 (89%)	4 (72%)
One World English Course 教育出版	6 (46%)	4 (50%)
Sunshine English Course 開隆堂	7 (84%)	5 (84%)
Total English New Edition 学校図書	2 (66%)	4 (50%)

筆者作

	2002 年度	2012 年度																																				
光 村 図 書	<p>2002 年度</p> <table border="1"> <tr><th>国</th><th>割合</th></tr> <tr><td>米国</td><td>30%</td></tr> <tr><td>韓国</td><td>15%</td></tr> <tr><td>豪</td><td>15%</td></tr> <tr><td>NZ</td><td>5%</td></tr> <tr><td>カナダ</td><td>5%</td></tr> <tr><td>英国</td><td>10%</td></tr> <tr><td>スペイン</td><td>5%</td></tr> <tr><td>ガーナ</td><td>5%</td></tr> <tr><td>ブラジル</td><td>5%</td></tr> <tr><td>シンガポール</td><td>5%</td></tr> </table>	国	割合	米国	30%	韓国	15%	豪	15%	NZ	5%	カナダ	5%	英国	10%	スペイン	5%	ガーナ	5%	ブラジル	5%	シンガポール	5%	<p>2012 年度</p> <table border="1"> <tr><th>国</th><th>割合</th></tr> <tr><td>米国</td><td>50%</td></tr> <tr><td>韓国</td><td>26%</td></tr> <tr><td>中国</td><td>6%</td></tr> <tr><td>豪</td><td>6%</td></tr> <tr><td>カンボジア</td><td>6%</td></tr> <tr><td>ガーナ</td><td>6%</td></tr> </table>	国	割合	米国	50%	韓国	26%	中国	6%	豪	6%	カンボジア	6%	ガーナ	6%
国	割合																																					
米国	30%																																					
韓国	15%																																					
豪	15%																																					
NZ	5%																																					
カナダ	5%																																					
英国	10%																																					
スペイン	5%																																					
ガーナ	5%																																					
ブラジル	5%																																					
シンガポール	5%																																					
国	割合																																					
米国	50%																																					
韓国	26%																																					
中国	6%																																					
豪	6%																																					
カンボジア	6%																																					
ガーナ	6%																																					
三 省 堂	<p>2002 年度</p> <table border="1"> <tr><th>国</th><th>割合</th></tr> <tr><td>米国</td><td>33%</td></tr> <tr><td>ケニア</td><td>20%</td></tr> <tr><td>中国</td><td>20%</td></tr> <tr><td>カナダ</td><td>7%</td></tr> <tr><td>英国</td><td>13%</td></tr> <tr><td>豪</td><td>7%</td></tr> </table>	国	割合	米国	33%	ケニア	20%	中国	20%	カナダ	7%	英国	13%	豪	7%	<p>2012 年度</p> <table border="1"> <tr><th>国</th><th>割合</th></tr> <tr><td>米国</td><td>20%</td></tr> <tr><td>インド</td><td>20%</td></tr> <tr><td>中国</td><td>20%</td></tr> <tr><td>豪</td><td>20%</td></tr> <tr><td>英国</td><td>20%</td></tr> </table>	国	割合	米国	20%	インド	20%	中国	20%	豪	20%	英国	20%										
国	割合																																					
米国	33%																																					
ケニア	20%																																					
中国	20%																																					
カナダ	7%																																					
英国	13%																																					
豪	7%																																					
国	割合																																					
米国	20%																																					
インド	20%																																					
中国	20%																																					
豪	20%																																					
英国	20%																																					
東 京 書 籍	<p>2002 年度</p> <table border="1"> <tr><th>国</th><th>割合</th></tr> <tr><td>米国</td><td>33%</td></tr> <tr><td>豪</td><td>45%</td></tr> <tr><td>カナダ</td><td>11%</td></tr> <tr><td>バングラ</td><td>11%</td></tr> <tr><td>ドイツ</td><td>11%</td></tr> </table>	国	割合	米国	33%	豪	45%	カナダ	11%	バングラ	11%	ドイツ	11%	<p>2012 年度</p> <table border="1"> <tr><th>国</th><th>割合</th></tr> <tr><td>米国</td><td>28%</td></tr> <tr><td>シンガポール</td><td>28%</td></tr> <tr><td>カナダ</td><td>28%</td></tr> <tr><td>豪</td><td>16%</td></tr> </table>	国	割合	米国	28%	シンガポール	28%	カナダ	28%	豪	16%														
国	割合																																					
米国	33%																																					
豪	45%																																					
カナダ	11%																																					
バングラ	11%																																					
ドイツ	11%																																					
国	割合																																					
米国	28%																																					
シンガポール	28%																																					
カナダ	28%																																					
豪	16%																																					

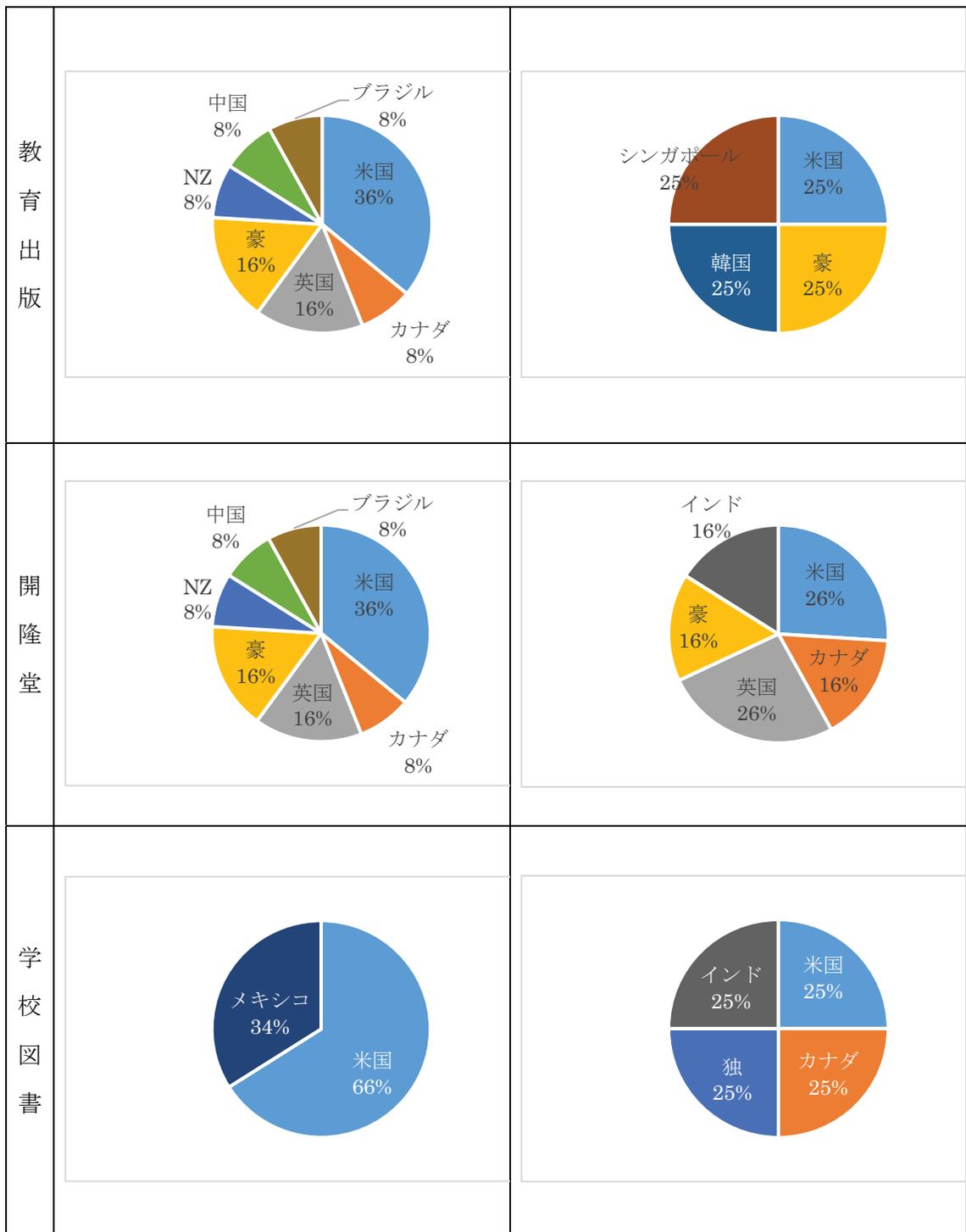


図 2-6：長谷川(2016)における登場人物の国籍の比較(筆者作成)

第2章：日本の英語教科書研究

第3節：英語教科書におけるジェンダー研究

本節では、ジェンダーの観点から分析した教科書研究について述べ、次に英語教科書の先行研究を紹介する。教科書のジェンダー研究は、1970年頃より欧米を中心に行われ、現在では、日本をはじめ、アジア諸国、中東、アフリカと世界全土の教科書に及んでいる⁵。

ジェンダー研究において、頻繁に引用される理論は、Jackson (1990) の隠れたカリキュラムである。隠れたカリキュラムとは、学習指導要領や授業計画などの明示的なカリキュラムと異なり、教師の発言や集団生活における行動や社会的規範を、生徒が自覚することなく身につける行為を示す。この理論を用いて Sadkar and Sadker (1975) や、Clarricouates (1978) らが、授業の参与観察やインタビューを行い、教師が生徒の性別によって異なる将来への期待を持ち、男子生徒が女子生徒よりも注目や発言機会が多く与えられ、女子生徒が男子生徒に比べ、発言や行動が規制された事実を実証的に報告された。日本においては、隠れたカリキュラムが教育における男女平等を阻害するとして、女性教員を中心とした働きかけにより、1990年頃より家庭科の男女共修や男女混合名簿が実施された。

教科書のジェンダー分析を行ったほぼ全ての教科書に共通していることは、女性が男性に比べて登場回数が少なく、女性は家事と子育てという伝統的な性別役割分業に従事しており、その傾向は、具体的な登場人物が存在し、男女の

⁵ 一般的なジェンダーに関する多くの議論は、男女の生物学的な差から始まり、社会的に、文化的に、心理的に構築された男女の差異と見なされてきた。しかしながら、近年では、男女の二項対立を超えるものであり、Connell & Pearse (2015, p. 8) は、男女ではなく、個人間や集団間での関係性や、社会的取り決め (social arrangements) であると説明する。しかしながら、教科書におけるジェンダー研究は、未だに男女の性別によって区分されており、現実社会と教科書の男女及びジェンダーの取り扱いには乖離があることを指摘しなければならない。

性別が表出しやすい歴史や文学だけでなく、様々な科目においても同様の結果が報告されている。

例えば、Elgar (2004) は、理科の教科書における挿絵や写真描写を調査した結果、理科の実験をしている描写は、主に男性であり、妊娠や子育て、遺伝子の生殖に関わる題材においては、女性が多く描写されている事実を指摘した。体育の教科書の写真描写や挿絵を調査した Taboas-Pais and Rey-Cao (2012)は、男性の登場回数が、女性よりも多い事実に加え、勝負を決める競争的な競技や、野外での運動に従事している姿は男性が多く、芸術的で華麗なイメージのダンスや、日常生活における軽い運動に従事する姿は、女性が多く描写されていると報告している。

教科書の男女描写に関する従来の男女不平等やステレオタイプの記述に関しては、Mustapha et al (2012)では、未だに近年の教科書においても、ジェンダーに由来する固定化された性別役割分業やステレオタイプの描写や記述が数多く残されている事実は否定できないと言及する。

英語の教科書のジェンダー分析については、1970年代初期より米国移民のための第二言語習得の教科書が研究に使用され、現在では共通語としての世界的な英語使用の背景から、周辺円や拡大円の国で使用されている教科書が研究対象とされている。英語教科書のジェンダー分析の特徴は、次の5点が挙げられる。

- 1) 男性が主人公であること（女性の不在）
- 2) 家事や育児に従事する女性の描写（性別役割分業）
- 3) salesmanやhumanの様にmanが含まれる単語使用
- 4) Miss.やMrs.の様に、女性の婚姻関係で決定される敬称の使用
- 5) he or sheやMr. and Ms.など、男女混合の際の男性の優先

日本の英語教科書を分析した研究として、Sakita (1995)は、中学1年を初級、高校1年を中級、高校2年と3年の総合、読解、作文の英語教科書を上級と設定し、各学年で2冊ずつ合計10冊分析した。結果として、初級の教科書においては、登場人物はやや男性が上回るものの、主人公の数で言えば、女性が優位であると報告している。しかしながら、中級・上級の教科書においては、学年と難易度

が上がるごとに、男性登場人物の優位性を指摘している。

ラジオ英会話の教科書「優しいビジネス英語」の6冊を分析した Matsuno (2002)は、登場人物の性別や職業、会話中の中での固定化されたジェンダー意識について質的分析を行った結果、日本社会における固定化された女性像を想起させる記述や女性特有の話題や内容が多く検出されたと報告している。

従来の教科書研究における単語の計上手法は、ほぼ研究者の手作業であったが、2010年頃よりコンピューターを使用した分析も行われるようになった。例えば、香港の小学校の英語教科書を分析したYang (2012)の研究では、**he**や**she**などの特定の単語の頻度では、**he**の方が多く教科書に登場し、**strong**や**young**など、男性や女性を想起させる単語の前後を調査した結果、性別による動詞や形容詞の使い分けを報告した。

Suezawa (2017)による日本と韓国と中国の高等学校の教科書3冊の分析では、女性の登場人物が多く表象されているのは韓国の英語教科書ではあるが、一方で伝統的な性別に基づく役割分業も未だ描かれている事実を指摘し、中国の教科書では男性に**rich** や**brave** などの形容詞が使用され、女性には使用されていないこと、日本と韓国では女性には、年齢を示す**aged** や**young** が使用され、従来の教科書におけるステレオタイプを指摘した。

日本の高等学校の2種類の英語教科書4冊を調査したLee (2014)では、女性の登場人物よりも圧倒的に男性の登場人物が多く、男性を表す**he**や**man**の名詞と共起する形容詞には**rich**、**strong**、**tough-looking**が検出され、女性を表す**she**や**woman**の前後には**young**や**old**など外見や年齢を示す形容詞及び、感情を表す**irritated**、**upset**などが使用されている事実を示した。

また末澤(2018)は、全国の公立高等学校における占有率の6割を占める11冊のコミュニケーション英語1を分析した結果、女性が男性より多く登場したのは1冊のみであり、社会に実在する人物が多く教科書に掲載されている事実も加え、男性中心で教科書が構成されている事実を指摘した。

第2章：日本の英語教科書研究

第4節：リサーチ・ギャップとリサーチ・クエスチョン

2節と3節の先行研究で示されたように、日本の英語教科書には2重問題点が存在する。一つは、人種や民族の問題とも関連する登場人物の「国籍」と、教科書の登場人物における職業や振る舞いなど、全ての要素が複雑に交錯する「ジェンダー」である。

Bolton (2008)は、アジア圏内で、英語を様々な目的のために共通語として使用する人々は8億人に上ると報告し、鳥飼(2011)は、グローバル時代において、英語は共通語である認識から、通じれば良いというスタンスが主流だと示している。このような立場から英語教科書を論じれば、登場人物の大半が英語を公用語とする国(フィリピンやマレーシアやインド)や英語を外国語とする国(中国やトルコやブラジル)という構成で描かれる必要がある。

ジェンダーの観点で言えば、久保田(同)が指摘した中学校の教科書に登場するALTと呼ばれる外国語指導助手が全員女性という事実は、ある種のステレオタイプを学習者に与えると言えるであろう。加えて、教科書自体が男性主体の構成であるならば、それは、女子生徒のキャリア形成の妨げを助長するステレオタイプスレットの要因となり得ることも重ねて指摘したい。

石原(2005)は、今日の教育は「ハードなイデオロギー装置」と指摘し、教科書には、理想とする社会や、どういう未来を生きる様に仕向けられているのかが描かれていると述べる。リサーチ・ギャップとしては、従来の先行研究は、中学校の教科書を取り扱い、高校の教科書に関しては未開拓であり、且つ、国際理解とジェンダーの両方を分析した研究は筆者の調査では検出できなかった。したがって、本稿では、高等学校の教科書及び、その教科書で学んだ大学生を調査対象とし、教科書内容の比較研究と、実証的な研究として、国際理解への意識や英語の規範、ジェンダー意識について以下にリサーチ・クエスチョン(RQ)と作業仮説を提示する。

RQ1：高等学校の英語の教科書では、日本と米国の二項対立の状況はどう表象されるか。

仮説：多様な国籍の人物が出現する国際英語論の方向性が示される。

RQ2：大学生の国際理解へ意識や態度に対して、学部間ではどのような差異が存在するか。

仮説：英語専攻と英語非選考の学生では、捉え方が異なる。

RQ3：大学生の英語規範は、どう示されるのであろうか。

仮説：教科書と同じように、国際英語論で示される。

RQ4：現行の高校教科書の男女平等は、どう表象されるか。

仮説：過去の教科書と比べて、女性の登場回数が増え改善傾向にある。

第3章：英語教科書における多様性の研究

第1節：英語教科書〈コミュニケーション英語〉における多様性

本節では、現行の高校の教科書における日米の二項対立構造の検証として、登場人物の国籍に焦点を当てた研究を報告する。

第2章の先行研究で紹介したように、国際理解における英語教科書研究では、中学校の教科書を対象とし、登場人物の国籍に焦点を当て、日本か外国、事実上は英語を主要な言語とする国を主とし、英語の規範的な側面から議論が行われていた。

中学校における教科書採択は、6つの出版社による6種類の教科書の中から、公立学校では、市町村や都道府県の教育委員会が行い、国立及び私立高校では校長が採択を行っている。一方、高等学校の教科書採択では、中学校のような広域採択制が採用されておらず、教科書の採択は各学校に委ねられている。

現在「コミュニケーション英語 I」では、13社31種類の教科書が出版されている。本稿では、採択率の合計がおよそ7割を占める4社（東京書籍・三省堂・啓林館・数研出版）の2017年改訂版の11冊の教科書の分析を行う。比較対象とする教科書は、1990年及び2000年初期に発行された英語教科書とし、書籍名及び出版社を表3-1に示す。

表 3-1：本稿で用いる教科書 22 冊の出版社とタイトル

2000 年発行	
出版社	教科書タイトル
新興出版社啓林館	Tomorrow
東京書籍	New Scope 1 Second edition
文英堂	UNICORN ENGLISH COURSE1
文英堂	APRICOT
三省堂	CROWN
三省堂	Orbit
第一学社	Evergreen Reading
研究社	The New Age English
新興出版社啓林館	MILESTONE
新興出版社啓林館	ACORN English Course I
大修館	Genius
合計 133 課（登場人物 276 人）（1 冊あたり平均 12 課）	
2017 年発行	
出版社	教科書タイトル
三省堂	CROWN
三省堂	VISTA
三省堂	MY WAY
東京書籍	All aboard
東京書籍	Power On
東京書籍	PROMINENCE
数研	POLESTAR
数研	BIG DIPPER
数研	COMET
啓林館	ELEMEN T
啓林館	LANDMARK
合計 112 課（登場人物 181 人）（1 冊あたり平均 10 課）	

筆者作成

登場人物の国籍の分析を行う前に、内容や題材に関する分析結果を報告する。それぞれの教科書の1課の内容を、大津(1997)の国際理解教育のカリキュラムを参考に、最初に4つの大きなカテゴリーに分類した。次に、そのカテゴリーにおいて題材や内容に沿って12のカテゴリーに細分化した。(図3-1参照)

大きなカテゴリーとして「多文化社会」「グローバル社会」「地球的課題」及び、その課が、歴史上の人物や社会貢献・ある種の偉業を達成した人物に焦点を当てた課を「偉人」としている。

表3-2は、各カテゴリーの定義と具体例を示し、表3-3に結果を示す。

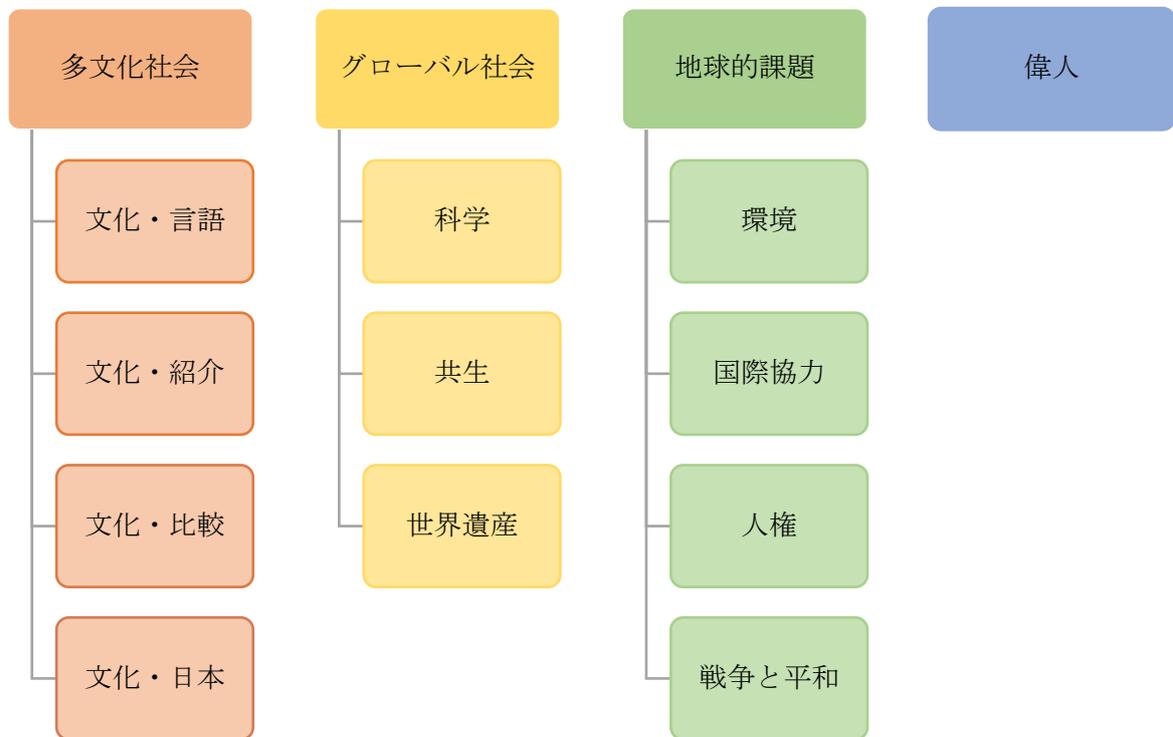


図3-1：コミュニケーション英語Iにおける題材・内容分析枠組み（筆者作成）

表 3-2：題材・内容の分類の定義と例

多文化社会	
文化 言語	文字や言語、手話や動物同士の意思疎通など伝えることをテーマとした課 (例) 国際語としての英語の役割・絵で示された視覚記号
文化 紹介	単一の国や地域の文化 ⁶ 事象紹介した課（主として米国と英国） (例) 英国でのお茶の習慣・米国の学校の制服
文化 比較	二つ以上の国や地域の文化事象の紹介した課 (例) 日本とインドの食文化の話・国ごとの血液型と性格の見解
文化 日本	日本の文化事象の海外における影響 (例) 浮世絵と歌川広重・英語で落語を行うこと
グローバル社会	
科学	世界や日本の科学技術の進歩や発展を紹介した課 (例) 携帯電話・インターネット・睡眠中の脳の状態
共生	文化や習慣や人種など、多様な他者との共生、地球的な物の見方を示唆した課 (例) 人間が白熊を育てる話・宇宙から眺めた地球へのメッセージ（間接的には、環境保護や保全を訴える）
世界 遺産	ユネスコの定義する世界遺産（有形・無形を含む）に登録された場所や地域・事象を紹介した課 (例) イースター島のモアイ像・ペルーのマチュピチュ遺跡
地球的課題	
環境	環境破壊の現状や、身近なリサイクルの事例や、地域的な取り組みなど、環境保護の観点から人々の活動や事象を取り上げた課 (例) 海洋汚染とその保護について・ペットボトルのリサイクル
国際 協力	困難な状況に陥った人々に尽力する人や団体を取り上げた課 (例) 高校生が車椅子を寄付する話・カンボジアで井戸を掘る僧侶の話
人権	差別や人権をテーマとした課 (例) シエラレオネのダイヤモンド採掘・アパルト・ヘイトについて

⁶ Liddicoat (2004)の定義に従い、本稿での文化とは、ある一定の人々に共通する概念・態度・価値・信念・習慣・行動様式・伝統・生活様式・芸術を示す。

戦争と 平和	戦争及び平和をテーマとする課 (例)長崎での原爆投下・写真家が撮った戦時中の1枚の写真について
偉人	
その課全体が、社会的貢献や偉業を果たした著名なある人物の半生、人生・生涯を描き、規範的・模範的なメッセージ性の強い課	

筆者作成

表 3-3：英語教科書における題材・内容分析結果

		2000 年	2017 年
多文化社会	文化・言語	13	5
	文化・紹介	28	0
	文化・比較	8	11
	文化・日本	3	19
グローバル社会	科学	12	9
	共生	7	6
	世界遺産	4	4
地球的課題	環境	13	13
	国際協力	2	5
	人権	3	3
	戦争と平和	5	6
偉人		12	30
読み物・カテゴリーなし ⁷		23	1

筆者作成

⁷ 上記のカテゴリーが示すような題材ではなく、文学的作品や、文章の読解の教材用として用いられた課。主に 2000 年の教科書に見られた。(例)宮沢賢治の『注文の多い料理店』や、若いカップルが NY で夢を掴む話、野球をする少年と母親とコーチの話など。

次に、登場人物の国籍について報告する。図 3-2 は「偉人」における登場人物の国籍を示す。2000 年の教科書においては、中心円（米国と英国）と日本の二項対立の構成であったが、2017 年の教科書では、日本人の登場が 4 倍以上に増え、各大円の国の人物が登場する。次に全登場人物の国籍を図 3-3 に示す。

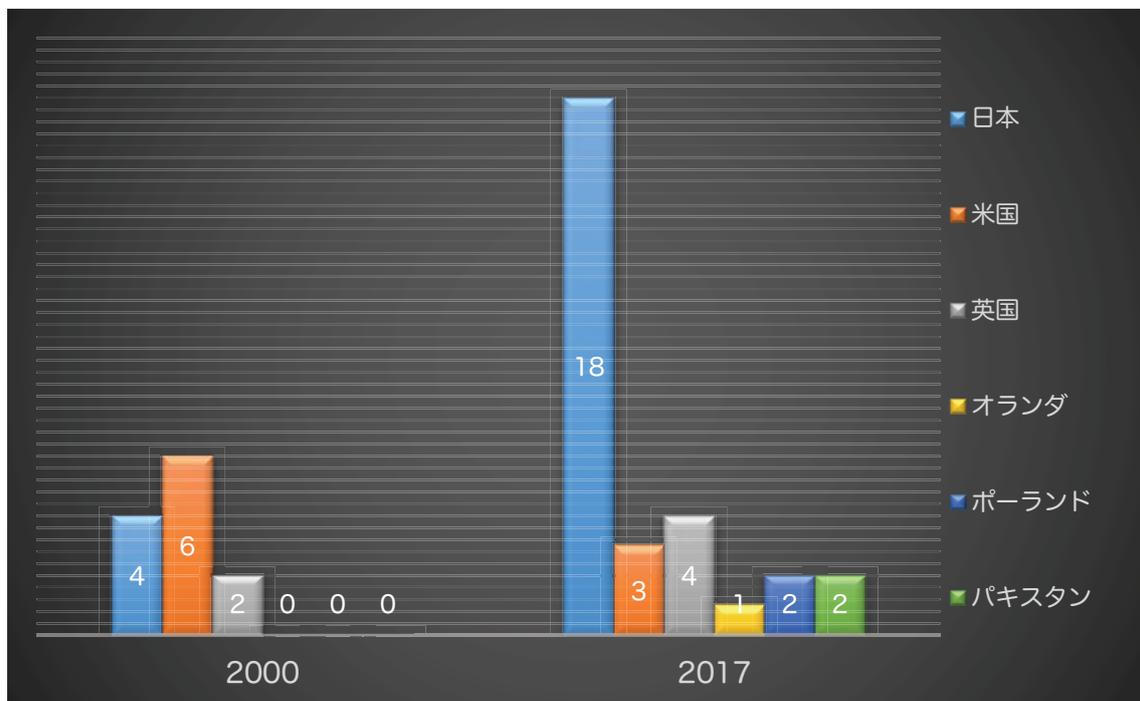


図 3-2 : 「偉人」カテゴリーにおける登場人物の国籍 (筆者作成)

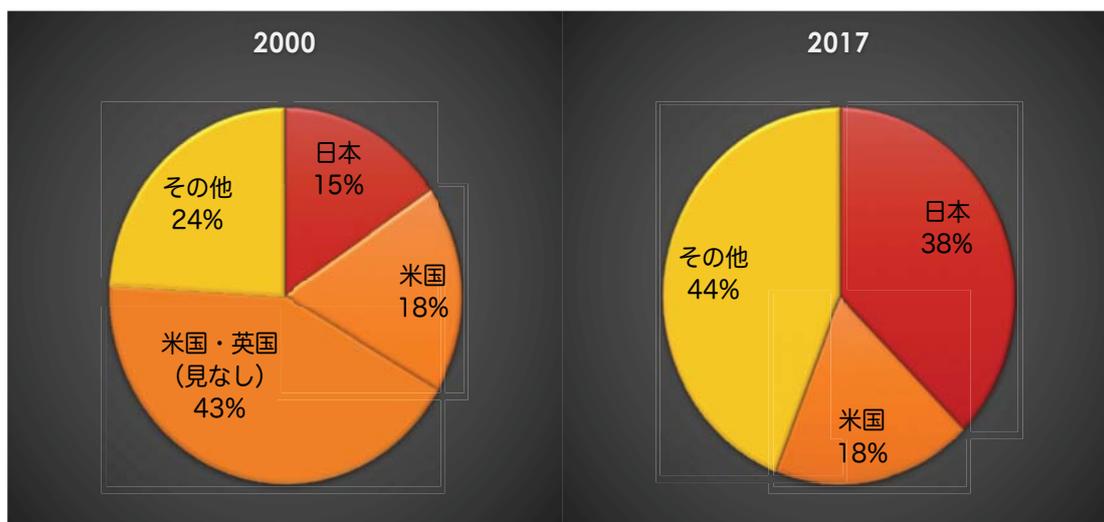


図 3-3 : コミュニケーション英語 I における全登場人物の国籍 (筆者作成)

図 3-3 で示されたように、2000 年の教科書での「米国・英国（見なし）」とは、米国及び英国の「文化・紹介」の課に登場した人物であり、国籍が本文中では明示されていないが、紹介されている国や地域と同様の国籍と判断した。

その結果、2000 年の教科書では、半数を越える登場人物が米国及び英国の出身であり、偉人同様に、日米の二項対立が成立する。

一方、2017 年の教科書においては、日本と米国以外の「その他」の国、特に周辺円・拡大円に属する国の登場が顕著であり、米国・英国基準の英語の教科書から、世界の多様な地域や国々を、共通語としての英語を通じて学ぶ構成に変化したと言えるであろう。

（表 3-4 参照）

表 3-4：日本と米国以外の登場人物の国籍

2000 年	イタリア・ <u>イギリス</u> ・ <u>オーストラリア</u> ・オランダ・韓国・ <u>カナダ</u> ・ギリシャ・ケニア・スイス・タイ・中国・ドイツ・ブラジル・フィリピン・フランス・メキシコ・ノルウェー 合計 17 ヶ国中、3 ヶ国が中心円の国
2017 年	アイルランド・アルゼンチン・イタリア・インド・ <u>イギリス</u> ・オランダ・カンボジア・ケニア・ジャマイカ・スペイン・スリランカ・ドイツ・フランス・ベルギー・ペルー・ポーランド・モンゴル・ロシア・中国・南アフリカ共和国 合計 20 ヶ国、1 ヶ国が中心円の国

筆者作成

第3章：英語教科書における多様性の研究

第2節：国際理解尺度を用いた質問紙調査

本節では、英語専攻の大学生と非専攻の大学生における国際理解の認識の差及び英語規範について検証するため、質問紙調査を行った。被験者は、近畿圏および首都圏の大学に所属する大学生 100 名（男性 50 名・女性 50 名）を対象とした。

被験者の内訳は、50 名は英語を主専攻とする学生であり、全員が半年から 1 年間の留学経験がある者、残りの 50 名は英語以外の科目を主専攻とする学部
に所属する学生である。海外経験は英語専攻の学生と比べると、期間が短いものの、1 人を除いては全員が海外経験を行っている。被験者属性の内訳を表 3-5 に示す。

表 3-5：質問紙調査対象者の内訳

	英語専攻（50 名）	英語非専攻（50 名）
学部	国際英語学部 英米語学部 国際コミュニケーション学部	経済学部 経営学部 薬学部 総合情報学部 理学部 工学部 農学部
性別	男性 25 名 女性 25 名	男性 25 名 女性 25 名
留学経験	全員半年以上の留学 経験あり 中心円を主とする国	1 週間程度の旅行（35 名） 1 ヶ月の語学留学（12 名） 1 ヶ月のインターン（2 名） 海外経験なし（1 名）

筆者作成

調査に使用した質問紙は、鈴木・坂元ら（2000）による国際理解測定尺度の質問に、英語規範に関する質問項目を追加し、以下の 24 項目から構成され、質問 1 から質問 24 までは、5 段階の尺度で回答を求め、質問 25 は自由記述とした。

質問 1 から質問 15 までは国際理解に関する質問、質問 16 から質問 25 までは英語規範の質問であり、結果を表 3-6 及表 3-7 に示す。

結論を先に言えば、両グループの回答の結果が、統計的に有意であるかを確かめるために、各質問項目の点数を 5 点満点で合計し、有意水準 5% で両側検定の t 検定を行った。

国際理解の質問では、 $t(11)106, p<.05, r=.114$ と有意な差が検出され、英語規範に関しても、 $t(98)=3.019, p<.05, r=.292$ と有意な差が報告された。

国際理解の質問に関しては、英語専攻群は、質問 1 の「外国人と仲良くすることに抵抗感がない」という質問、質問 5 の「海外に行ったら、その国の人々と同じように生活したいと思う」及び、質問 6 の「外国の文化を理解したいと思わない」という異文化理解には積極的な姿勢を示している。

しかしながら、一方で、質問 2 の「自分の住む街に外国人が沢山住んでいても構わない」という国内における多文化共生や、質問 3 の「途上国の人々を、自分と対等に見ることは難しい」という質問においては、英語非専攻群の方が寛容的な姿勢を示していた。また、地球的課題とされる国際社会の問題に対しては、英語非専攻群の方が、僅差ではあるが高い関心を寄せていることも明らかになった。次に、英語規範に関する質問の結果を表 3-7 に示す。

表 3-6：質問紙調査の質問項目

	英語 専攻	英語 非専 攻
5 大いに思う 4 やや思う 3 分らない 2 あまり思わない 1 全く思わない		
1 外国人と仲良くすることには抵抗感がある。	1.72	2.02
2 自分の住む街に外国人が沢山住んでも構わない。	3.74	3.86
3 途上国の人々を自分と対等に見ることは難しい。	2.29	2.02
4 人や友達を国や出身で選んではいけない。	4.50	4.52
5 海外に行ったら現地の人々と同じ生活をしたい。	4.02	3.98
6 外国の文化を理解したいと思わない。	1.86	2.10
7 原始的な生活を送る人々は近代的な生活に変えた方が良 い。	1.97	2.36
8 飢餓に苦しむ人々のために何ができるか考えることがあ る。	3.24	3.76
9 世界の平和や戦争について考えることがある。	3.78	3.88
10 廃棄物による土壌・水・大気汚染の状況について知りたい。	3.38	3.54
11 世界の人口問題に関心がある。	3.12	3.5
12 ゴミを減らす努力やリサイクルをしている。	3.33	3.38
13 男女平等な社会の実現のために何ができるかを考える。	3.34	3.40
14 国際連合や世界銀行など国際的な仕事に興味がある。	3.14	3.06
15 海外青年協力隊や国際的なボランティアに参加したい。	3.33	3.32

筆者作成

表 3-7：学習者への質問紙調査の結果（英語規範に関する質問）

	英語 専攻	英語 非 専攻
5 大いに思う 4 やや思う 3 分らない 2 あまり思わない 1 全く思わない		
16 英語を話せるようになりたいとは思わない。	1.69	1.92
17 簡単な挨拶やお礼は英語で言える。	4.50	4.64
18 自己紹介程度や簡単な日常会話なら英語で話すことができる。	4.69	4.22
19 英語でかかれた新聞や雑誌を読むことができる。	3.72	3.14
20 英語を勉強するなら、先生は英語を母語とする人が良い。	4.14	3.82
21 英語を母語とする人の英語が、生徒のモデルになると思う。	4.02	3.66
22 英語の先生がフィリピン人やマレーシア人であることに違和感がある。	2.48	1.82
23 シンガポール訛りやインド訛りの英語など、様々な英語を勉強したい。	3.03	3.28
24 英語は共通語なので、どんな発音や文法でも意思疎通ができれば良い。	3.86	3.84
25 質問 20 から 24 の理由をお書き下さい。 (自由記述)	自由記述	

筆者作成

この英語規範の質問から言えることは、質問 20 の【英語を勉強するなら、先生は英語を母語とする人が良い。】から質問 24 の【英語は共通語なので、どんな発音や文法でも意思疎通ができれば良い。】において、英語を専攻する学生ほど、母語話者教師への強い憧れや期待があることが伺える。その理由を、自由

記述の内容を踏まえて考察したい。

自由記述の分析方法は、文化人類学者の川喜田二郎による KJ 法を使用した。有効な回答数は、100 件中 73 件であり、残りの 27 件は無回答であった。英語母語話者を支持する理由として、記述の内容から 1)憧れ、2)理想化された学習方法、3)本物・本場という要因に分類し、国際英語論を支持する記述では、1)意思疎通の手段、2)多様な英語という要因に分類することができた。(図 3-4 参照)



図 3-4 : 英語規範に関する自由記述の結果 (英語専攻・非英語専攻) (筆者作成)

表 3-8：英語規範に関する自由記述の結果

英語母語話者規範
<p>【憧れ】 11 件</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ネイティブの様に話せたら<u>かっこいい</u>と思うからです。(英語専攻) ● 英語を勉強したきっかけは、<u>アメリカ人になりたい</u>からスタートしました。(英語専攻) ● ただ単に<u>かっこいい</u>だけ。(英語専攻・英語非専攻) 3 件 ● <u>ネイティブみたい</u>に英語をすらすら話す姿に憧れがあります。(英語専攻) ● 日本人の話す英語はかっこ悪い。(英語非専攻) ● 高校の先生が、<u>ネイティブ並</u>に英語を話せていて素敵だったから。私もそうなりたと思った。(英語専攻) ● 発音が<u>ネイティブ並</u>にできたら、それだけでかっこいい。(英語専攻) ● 訛りがあるのは良いと思うが、<u>自分ではできるだけネイティブの様に話したい</u>。(英語専攻) ● 英語が好きだから (英語専攻)

英語母語話者規範
<p>【学習法】 17 件</p> <ul style="list-style-type: none"> ● <u>まずは英語ネイティブ</u>から学んだ方がいいと思う。(英語専攻・英語非専攻) 4 件 ● <u>どうせ勉強するなら、ネイティブから学びたい</u>。(英語専攻・英語非専攻) 3 件 ● <u>ネイティブの英語を真似る</u>ことが英語の向上の 1 番の方法だから。(英語専攻) ● せっかく英語を学ぶのなら、<u>訛りのない英語</u>を学び、綺麗な発音で話せるようになりたいと思うから。(英語非専攻) ● 日本でも訛っている言葉は聞き取りにくいし、理解しにくいので、それは英語でも同じだと思うので、<u>訛っていない英語の発音や勉強</u>をしたい。(英語非専攻) ● 英語を話す機会に於いては、相手に伝われば良いと考えていますが、<u>先生がネイティブであることに越したことはない</u>と考えます。<u>意思疎通を図るためには発音に重き</u>があると考えます。なので、訛りにおいては見識を深めるに越したことはありませんが、<u>正しい英語</u>を学ぶことによっ

て発音から汲み取り変わった訛りでも理解することができると思います。
(英語専攻)

- 海外に行って沢山の人の人が英語を話している環境があり、訛りになれることは必要だが、訛りのある英語はコミュニケーションが円滑に行えない原因になる可能性があるから自分が勉強するときはネイティブが良い。(英語専攻)
- 訛りのない英語がもともとの英語なので生徒のモデルとなると思うから。英語を学ぶのに英語が母国語じゃない人から英語で英語を学ぶ意味がわからない。もし自分が初めて習った英語が訛りのあるものだったら意思疎通のためだからと発音は気にしないかもしれないが、初めて習う英語をどの発音か選択できるならもちろんネイティブから学ぶことを選ぶ。(英語専攻)
- ネイティブの先生は、授業が面白い。(英語非専攻)
- ネイティブの英語を耳で聞いて学んだ方が、発音が良くなるから。実際に私は中国のドラマを見て中国語の発音を学びました。(英語非専攻)
- 自然な英語の発音が耳に入り、耳で覚えられるから (英語非専攻)
- 私はマレーシア人の先生に英語を教えてもらっているのですが、彼らが英語を教えていること自体には違和感はないですが、癖が強い人が多く何回も聞いてやっと理解することがあります。日本の学校で教わった発音とは違うことがよくありました。そのため最初の段階では、ネイティブに教わった方がいいのではと思います。(英語専攻)

英語母語話者規範

【本物・本場】7件

- やっぱネイティブの人の英語の方が訛りもないと思うし、本場だと思うから。(英語非専攻)
- 英語の先生が全てネイティブの人である必要はないと思いますが、ネイティブの先生から学ぶなら英語を母語としている国の人から学びたいと思います。また、色々な発音を聞き取れるようになりたいとは思いますが、自分が喋れるようになる分には、イギリス英語やアメリカ英語などだけで十分だと思うし、原型というか本物な気がします。(英語専攻)
- 英語のスピーキングを学ぶには、本場の発音や抑揚などを捉えることがまず必要であると考えため。(英語専攻)
- 本場の英語だと思うから。(英語非専攻)

- 選べるなら、本物の英語を話す先生を選びたい。(英語専攻)
- 日本語英語でも、最終は伝われば良いのかも知れないけど、できるなら、本場の英語をネイティブの先生から学んでみたい。(英語非専攻)
- 本物の英語を学ばないと、訛りも理解できない。(英語専攻)

国際英語論

【多様な英語】6件

- 日本語にも訛りがあるのだから、英語の訛りも一つの英語として理解する必要がある。(英語非専攻)
- 英語には多様性があり正解がないため。(英語専攻)
- 人は平等であり、どのような英語を話す先生も、国籍も関係ない。(英語非専攻)
- 日本人はやたらとネイティブ発音にこだわるが、実際の英語ネイティブは2割ほど？しかないなので、より多くの人と意思疎通を図るためにはより多様なアクセントを受け入れる必要があると思う。(英語専攻)
- どんなことがあっても、英語の本質は変わらない。多様性を認めることから始まるからである。(英語非専攻)
- 特にそこに差はないと思っていて、多様性だと思っているので、自分が学びたい場所の訛りやその英語を学べれば良い(英語専攻)

国際英語論

【意思疎通の手段】31件

- 意思疎通ができれば充分。(英語専攻・英語非専攻) 7件
- 言葉は道具。(英語非専攻) 3件
- コミュニケーションの方法の一つなので、相手に伝わればそれでいいと思う。(英語非専攻)
- 世界の人と話したいから、意思疎通の手段としての英語が良い。(英語非専攻)
- いろんな国の人達が、いろんな訛りの英語があっても良いと思う。最終大切なのは意思疎通ができるかどうかだと思う。(英語非専攻)
- 英語はコミュニケーションにおけるツールでしかないので、意思疎通が図れればたとえ文法や発音が正しくなくても良いと感じるから。(英語非専攻)
- 要は英語が話せれば良いという考えで、グローバル化が進む中で、ネイ

ティブスピーカーだけが英語話者ではない。（英語専攻）

- 言葉より、伝えようとする姿勢が大事で、先生の国籍は関係ない。
- 文法が極端に違ったりしなければ、会話の中の英語は意思疎通としてのツールであるため国や発音は関係ないと思うから。（英語非専攻）
- 日本ではネイティブが英語を教えてくれる機会が与えられているから慣れてしまっていて、ネイティブじゃない先生だと少し違和感を感じます。だからといって国ごとに訛りがあることや訛りがあっても意思疎通できることを、留学を通して知れたので、ネイティブにはこだわりがないです。（英語専攻）
- コミュニケーションが取れたら、発音や鈍りは関係ない。（英語非専攻）
- 英語の訛りがあっても、相手が聞き返してくれたり、もう一度言ってくれたり自分と相手との会話のやりとりでどうにかなると今実際に留学している中で感じたため。（英語専攻）
- 母国語でも会話の中で文法を間違えることがあるのに完璧な文法、表現で会話出来るわけがない、相手の言ってる事理解して、自分の言ってる事伝えれたらそれで十分。（英語非専攻）
- 人口が多い中ビジネスのツールとして、英語を使うだけなのでネイティブじゃなくてもよい。（英語非専攻）
- アジアの人とビジネスで用いるイメージが強いため、伝わる英語を学び使えるようになれば良いと思うため。（英語非専攻）
- 流暢に話すことができなくても伝われば良いと思う。（英語非専攻）
- アイルランドに半年ほど留学していたが、ネイティブスピーカーと話す機会よりも、非ネイティブと話す機会の方が多かったので、発音はあまり重要視していない。（英語専攻）
- 結局はコミュニケーション能力が1番。（英語非専攻）
- 留学を通じて、身をもって感じたから。（英語専攻）
- 実際留学を通していろんな国の発音を聞いてきた上で、コミュニケーションをとるのに発言云々より伝えようとするの方が大事だと学んだから。（英語専攻）
- 留学中に、中国人と英語で話したから。英語は共通語。（英語専攻）
- 語学を学ぶ形は様々で良いと思う。なぜなら、実際に私は海外留学をしていた際に、エジプトやドイツなど、英語を母国語としない留学生との交流が英語力を伸ばせた1番の理由であると確信しているからである。

翻訳などの仕事や正確性を求められる場合でなく、意思疎通のための語学力向上ならば、アクセントや正確な文法などはほぼ関係ないと感じている。さらに言えることは、彼らとの交流を通して異文化理解を深めることができたということである。そのため、私はむしろ語学だけでなく異文化も学べる点において英語を母国語としない人々との交流は非常に良い経験となると考えている。(英語専攻)

- まずは拙い英語でも伝えることを大切にしたいと思います！(英語非専攻)

筆者作成

結論から言えば、英語を専攻する学生ほど、極端に母語話者規範と国際英語論に分かれ、母語話者規範では、記述内容は「懂れ」と「本物」のカテゴリーに集中した。彼らは、全員留学経験者であり、留学先での共通語としての英語使用も行っているにも関わらず、英語母語話者の話す英語が「本物」であるという認識や「本物の英語を聞かないと、訛りも理解できない。」という認識も表出した。

留学を通じた異文化体験では、固定概念や価値観の変化が効果とされる。しかしながら、この経験を通じても変わらない強い信念や思い込みが、英語専攻の留学経験者の学生に多く検出された。

また「学習法」のカテゴリーにおいては、リスニング力向上やコミュニケーションを円滑に行うための発話の部分に重点を置き、母語話者教師の特徴とする「発音」を重視する記述ばかりであった。言い換えれば、自身の中学校・高等学校での日本人教員が中心となって行う英語の授業における課題とも言えるであろう。

国際英語論における記述では、「意思疎通の手段」のカテゴリーに属する記述が最も多く、31件報告された。その記述においては、実際の海外経験の中で、異なる母語を有する人々同士の共通語としての英語使用の経験から、多様なアクセントや訛りの英語を容認した上で、相互が理解するように努める姿勢が重要と示す記述が多く検出された。英語非専攻の学生の記述でも、自身の母語である日本語の方言を例に挙げ、伝える態度が重要と示した記述が多数検出された。

「多様な英語」のカテゴリーでは、英語には正解がなく、英語の訛りやアクセントなどの多様性を重視し、相手に対しての寛容な姿勢や、言語による差別に反対する人権や平等性に関する記述も表出した。加えて、英語を使用する場面は、ビジネスの機会であり、アジア人を主とするという認識もあり、お互い

非母語話者であるがために、母語話者の規範は必要ないという記述も見られた。これらの記述に見るように、英語非専攻の学生群が、より世界における英語使用の現実的な側面や、互いの伝えようとする相互理解の姿勢を強調している事実も報告された。

次節では、中学校・高等学校の現職の英語教員に英語規範や国際理解に関するインタビューを行い、その報告を行う。

第3章：英語教科書における多様性の研究

第3節：教員インタビュー 英語教育における英語規範と国際理解

本節では、現職の高等学校の英語教員4名を対象にインタビューを行った結果を報告する。インタビューは、2020年の3月に対面形式とインターネット上で、個別に行われた。第2節で使用した同様のアンケートに回答を求め、それを元に質問を行う半構造化形式を採用した。教員歴や勤務地の情報を表3-9に、インタビューで焦点を置いた質問事項を表3-10に、結果を表3-11に示す。

表3-9：インタビューを行った教員の情報

教員	勤務地	性別	教員歴
1	京都府	女性	5年
2	大阪府	女性	12年
3	奈良県	女性	41年
4	高知県	男性	3年

筆者作成

表3-10：インタビューでの質問項目

質問1：英語母語話者を支持する理由と自身の英語規範は。
質問2：国際理解をどのように解釈しているか。
質問3：教科書における国際理解の教材とは何か。

筆者作成

表3-11：英語教員へのインタビュー結果

教員	質問1	質問2	質問3
1	大学入試対応	意思疎通のツールとして、英語を学び、世界を知ること。	環境破壊
2	各種試験対応	世界の人々と話し、価値観を広げること。	貧困問題
3	評価基準	世界の人々と話し、多様な価値観を学ぶことで、世界の現状を知り、自分の価値観も変え、最終的には、平和や人権の話。	価値観の違いを示す教材
4	各種試験対策	英語を使い、世界を知ること。	戦争や平和

筆者作成

質問 1：英語母語話者を支持する理由と自身の英語規範について

インタビューから表出された 4 名全員に共通する英語規範として、個人としては、最終的には、意思疎通が出来れば、それで十分という国際英語論の立場を支持するが、英語教師としては、大学入試や英検や各種の試験が、米国の標準英語を使用する限り、その基準にならざるを得ない日本の大学入試や各種資格試験の現状の制度面を述べた。

また、学校教育では常に生徒の評価が求められ、それが大学進学にも関わることから、英語にある程度の統制を持たせないと、評価が不可能である実情も提示された。

質問 2：国際理解をどのように解釈しているか？

教科書の多様化と同様に、日本の英語教育における国際理解は、もはや英米の文化を学ぶ異文化理解ではないことも、教員のインタビューから証明され、4 名全員が共通して、英語を意思疎通の道具として使用し、世界を知ることが、国際理解の認識であることが示された。

英語教師としての実践歴が長い教師は、英語を意思疎通の道具として使用し、様々な価値観を持った人々との交流によって、自身の価値観を変化させ、広げること、最終的には、互いを認め合い、多様性の尊重という態度の育成が国際理解であると言及した。

質問 3：教科書における国際理解の教材とは何か

教科書における国際理解の教材については、各英語教師の主観や認識によって異なるが、地球的課題とされている環境問題や貧困問題について、本来のユネスコの国際理解とされる戦争や平和、価値観の変化を促す教材と言及された。

具体的には、人間が生活の為に木を伐採した結果、環境問題が悪化したという事実に基づいた話や、貧困問題では、教科書の扉絵にも使用されたケビン・カーター氏による「ハゲワシと少女」など、地球上で現在起きている窮状を示す題材や、第二次世界大戦における広島と長崎への原爆投下で二重被爆を経験した山口彊(つとむ)の話など、実話に基づき、問題意識を涵養させる話が言及された。価値観の違いを示す教材としては、モンゴルの遊牧民族の荷物の少なさと、物が大量に溢れている日本社会においてどちらが幸せかを問う話が示され、今までに築き上げた価値観に一石を投じるような内容と示された。

第3章：英語教科書における多様性の研究

第4節：まとめと考察

中学校の教科書と比べると、高等学校の教科書は、使用される語彙数も増えて内容や題材に深みを持たせることが可能となり自由度は高い。故に、教科書が伝えるメッセージ性がダイレクトに反映される。

本章では、従来の英語教育において指摘されていた日本と米国の二項対立構造という問題点を実証的に調査するために、高等学校の教科書22冊を使用し、登場人物の国籍を調査した。

2000年の教科書では、英語を学ぶこととは、米国や英国の文化を学ぶ異文化理解と理解されていた。一方で、2017年の現行使用される最新の教科書では、英米の文化事象を紹介する課が全て消失し、多様な国籍の人物が登場した。つまり、リサーチ・クエスチョン1で示した現行の高校の教科書での規範の形については、「多様な国籍の人物が出現する国際英語論の方向性が示される。」という仮説は支持された。

しかしながら、従来「規範」とされた米国や英国の文化事象の題材が「英語の教科書に必要なもの」として扱われていることも事実である。多様な英語を認める態度の育成とは、米国や英国の文化事象を教えないことで養われるのであろうか。また、様々なメディアや媒体を通じて各人に培われた米国や英国のイメージに対して、人間教育という観点から言えば、教科書が是正する役割も果たすはずである。

リサーチ・クエスチョン2では、外国語科の学習指導要領に目標として掲げられている国際理解について調査を行った。「大学生の国際理解への意識や態度は、どのような形で示されるのか。」という問いに対しては、「英語専攻と英語非専攻の学生では、捉え方が異なる。」という仮説は支持された。特に大きな差として、英語専攻の学生群は、国内の多文化共生よりも国外に重心を置き、海外での体験や経験としての異文化理解に価値を置いていることが明らかになった。

加えて、環境汚染や人口爆発などの国際的な諸問題に対しても、英語非専攻群の方が、より高い数値を示し、大学で英語を専門として学習することと、国際理解への関心や意欲が比例するとは言えず、英語を学習することで国際理解が深まるとは必ずしも言い切れないと言えるであろう。

リサーチ・クエスチョン3では、英語の規範に対する調査を行い、「大学生の英語規範はどのような形で示されるのであろうか。」の問いにおいて、「教科書と同じように国際英語論で示される。」という仮説を設定した。結果は、英語を専攻とする学生の方が、より母語話者を支持したことから仮説は棄却された。実際、海外の留学体験に

において、共通語としての英語使用を経験した学生でさえも、規範を英語母語話者とし「正しい英語」と認識している者も存在した。

加えて、この質問紙から学習者の英語規範に対する無意識のバイアスが確認されたことも報告する。質問 4 の【人や友達を国や出身によって選んではいけない。】と、質問 20 の【英語を勉強するなら、先生は英語を母語とする人が良い。】の質問は、相反する質問であり、出身によって被る不利益は良くないと理解しつつも、英語教師が出身によって選択されている。つまり、被験者らの「英語の教師は母語話者が良い」という思い込みや認識が、無意識に英語母語話者への自動的選好として表出していることを強調したい。

表 3-12：表出された英語規範における無意識のバイアス

	英語 専攻	英語 非 専攻
人や友達を出身によって選んではいけない。	4.5	4.52
英語を勉強するなら、先生は英語を母語とする人が良い。	4.14	3.82

筆者作成

教員 1 インタビュー

(中略)

筆者：質問 21 から 24 の理由を教えてください。

教員：最終的には、話せたらどんな英語でも良いと思います。意思疎通が出来たらって意味で。でも、やっぱり高校って中間テスト・期末テストがあるから、ある程度、生徒の足並み揃えるというか、基準というか、そういうの必要じゃないですか。特にリスニングとかは、センター試験やら英検で必要やから、ネイティブ基準にならなら仕方ないと思います。

筆者：なるほど。音声的な指導とか発音指導ってしてはりますか？

教員：正直、足りてないというか少ないと思います。教科書を進める事で精一杯な時もあるし、中学校と比べて、読む量も増えているし、なかなか厳しいところがあります。

筆者：ですよね。1 時間が 50 分ですもんね。では、次の質問です。教科の目標に国際理解を深めるって掲げられているんですが、先生の中で、英語教育における目標の国際理解とはどう解釈されていますか？

教員：やっぱり、英語を学んで、色んな国の人と話して、世界を知ることかな？と思います。自分で行って、実際に見て、確かめてっていう行動して視野が広がるというか。

筆者：なるほど。その世界って具体的にはどこってありますか？

教員：いや、特に。アジアでもアメリカでもどこでも。

筆者：意思疎通のためのツールとしての英語を使うってということですか？

教員：そうです。

筆者：では、教科書の内容で、国際理解って言われたらどのような内容が思いつきますか？

教員：何でもいいんですか？個人的には、自分が学生の時に英語の教科書で見た環境破壊の話かなと。

筆者：どんな話でした？

教員：環境破壊をしているって理解しているけど、生活のために、熱帯雨林の木を仕方なく切るっていう。

筆者：あー。今ってどちらかと言えば、リサイクルとか資源の保護っていう観点の話が多いですもんね。

教員：確かに、熱帯雨林の話ってそんなにないですね。

筆者：そういう環境問題の話の時って、生徒さん同士で話をさせたりしますか？

教員：一応、そういう活動はするんですが、何て言うか、なぜそれをするかっ

ていうところがあまり行き届いていないというか、伝わっていないというか。確かにリサイクルって大事なんですけど、どのような犠牲があって、こういう事をするのかが理解していない生徒が多い気がします。だから、逆に、奈良公園の鹿の胃の中からペットボトルの破片が大量に出てきたっていうニュースの方が、インパクトあるというか。

筆者：確かに。リサイクルって良いことだから、誰もが反対しないことだけど、実際するかっていうと、個人の倫理観に依るところが大きいですもんね。

教員：そうです。そうです。例えば、赤信号を渡ってはダメですって一般的な理解ではあるけど、勿論、事故にあわなければ大丈夫って思って、信号無視をする人も沢山いますし。それやったら、ここで信号無視してこんな事故がありましたっていう写真を横断歩道のところに置く方がよっぽど効果があるというか。

筆者：あーだから、印象に残るというかインパクトのある写真とか話の方が生徒の心に響きますもんね。

教員：本当にそうだと思います。

筆者：質問は以上です。ありがとうございました。

2020年3月5日（webにて）

教師 2：インタビュー

(中略)

筆者：質問 21 から 24 の理由を教えてください。

教員 2：個人的には、拙い英語でも言いたいことが言えて、相手の言っている事も何とか理解できて、それがスムーズじゃなくてもいいので、ジェスチャーとかアプリとか使ったりして。ツールなので通じればいいかなと。ただ、学校の間テストとか、期末テストとか、英検の試験は、基本的にはイギリス・アメリカの英語でリスニングテストが行われるので、その練習もしないといけないので。

筆者：発音とか音声指導ってしてます？

教員：いや～。実際、イギリス英語とアメリカ英語では使われている単語が違うよっていう程度で、実際に発音記号を使って指導をするかっていうと、そこまでしていないので。

筆者：ですよね。では、先生の中で、英語教育の目標である国際理解ってどう解釈されてます？

教員：え～。あんまり深く考えたことないんやけど。英語で色んな価値観を持っている人と深い話をして、自分の価値観や物の見方を変えたり、広げることかな。当たり前を疑うではないですけど、日本と海外の生活習慣が全然違う事とかもそうですし。

筆者：その国ってアメリカやらイギリスだけではなくて？

教員：もちろん、世界の国です。なかなか日本にいたら他の国の人と話すことってそんなに機会があることではないと思うんですが。やはり、海外に出てっというイメージですかね。

筆者：なるほど。やはり、共通語としての英語を身につけて、海外に出て、価値観を広げる体験的なことですか？

教員：そうです。そんな感じです。

筆者：では、先生が今までに扱った教科書の内容で、国際理解って言われたらどのような内容が思いつきますか？

教員：環境問題とかリサイクルの話とか色々あるとは思いますが、私が一番に思ったのが、アフリカの貧困問題の話で、教科書の扉絵にも使われていたんですが、女の子が地面に倒れそうになりながら、それをワシ？鷹？が狙っているというインパクトある写真なんです。

筆者：あ一分かります。私も、自分が高校生の時にその写真を見たことがあります。最近もまだそういう写真や話はありますか？

教員：いやー全体的に、暗い話や、考えさせる話がすごい少なくなりました。

辛うじて、20 世紀を振り返るといふ話で、戦争中の話くらいかなと思います。

筆者：貧困をテーマにした話って最近ありますか？

教員：いや、私の知る限りなくなってきたというか。どちらかと言えば、昔の教科書の方が多かったかも知れないです。

筆者：そうですか。質問は以上です。ありがとうございました。

2020 年 3 月 6 日（電話にて）

教師 3：インタビュー

（中略）

筆者：質問 21 から 24 の理由を教えてください。

教員：所詮、英語はツールなので、話せたらどんな発音でも文法でも、何でも良いと思うけど、学校で教える英語は、基準がないと何でもオッケーになってしまうから。評価する方も評価できないし。実際、アメリカ英語って言っても、メキシコ系・中国系とかで、全然話し方とか違うじゃない？まあ、そういう人達は教科書には出ないけども。やっぱり、定期テストでもリスニングがあるし、ALT の先生もアメリカ出身やし、基準が必要っていう意味で、ネイティブを選ぶとおもう。

筆者：なるほど。では、先生の意見が聞きたいんですが、英語教育の目標である国際理解ってどう解釈されてます？

教師：もちろん、英語を使って色々な国の人と話すことも国際理解やし、その国の政治の話とか、成人する年齢とか、色々な国によってシステムというか社会の在り方が違うじゃない？そういう違いについて話あって、そこから自分の価値観が変わったり、新しい物の見方を身につけたり、基準は一つじゃないっていう事を学ぶというか。で、ここからは、私の考えなんだけれども、そういう沢山の基準がある中で、お互い違ってていいというか、色々な人々があっていいというか、認めるというか、最終的には、人としての人權とか平和とか人間の在り様みたいな道徳的な要素も含んだ話になるかなと。

筆者：英語を使って、世界を理解して、自身の価値観も変化して、お互いを尊重して共存するような教育的な感じですか？

教師：そうそう。すごい広いけど。

筆者：(中略)では、先生が今までに扱った教科書の内容で、国際理解って言われたらどのような内容が思いつきますか？

教師：多分、色々な話が当てはまると思うねんけど、一番印象的な話は、モンゴルの遊牧民の荷物って、テントで移動するから知れてるじゃない？その人たちと、日本の家一軒分の荷物と比べたら全然違うのね。で、物に恵まれている日本の人たちは、本当に幸せなのか？っていう幸せの価値観を問うみたいな内

容で。

筆者：最近の教科書ですか？

教師：いやー思い出せないけど、10年以上前やと思う。

筆者：それは、生徒に問題意識を投げかけるような話ですよ。

教師：そうそう。そこで、無人島に行くなら、食料品以外で何を持っていく？
っていうディスカッションをしてね。

筆者：何って答えた人がおおかったですか？

教師：やっぱり女子校やから、メイク道具とか髪の毛巻く道具とか、ポケベル
とか当時流行していたものやね。今やったら、スマホは必須やろうけど。

筆者：でも、電源がなかったら使えないですもんね。

教師：そういう当たり前って思っている日常を別の視点から考えるような話に
なるかな。

筆者：なるほど。ありがとうございます。

2020年2月29日（対面インタビューにて）

教師 4：インタビュー

筆者：質問 21 から 24 の理由を教えてください。

教師：やっぱり学校で教える英語ってなると、英検とか TOEIC の資格試験に対応していないとダメだとおもうので、僕個人としては、アメリカやイギリス発音にそこまで拘りは無いんですが、だからと言って、間違っているけど通じればいいよ！っていうスタンスは英語教師としてどうかと思う部分はあるんです。話そうという意欲は大事ですが、間違っているところをキチッと直すっていう仕事がやはり英語教師にはあるとおもうので。

筆者：分かります。私もそう思います。(中略...) 英語教育の目標に学習指導要領では、国際理解って掲げられているんですが、それに対しては、先生はどのように解釈されていますか？

教師：日本に沢山の外国人がやってきても、やっぱり実際に英語を話す場面はすごい少ないので、僕自身の考えでは、英語を使って、自分で行動して、世界を知ることかなと思います。日本にはない風景とか景色とか、そういうのを自分で見て確かめて、日本よりも安全が保障されていない国で、自分で何とか英語でコミュニケーションを取りながら必死になるというか。

筆者：それって具体的にどこの国ですか？

教師：いや、多分、英語が通じない国でもいいですよ。中国も実際、英語が通じない場所が沢山あるし、南米もそう。何とか伝えようと必死になる姿というか、日本に居たらなかなか必死になって伝えるっていう場面が少ないじゃないですか。そういう経験とか体験でやっぱり人間って成長するなど。自分自身の体験ですけど。

筆者：バックパッカーで世界回ったりとかしてました？

教師：そうです。大学生の時に。

筆者：以外と英語通じない国というか、街の人が英語喋らない国たくさんありますもんね。

教師：そうそう。フランスのエッフェル塔の前で、アフリカ系の人たちが日本語でキーホルダー売って来たり。以外と、英語って全世界共通な様で、そうではないんだなと思いました。

筆者：そういうのも含めて、国際理解ですよ。では、先生の中で、英語の教科書において、国際理解の題材ってどのような話ですか？

教師：やっぱり、戦争の教材かなと思います。多分、僕、小学校の時に広島に住んでて、毎年、8月15日が登校日で、黙祷したり被爆した方の話を聞いたり、被爆したことで差別されたりしたとか、けっこう生々しい映像とか体験を聞いて育っているんです。その影響がすごい大きいかも知れません。

筆者：あー。広島やったら平和教育やりますよね。印象に残っているのは？

教師：やっぱり、漫画の裸足のゲンの世界が実際に体験として起こっていて、目の前に沢山の生々しい死体があって、その中を逃げたっていう実際の体験した語り部さんの話ですかね。小学生ながら、すごい印象に残っています。

筆者：では、教科書の中で戦争の話が出てきたら、ちょっと思い入れと言うか授業中にご自身の話とか戦争について話合いの活動とかします？

教師：したいのは山々です。正直なところ。でも、授業時間というか、定期テストまでにここまでを終わらせないといけないっていうカリキュラムで、話し合い活動とかディスカッションまで出来ているかっていうと厳しいところです。

筆者：あーなるほど。授業時間数との兼ね合いですよね。

教師：本当にそうです。

筆者：貴重なご意見をありがとうございました。

2020年3月25日(電話にて)

第4章：英語教科書におけるジェンダー研究

第1節：英語教科書〈コミュニケーション英語〉における男女比

本章では、英語コミュニケーションと英語表現の2種類の現行の高校教科書において、リサーチ・クエスチョン4で示した「現行の高校教科書の男女平等はどのような形であろうか。」という問いに対する「過去の教科書と比べて、改善傾向にある。」仮説に基づいて教科書の検証を行う。

まず本節では「偉人」カテゴリーにおける女性の表象のされ方の違いについて報告する。偉人として教科書に掲載される人物は、2017年の教科書では、1冊の教科書に占めるレッスン数やユニット数は減少したにも関わらず、その数は二倍以上に増加している。男女比の観点から分析を行うと、女性の登場が増加しているものの、それ以上に、男性が登場し、依然として男性の比率が優位な構成は変わらない。また、男女共に同一の人物が複数の教科書において取り扱われている事実が特徴的である。

偉人として教科書に登場した人物の男女比を表4-1に、表4-2及び表4-3は、偉人として登場した人物を年代別に示す。表4-4は、偉人女性の表象のされ方をまとめたものである。

表4-1：「偉人」カテゴリーにおける男女比

教科書発行年	男	女	合計
2000年	9名 (75%)	3名 (25%)	12名
2017年	21名 (72.4%)	8名 (27.6%)	29名

筆者作成

表 4-2 : 2000 年の教科書に「偉人」として登場した人物と職業

人数	性別	職業	名前
1	男	スポーツ選手 (バスケット)	マイケル・ジョーダン
2	男	スポーツ選手 (サッカー)	ラモス瑠偉
3	男	スポーツ選手 (野球)	ジム・アボット
4	男	外科医・探検家	関野吉晴
5	男	探検家	久里徳泰
6	男	写真家	星野道夫
7	男	作家	チャールズ・M・シュルツ
8	男	映画監督	スティーヴン・スピルバーグ
9	男	ミュージシャン	ビートルズ
1	女	女優	オードリー・ヘップバーン
2	女	政治家	ジャネット・ランキン
3	女	スポーツ選手 (テニス)	モーリーン・コノリー

筆者作成

表 4-3 : 2017 年の教科書に「偉人」として登場した人物と職業

人数	性別	職業	名前
1.2	男	ピアニスト	辻井伸行 (2冊)
3	男	建築家	坂茂
4	男	彫刻家	外尾悦郎
5	男	漫画家	チャールズ・M・シュルツ
6	男	漫画家・絵本作家	ディック・ブルーナー
7.8.9	男	漫画家	やなせたかし (3冊)
10	男	スポーツ選手 (テニス)	錦織圭
11	男	スポーツ選手 (サッカー)	長友佑都
12.13	男	日清食品 創業者	安藤百福 (2冊)
14	男	アップル 創業者	スティーブ・ジョブズ
15	男	学者	ルートヴィヒ・グットマン
16	男	学者	三浦公亮
17	男	宇宙飛行士	若田光一
18	男	宇宙飛行士	古川聡
19	男	登山家	石川直樹
20	男	牧師	ジョン・ニュートン
21	男	癌患者	スティーブン・サットン
1.2	女	冒険家	内野加奈子 (2冊)
3.4	女	人権運動家	マララ・ユスフザイ (2冊)
5	女	学者	ジェーン・グドール
6	女	作家	ジェイン・ジェイコブズ
7	女	作家	ジョアン・ローリング
8	女	通訳者	長井鞠子

筆者作成

表 4-4：偉人女性たちの教科書における表象

2000
<p>オードリー・ヘップバーン（女優・ユニセフ親善大使）</p> <p>幼少の頃の悲惨な戦争体験を通じて、人生で最も重要なものは愛とし、晩年の人生を UNICEF の活動に捧げ、親善大使としてアフリカの難民の子供たちを支援した話。</p>
<p>モーリーン・コノリー（テニス選手）</p> <p>リトル・モーという愛称で親しまれたテニス選手。コーチとの出会いと別れ、事故で選手生命を断たれた後、穏やかな結婚生活を送っていたものの、癌を患い 34 歳で生涯を閉じた彼女の人生を描いた話。</p>
<p>ジャネット・ランキン（政治家・平和活動家）</p> <p>アメリカのモンタナ州の女性参政権運動に参加し、史上初のアメリカ下院議員。生涯を通じて平和主義者として活動。</p>
2017
<p>内野加奈子（日本人初のホクレア号クルー）</p> <p>ハワイの伝統的な航海の方法として、GPS も海図もコンパスも使うことなく、星や波など自然を読み航海するホクレア号の日本人初クルーとして乗船した。「One Ocean, One People」をテーマにハワイと日本の一萬三千キロを航海した。</p>
<p>マララ・ユスフザイ（平和活動家）</p> <p>女性への教育の必要性や平和を訴える活動を続けた結果、テロリストグループから命を狙われ、帰宅途中に銃撃される。その後、英国にて治療を受け奇跡的に命を取り止める。その後も、パキスタンにおける女子教育の必要性を訴え、ノーベル平和賞を受賞。</p>
<p>ジェイン・ジェイコブズ（ジャーナリスト）</p> <p>アメリカのニューヨークに住むジャーナリスト。都市化に伴う高速道路建設に反対し、署名活動や反対運動を行い、草の根から始まった運動が社会現象となり、人々の都市計画への関心を想起した。</p>

ジェーン・グドール（霊長類学者）

イギリスの霊長類学者。チンパンジーを研究対象とし、喜怒哀楽の感情があり、獲物を捕獲するために道具を使うことを証明した。人間の病気の治療薬の元となるのは自然界の動植物であるとし、人間による自然破壊と環境保護の重要性を訴え、世界各地で講演活動を行っている。

ジョアン・ローリング（作家）

「ハリー・ポッター」シリーズの作家。秘書と英語教師を兼業しながら、ロンドンまでの列車の中で「ハリー・ポッターと賢者の石」の話を思いつく。当時、紙とペンを持ち合わせていなかったため、頭の中で全ての話を完結させた。

長井鞠子

年齢 70 を過ぎても現役の通訳者であり、2020 年の東京オリンピック招致に尽力し、年間 200 もの会議通訳をこなす。その入念な準備の姿勢や英語だけでなく日本語への造詣を深めるため和歌を京都で習う。モットーを Sky is the limit.（限界を決めないこと）とした。

筆者作成

本文中における上記の女性達の表象のされ方は、2000 年と 2017 年では大きく異なる。2000 年の教科書においては、性別役割に対する教科書作成者の考え方や男女不平等の話題まで深く示されている。

例えば、モーリーン・コノリー氏の話では、怪我によるテニス選手としての生命が断たれた時に、ある男性から求婚されることで絶望から立ち直ったと書かれている。つまり、結婚＝困難な状況から抜け出す方法であり、過去を振り返らず、家族が幸せに暮らすことに全力を注いだと描かれ、この話を通じて、女性の幸せは結婚という価値観を想起する学習者は少なくはない。

The next three years were her best years as a tennis player. They ended when she broke her leg in a terrible accident. Maureen was helped out of her despair by a young man. He asked her to marry him. In a few years they had two children. She did not look back on her past glory but did everything to keep her family happy.

(Apricot ENGLISH COURSE 1, Leson5, p.50) (下線筆者)

一方、ジャネット・ランキン氏の話では、幼少の頃より、女性と男性は、社会における労働は同等の負担を強いられていたにも関わらず、権利に関しては平等ではないと感じていた、という女性には参政権がないという男女不平等について、明示的に言及している。また、ランキン氏が生涯にわたって、戦争反対のスローガンを掲げたアメリカ初の女性下院議員であり、この課自体が、男女平等へのメッセージ性が強い題材であると言える。

Jeannette Rankin was born on a ranch in Montana in 1880. In those days, Montana was till frontier state, and life there was hard. Men and women shared much of the difficult outdoor work. They had to work as equals to survive. But young Jeannette noticed men and women were not equal in many ways. For instance, at election time, women were not allowed to vote. Jeannette thought this was not fair.

(UNICORN ENGLISH COURSE 1, Lesson 9 p.96) (下線筆者)

一方で、2017年の教科書においては、2000年の教科書と比べると、偉人の登場人物の課においても、他の課においても、男女不平等やジェンダーに関する記述はほとんどが姿を消したと言っていいであろう。

内野加奈子の紹介は、ホクレア号で日本人初のクルーと示され、事実上は女性初であることには触れられておらず、他の女性の登場人物においても、社会的貢献や偉業を達成するまでのジェンダー不平等に対する記述も明示的には示されていない。

例えば、ハリーポッター・シリーズの作者であるジョアン・ローリングが、ペンネームを「J.K. Rowling」とした理由として、女性作家が書いた物語は、少年は読まないとされていたためと表記されている。これはある種の女性作家に対する偏見ではあるが、特にその部分に関する作者の心情や葛藤も書かれていない。結果的には、ハリーポッター・シリーズが世界的に人気を博したことから、女性作家の名前を伏せたことが功を奏したかのような印象を与える印象も否めない。

In addition, boys might not read a book written by a woman. Joanne had hoped to find a publisher quickly, but it took her a whole year. To make the book more attractive to boys, Joanne chose the pen name J.K. Rowling.

(BIG DIPPER 1, Lesson 6 p.72) (下線筆者)

唯一、女性であるが故の不平等に言及している偉人は、パキスタンの女子教育の重要性を訴えたマララ・ユスフザイを取り扱った課のみであった。

Terrorists controlled her town. They believed that women should stay at home. They tried to stop girls from going to school. “Why are terrorists against education?” Malala did not understand. Her father explained, “Because they are afraid of the pen.” (中略) Malala continued to go to school. She also spoke about her ideas in public. “We have the right of education. We have the right to speak up.”

(BIG DIPPER, lesson 9, p.98) (下線筆者)

In 2014, a seventeen-year-old girl won the Nobel Peace Prize. Why did she win this prize? In Pakistan a group of people, claimed that girls should not receive education and all schools should stop teaching girls. However, one girl believed education for girls was as important as for boys.

(All aboard! Lesson 10, p.90) (下線筆者)

次に教科書の全登場人物の男女比を表 4-5 に示す。これらの登場人物は、教科書の本文と本文以外の読み物の課に登場した人物を計上した。表 4-5 に示されるように、男女の構成比の平等を男女平等と定めれば、両年共に、その目標は達成されていない。

特に問題として提示したいことは、2000年と2017年の教科書の登場人物の男女比の構成は、2000年の教科書の方が、女性がより教科書に登場しているという構成であり、2017年の教科書の方が、男女平等の観点から言えば後退しているという事実である。

表 4-5：全登場人物の男女比（偉人カテゴリー含む）

	男	女
2000 年	174 名 (63%)	102 名 (36%)
2017 年	132 名 (74%)	47 名 (26%)

筆者作成

また 2000 年の教科書においては、題材や内容においても、男女の家庭内における役割の変化に深く言及した話題や、女性の社会進出に伴う家庭内の仕事の役割分担に対して各国と比較して日本人の男性の理解は遅れているなど、ジェンダーをテーマとした課が存在した。

Japanese men are too far removed from household affairs, and Japanese women are too far removed from society. But this can change. More men should agree to help take care of their homes and families, and more women should be willing to keep their jobs after marriage. This can do no harm to the Japanese family; indeed, it can make Japanese family even stronger.

(Evergreen READNG, reading 11, p.118) （下線筆者）

More and more women have jobs outside the home. Most of them want to continue to work after they get married. When both husbands and wives work outside the home, who does housework? You might think sharing housework is the best way, but some surveys show this doesn't happen. In three cities around the world, people were asked question, "Do you think man and his family should share house-work equally with his wife if she has a job?" to this question, over 90 percent of men in New York and London said "yes" but only about 50 percent of men in Tokyo answered positively.

(ACORN English Course 1, Lesson 12, p. 94) （下線筆者）

2017 年の教科書では、上記のような記述は、題材やテーマとして敢えて使用しないことが教育的配慮と思えるほどに登場しない。だからこそ、無意識のバイアスが、作成者が意図していない箇所から表出される例を示す。

例えば、CROWN の Lesson 5 の食糧支援の NPO でフードバンクという食品メーカーや一般企業からの余剰食料を寄付してもらい、食料を必要とする児童養護施設や貧困者に配給する話がある。その活動の仕組みを示す図において、ひとり親世帯ではなく、母子家庭世帯と表記されている(図 4-1 参照)。また、同じ Lesson 5 において、ボランティア活動で炊き出しを行っている写真では、女子学生が料理を作っている様子が描かれている。これは、従来の典型的な男女の性別役割と指摘されてきた描写である。

教科書作成者の本来の意図は、フードバンクという困窮している他者を助ける社会的意義のある活動を示すことを目的にしており、決して、母子家庭が困窮している印象や、料理は女性の仕事であるという役割を与えようとはしていない。だからこそ、無意識に作成者の意識下にある小さな偏見や差別とも言えない認知の歪みが、何気なく使用した写真や図表に示されるのである。

次節では、英語表現の教科書における絵や写真を元にした分析を行う。

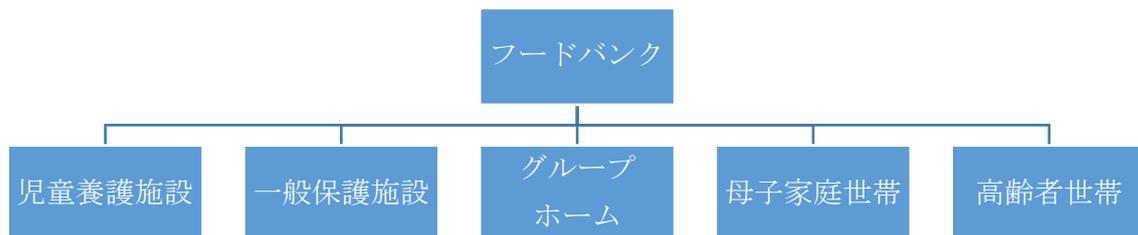


図 4-1: CROWN, Lesson5,p.63 に提示されている図(筆者作成)

第 4 章：英語教科書におけるジェンダー研究

第 2 節：英語教科書＜英語表現＞における男女比

本節では、英語教科書に登場する男女の絵や写真について報告を行う。本節では、1990年代から2000年に出版された13冊のオーラルコミュニケーションの教科書と、2017年に出版された英語表現の教科書13冊を比較する。それぞれの呼称は異なるが、共に実践的な会話形式を意図した教科書である。表 4-6 は、本節で分析に用いた教科書の一覧である。

表 4-6：本節の分析で使用した使用した教科書

2000 年発行	
出版社	教科書タイトル
東京書籍	Hello, there! Oral communication A (1998)
東京書籍	Hello, there! Oral communication B (1998)
大修館	Departure Oral communication A
大修館	Departure Oral communication B
三友社	ECHO Oral Communication A
三省堂	SELECT Oral Communication A
三省堂	SELECT Oral Communication B
三省堂	SELECT Oral Communication
桐原書店	Speak Out Oral Communication C
啓林館	Sailing
東京書籍	Hello there! A (2000)
東京書籍	Hello there! B (2000)
東京書籍	Hello there! (2003)
2017 年発行	
出版社	教科書タイトル
東京書籍	New favorite 1
東京書籍	New favorite 2
三省堂	CROWN English Expression 1
三省堂	CROWN English Expression 2
三省堂	My WAY English Expression 1
三省堂	My WAY English Expression 2
三省堂	SELECT English Expression 1
啓林館	QUEST English Expression Standard
啓林館	QUEST English Expression Advance
数研出版	POLESTAR English Expression 1
数研出版	POLESTAR English Expression 2
数研出版	BIG DIPPER English Expression 1
数研出版	BIG DIPPER English Expression 2

筆者作成

分析の方法は、教科書の表紙から裏表紙まで全部のページに登場する写真や絵について、1) 男性・男子のみ写っている写真及び絵、2) 女性・女子のみ写っている写真及び絵、3) 男女が混合で写っている写真及び絵、4) 人物が映っていない物体や景色の写真及び絵、に分類した。表 4-7 に 2000 年と 2017 年の教科書における絵の総数を示す。

表 4-7：英語表現の教科書における写真及び絵の総数

	男性のみ	女性のみ	男女混合	物体景色	合計
2000 年	957 (26.6%)	680 (18.7%)	666 (19.2%)	1368 (35.5%)	3671
2017 年	566 (24.4%)	488 (18.1%)	400 (18.8%)	853 (38.6%)	2307

筆者作成

表 4-7 が示すことは、構成比自体は変化せず、現在の英語表現の教科書においても、男女の数が同様に描写されておらず、男性及び男子の描写数が優勢な状況である。

表 4-8 は、1) 男性・男子のみの写真及び絵、2) 女性・女子のみの写真の中に登場する人物の数を示している。

表 4-8：英語表現の教科書における写真及び絵の中の男女の数

	男性・男子の数	女性・女子の数	合計
2000 年	2298 人 (56.2%)	1795 人 (43.8%)	4093 人
2017 年	1544 人 (53.3%)	1353 人 (46.7%)	2897 人

筆者作成

男女の人数を基準に判断すると、表 4-7 に示されるとおり、男女平等ではないものの、やや改善傾向にあると言える。

次に、これらの男女の人物がどのような動作や状況で描かれているかを比較する。動作の分類分けの基準を以下の9つのカテゴリーに設定した（表 4-9 参照）。表 4-10 及び表 4-11 に結果を示す。

表 4-9：人物の動作の分類と例

分類	
運動	スポーツやダンスを行っている絵や写真 例：サッカーをしている、チアリーディングの写真
音楽	楽器を演奏する・歌う・音楽を聞くなど音楽に関わる絵や写真 例：ピアノを演奏する・マイクを持って歌っている
発話	文字も含めた発話に関する絵や写真 例：スピーチをする・話（電話）をする・手紙・メール絵を書く
習得	知識を取り込む様子が描かれている絵や写真 例：勉強をする・本を読む
生活	日常生活の中での動作の絵や写真 例：顔を洗う・料理をする・食事をする・お風呂に入る ゲームをする・料理をする
感情	顔の表情で喜怒哀楽が表象されている絵や写真 例：笑っている・泣いている・困っている様子
交通 輸送	電車や車や飛行機などの交通や輸送に関わる絵や写真 例：電車に乗る・飛行機の搭乗口から乗ろうとする
労働	ある職業を行っている絵や写真 例：教師として黒板の前に立つ・看護師として働く
肖像画	人物紹介などで顔のみ登場する絵や写真
その他	上記カテゴリーに相当しない絵や写真 2000年の教科書では、本文と関係ない箇所や、何も行動をしていない人物単体としての絵が多く見られた。

筆者作成

表 4-10：全体の絵に占める各カテゴリーの絵や写真の比率

	2000年	2017年
運動	346 (8.5%)	265(9.1%)
音楽	128 (3.1%)	95(3.3%)
発話	1700 (41.5%)	943(32.6%)
習得	529 (12.9%)	569(19.6%)
生活	582 (14.2%)	289(10.0%)
感情	142 (3.5%)	29(1.0%)
交通・輸送	50 (1.2%)	41(1.4%)
労働	100 (2.4%)	103(3.6%)
肖像画	166 (4.1%)	563(19.4%)
その他	350 (8.6%)	0%

筆者作成

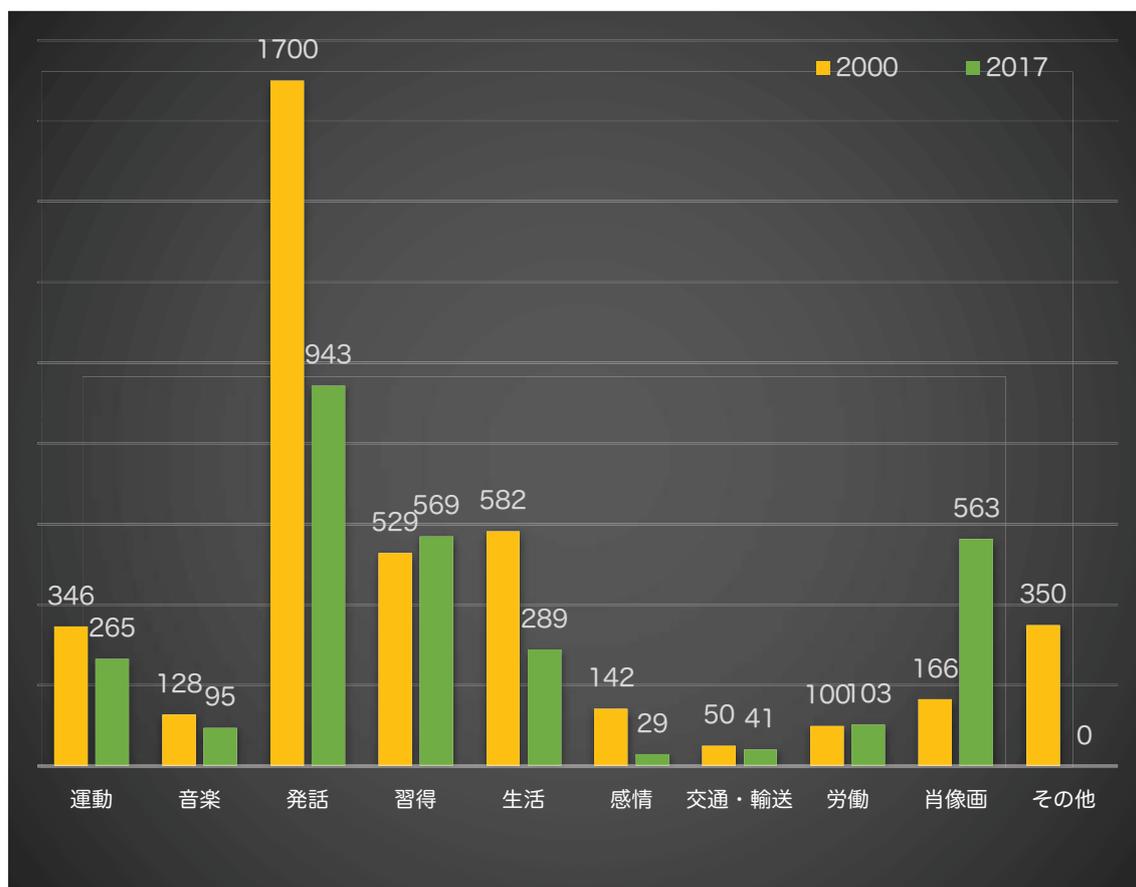


図 4-2：各カテゴリーにおける絵や写真の数（筆者作成）

表 4-11：男女の登場人物の動作や所作の比率

2000 年			2017 年	
男子	女子		男子	女子
234(68%)	112(32%)	運動	167(63%)	98(37%)
76(59%)	52(41%)	音楽	50(53%)	45(47%)
882(52%)	818(48%)	発話	448(48%)	495(52%)
281(53%)	248(47%)	習得	305(54%)	264(46%)
322(55%)	260(45%)	生活	161(57%)	128(43%)
77(54%)	65(46%)	感情	11(39%)	18(61%)
37(72%)	13(28%)	交通・輸送	23(56%)	18(44%)
65(66%)	35(34%)	労働	78(76%)	25(24%)
89(53%)	77(47%)	肖像画	301(54%)	262(46%)
235(66%)	115(34%)	その他	0	0
2298 (100%)	1903(100%)	合計	1544(100%)	1353(100%)

筆者作成

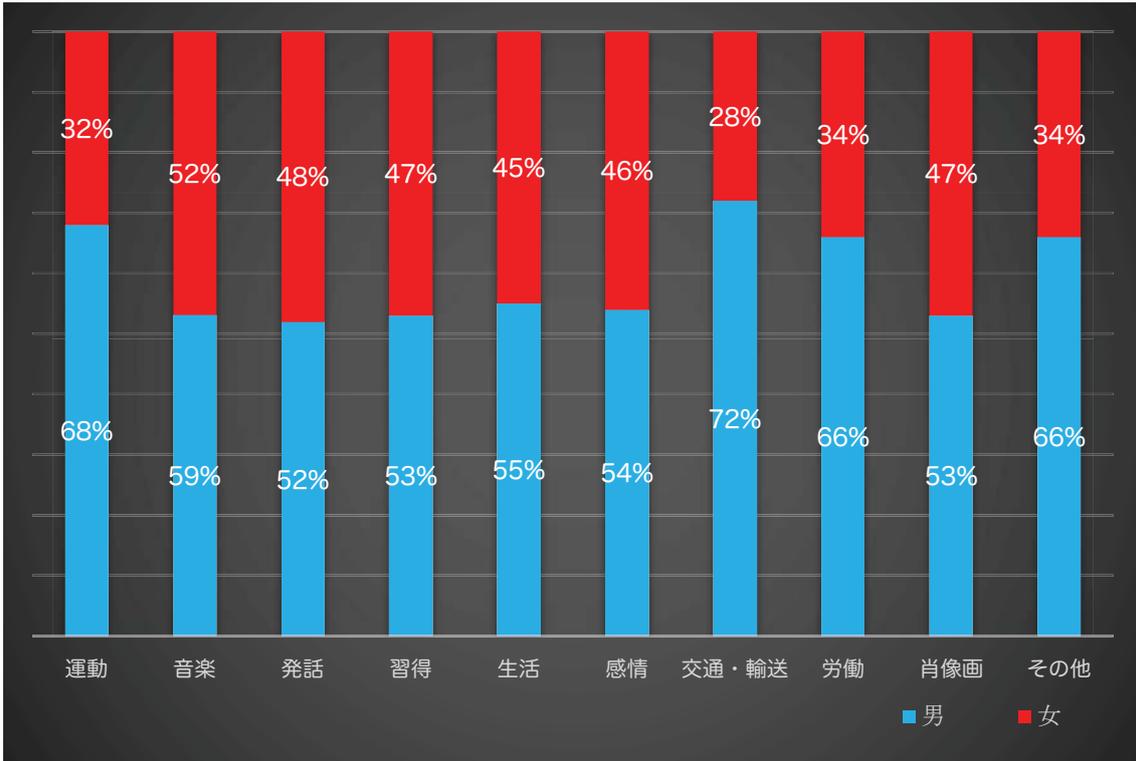


図 4-3 : 2000 年の教科書の写真や絵の男女の所作の比率 (筆者作成)

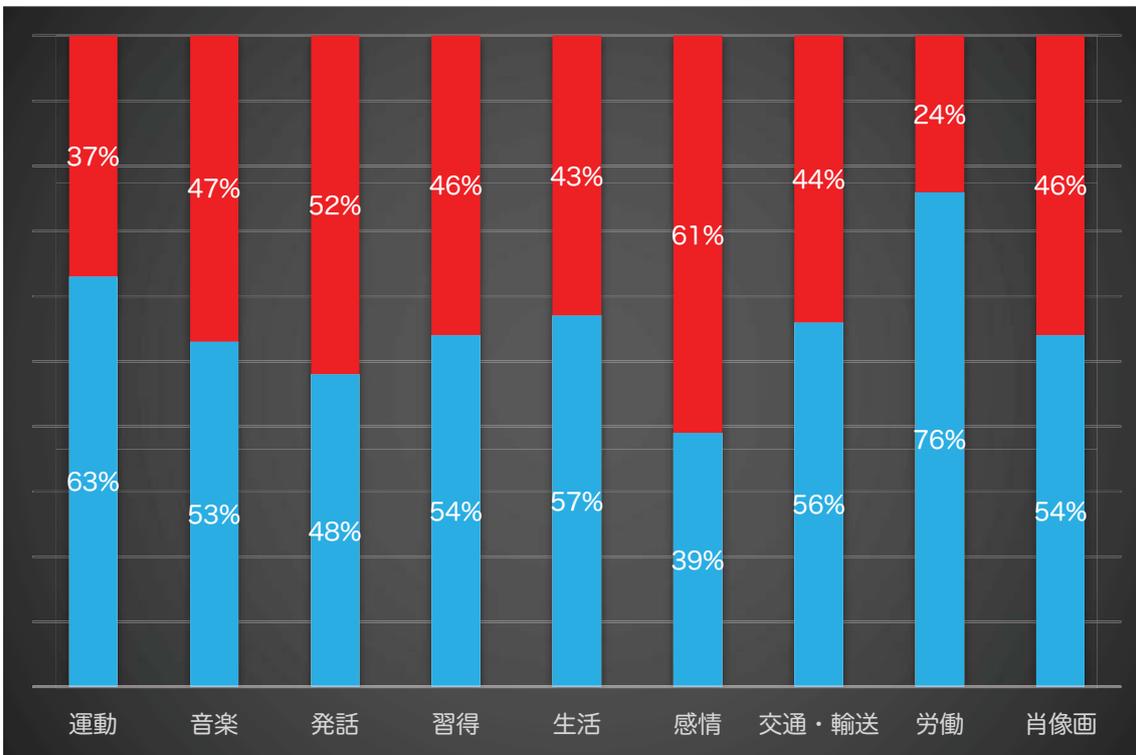


図 4-3 : 2017 年の教科書の写真や絵の男女の所作の比率 (筆者作成)

表 4-11 に示されるように、2000 年と 2017 年ともに「発話」のカテゴリーの絵や写真が最も多い。英語表現自体が発話を促す教科であることから当然の結果であり、男女比も極端な開きは検出できず、描写数が多ければ多いほど、男女平等を意識し、自然と女性の登場回数も増えたと考えることができる。

一方で、極端に男女比が異なる動作や所作のカテゴリーは、2000 年の教科書では、「運動」「交通・輸送」「労働」であり、どの項目においても男子が多く描かれている。

2017 年では、「運動」「感情」「労働」であり、「感情」を示す絵や写真では、女性の比率が高く女性優位に描かれている。2000 年の教科書では、全部の項目において男性が優位であり、女性が優位に示される傾向は見られなかった。

次節では、学習者の作文から表出した男女のジェンダー観への差異を報告する。

第4章：英語教科書におけるジェンダー研究

第3節：学習者作文を元にした男女の異なるジェンダー観

本節では、実際の男女の学習者におけるジェンダー観の差異について、実証的なアンケート調査及び作文調査を行った結果を報告する。表4-12に、被験者の情報を示す。本節での被験者は、第二章での被験者と全て異なる人物であり、筆者の研究の背景や情報がない状態で依頼している。被験者は、関西圏の大学に通学する大学生150名（男75名・女75名）であり、基本的にほとんどの者が中等教育は男女共学の環境であった。質問の内容を表4-13に示す。

表4-12：被験者の情報

	男	女
人数	75（共学出身者67名）	75（共学出身者70名）
平均年齢	21.5	20.8

筆者作成

表 4-13：教科書の男女平等に関する質問

<p>質問 1.</p> <p>教科書の登場人物の性別による社会的役割や職業について、今までに意識したことや考えたことはありますか？</p> <p>(よくする・たまにする・分からない・ほとんどない・全くない)</p>
<p>質問 2.</p> <p>教科書は男女平等に構成されていると思いますか？</p> <p>(思う・分からない・思わない)</p>
<p>質問 3.</p> <p>男女平等な社会の実現のために教科書はどうあるべきですか？</p> <p>ご自身の体験や経験を踏まえて、自由に書いてください。</p>
<p>質問 4. () の単語を選んでください。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"><p>アンケートでは、教科書に掲載の写真を使用。 (著作権保護及び転載不可のため本稿では削除)</p></div> <p>育児放棄した母白熊に代わり人間の男性に育てられた白熊の話です。</p> <p>He was cute and as small as snowball.</p> <p>But unfortunately, his mother showed little interest.</p> <p>Thomas, a bear keeper at the zoo, said “Knut is now helpless” We have no choice.</p> <p>I’ll be his (father / mother) instead. He devoted himself to caring</p>

筆者作成

質問 1 の教科書の登場人物の性別役割や職業に関して考えたことがあるか否かは、150 名中、101 名が、「ほぼない・全くない」と回答し、30 名が「たまにする」、19 名が「よくする」と回答した。

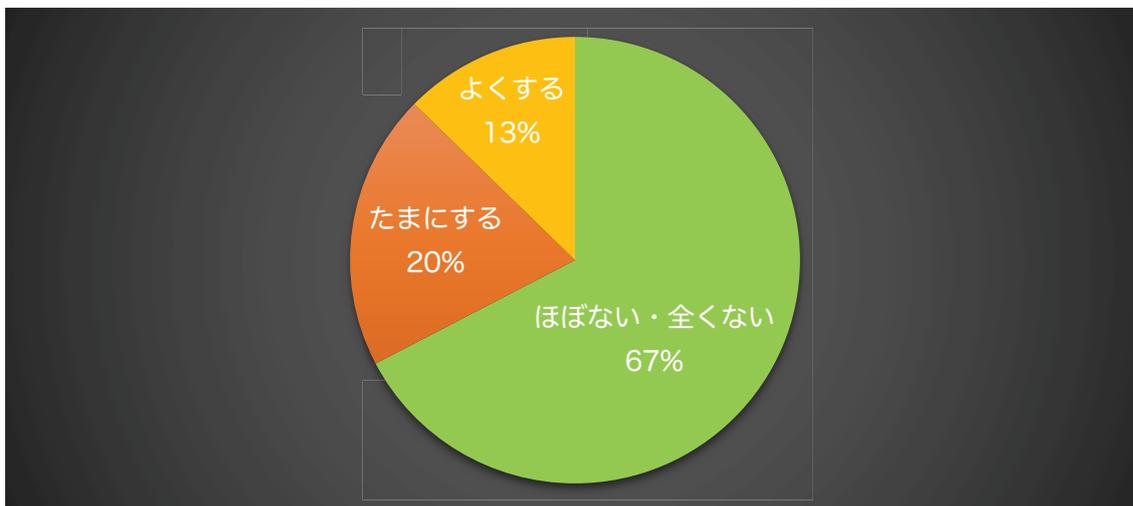


図 4-4：質問 1 に対する回答（筆者作成）

質問 2 の教科書は男女平等に構成されているか？の質問に対しては、102 名が「思う」と回答し、36 名が「思わない」、12 名が「分からない」と回答した。また、質問 1 で「ほぼない・全くない」と回答した 101 名のうち、98 名が質問 2 で「思う」と回答した。つまり、被験者の 7 割は、今までの学校生活の中で使用した教科書に対し、何の疑いもなしに教科書は男女平等であるとの認識していた。

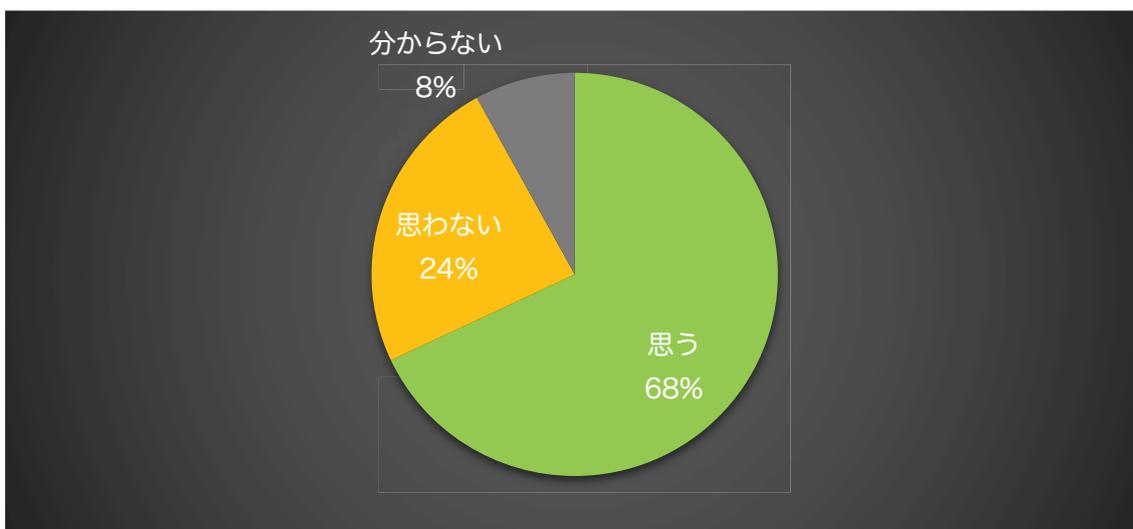


図 4-5：質問 2 に対する回答（筆者作成）

質問 3 の男女平等な社会の実現のために、教科書はどうあるべきか？という自由作文の回答を、本調査では「KH Coder」という統計的に文章を分析するソフトを使用し、計量テキスト分析という手法で分析を行った。

表 4-14 は、男女別の上位頻出語を示す。男女共に「思う」と「男女」は1番目と2番目に登場するが、例えば「社会」という語は、男性では3番目に、女性では7番目に登場する。このように男女で登場する順位が大きく異なる語を表 4-15 に示す。

表 4-14：自由作文における頻出語の男女差

男性上位頻出語				女性上位頻出語			
1	思う	17	問題	1	思う	17	考える
2	男女	18	言う	2	男女	18	働く
3	社会	19	多い	3	女性	19	職業
4	女性	20	違い	4	平等	20	家
5	平等	21	違う	5	男性	21	感じる
6	男性	22	差別	6	人	22	車両
7	考える	23	車両	7	社会	23	最近
8	教科書	24	専用	8	仕事	24	専用
9	性別	25	必要	9	男	25	お母さん
10	男	26	役割	10	女	26	お父さん
11	仕事	27	感じる	11	家事	27	授業
12	女	28	考え方	12	言う	28	日本
13	授業	29	今	13	多い	29	それぞれ
14	職業	30	自分	14	教科書	30	不平等
15	人	31	人物	15	イメージ	31	会社
16	挿絵	32	ジェンダー	16	今	32	学校

筆者作成

表 4-15：自由作文による表出語の差

順位が 10 以上異なる語
差別・看護・家庭・育児
順位が 20 以上異なる語
必要・家事・教育・時代・不利・役割・機会・実現・日本・理解・不平等
男性のみの表出語
世代・理想・立場・権利・現状・互いに・選択・意見・区別・雇用・自由
女性のみの表出語
お父さん・お母さん・共働き・結婚・妊娠・専業主婦・給料・女の子・活躍

筆者作成

表 4-15 における男性のみの表出語及び女性のみの表出語に見るように、男性は「職業」や「社会」を想起させる語、女性は「家庭」や「子育て」を想起させる語が検出できる。

それらの差異をより具体的に可視化するために、自由作文の中で類似する語同士をまとめるクラスター分析を行ったところ、男性は「学校教育の在り方」「家庭内の性別役割」「社会における性差」「男女平等への思い」と4つに分類した。(表 4-16 参照)

女性は「家庭内の性別役割」「社会的役割」「女性優遇措置」「男女の身体差」「教科書在り方」と4つに分類した。(表 4-17 参照)

表出された内容を分析すると、男性は女性に多い職業(看護師やフライト・アテンダント)や女性専用車両や映画館のレディース・デイなど、実際の現実社会の中での性差の事象を具体例として言及した箇所が多く見られた。一方で、女性は、実際の事例として自身の家庭環境を具体例に、結婚や出産によって変化する男女の性別役割などに言及する箇所が多く見られた。大きな差異として、男性は社会を軸に、女性は自身の家庭を軸にジェンダー観が形成されていることが検出された。

表 4-16：クラスター分析の結果（男性）

男性	
学校教育の在り方	階層 1 学校教育で受けた男女の性別役割
	階層 2 教科書の人物像に見る性別役割について
家庭内の性別役割	階層 3 家庭内の役割における男女平等の実現の難しさ
社会における性差	階層 4 社会における男女平等について
	階層 5 社会における女性の優遇措置について
	階層 6 職業から想起する男女の差異について
	階層 7 社会における女性特有の職業について
男女平等への思い	階層 8 男女平等における理想像とは
	階層 9 性別役割分業について

筆者作成

表 4-17：クラスター分析の結果（女性）

女性	
家庭内の性別役割	階層 1 婚姻関係で変化する家庭内における男女の役割
	階層 2 自身の家庭環境に見る男女の役割について
社会における性差	階層 3 公共交通機関における女性専用車両について
	階層 4 社会における男女の仕事の平等性について
男女の身体差	階層 5 男女の身体的な特徴差について
学校教育の在り方	階層 6 教科書の男女の人物描写について

筆者作成

質問 4 では、実際の教科書で使用された文を用いて、学習者のジェンダー観を調査した。この人間が白熊を養育する話は、最新版の教科書では、日本版の話が登場し、先述したように「母親」と示された。旧番である 2016 年版では、2冊の英語教科書が題材として使用し、それぞれが飼育員の男性を「父親(father)」と「母親(mother)」と表現した。そこで、本調査では、両方を選択肢として挿入し学習者にその回答を委ねた。結果は、150 中 131 人(87%)が「母親(mother)」と回答し、19 人が「父親(father)」と回答した。この結果より、育てるという役割に対する概念は、男性であったとしても母親という認識が、ほとんどの学習者に共通していることが判明した。

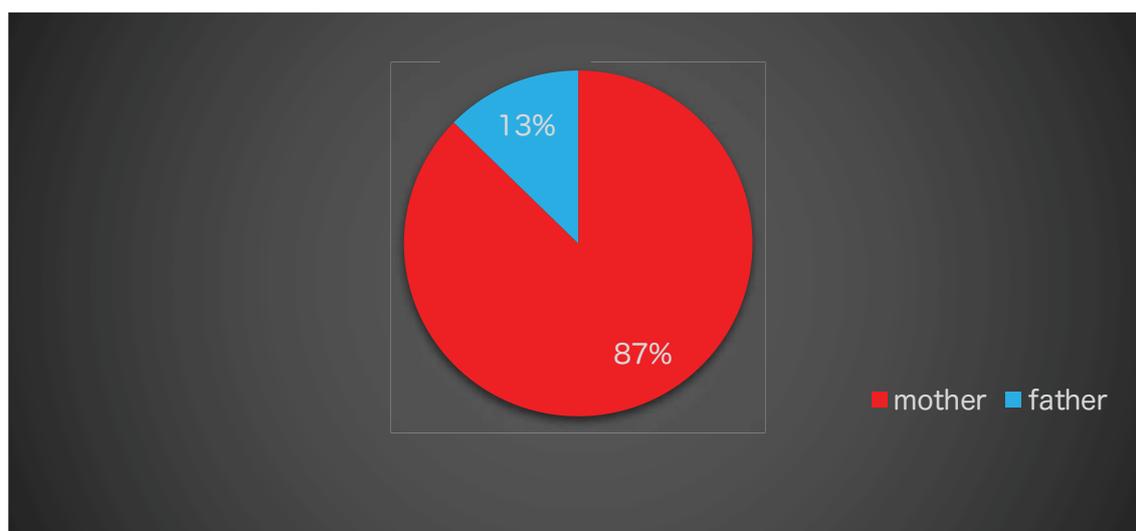


図 4-6 : 質問 4 に対する回答 (筆者作成)

第4章：英語教科書におけるジェンダー研究

第4節：まとめと考察

本章では、2種類の英語教科書におけるジェンダーの観点からの教科書研究に加え、教科書を使用した学習者の意識調査を行った。

リサーチ・クエスチョン4で立てた「現行の高校教科書において、男女平等は達成されているのか？」という問いに対する「過去の教科書と比べて改善傾向にある」という仮説は、男女の登場人物の平等性の観点から言えば、英語コミュニケーションにおいては棄却され、英語表現においては支持された。

英語コミュニケーションでは、男性の登場人物の割合が2000年の教科書と比べて増加し、結果的に女性の割合が下がった傾向が検出された。教科書の記述や内容の題材分析に関しては、2000年の教科書では、性別役割やジェンダー不平等に対して、作成者の考えや思想が検出される構成であった。特に、その課全体が一人の人物の半生や偉業を描いた課では、主人公の女性の「結婚」や「家庭」に対する思いや、社会の男女不平等に対抗する主人公の行動が顕著に描かれ、家庭内の仕事や社会における女性の役割など題材や内容に明示的に盛り込むことで、学習者らが主人公を通じて、自らのジェンダーの価値観への気づきや、考えを深化させることを目的とした構成であった。

一方、2017年の教科書では、明示的に性別役割やジェンダー不平等を示す題材や内容は、ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフサイを取り扱った課のみであった。言い換えれば、男女不平等やジェンダー不平等という問題に対して、学習者らは、日本と大きく社会環境が異なるパキスタンの事例でしか触れることができないのである。登場人物の数の観点から言えば、教科書は男女平等から遠ざかり、教科書に登場する登場人物や、社会貢献や偉業を成し遂げた人物も、大半が男性である。

これらの事実が示すことは、この20年の間に、男女不平等や性別役割について語ることは、教科書にとって「必要のないもの」あるいは、天皇制や政治的な内容と同等の「問題とされるもの」と判断された。作成者側としては、既存の差別や不平等を明示的に語らないことが男女平等という解釈であろう。

しかしながら、実際の登場人物は、男性主体であり、作者が意図していない箇

所において、絵や図表としてステレオタイプの性差別として表出していることも事実である。

英語表現の教科書では、男女の絵や写真での描写に注目して調査を行った結果、2000年の教科書より、2017年の教科書の方が女性の比率が増加している結果が検出され、男女不平等は改善傾向にあると言える。

一方で、男女の絵や写真の表象においては、男性は「運動」や「労働」を示す絵や写真、女性は「感情」を表す絵や写真において、その男女比が大きく異なっており、表出されていた。これらの絵や写真が占める割合は全体の数から見れば少ないが、従来の教科書研究で言及されてきたステレオタイプの典型である。別の角度から見れば、比率の多い「発話」に関する写真や絵などは意識的に男女平等を意識して、絵や写真を挿入することが可能ではあるが、上記に示したステレオタイプの絵や写真の比率が大きく異なる結果は、作成者の無意識に存在する男女の所作へのバイアスが反映された結果ではないだろうか。

学習者への教科書における男女平等への意識やジェンダーに関する自由作文では、学校の教科書を例に挙げても、男女の異なるジェンダーへの認識が表出された。男性は社会を基軸に、女性は自身の家庭や男女の身体的特徴の差を基軸に意見を述べた。このように、性別の違いで視点が全く異なる。しかしながら、白熊の養育者となった飼育員の男性に対して、およそ9割の被験者が「母親」と答えた事実は、育てる役割は母親が担うという伝統的な男女の性別役割に対する無意識のバイアスに他ならないことを指摘したい。

第5章：結論

第1節：先行研究への貢献

本稿では、教育心理学における無意識のバイアスという潜在認知の知見を応用し、国際理解及びジェンダーの観点から高等学校の英語教科書の分析と実証的研究を行った。日本の英語教科書には、これまでの先行研究で指摘されていた米国や英国中心の登場人物や文化紹介で、真の異文化理解は可能であろうかという問いと、登場人物が男性中心という従来の教科書のジェンダー問題の二重の問題点が存在する。本稿では、従来研究の中心であった中学校の英語教科書を、教科書の種類が拡大した高等学校を対象として調査を行った。

リサーチ・クエスチョン1では、中学校の教科書で示された日本と米国の二項対立の状況を、高等学校の教科書ではどのような変化が検出されるかという問いに対して調査を行ったところ、教科書内で、架空の登場人物があるトピックについての紹介や議論を行う課では、従来の英米の文化事象を中心とする題材から、様々な国籍の人々が登場し、意思疎通の道具として英語を使用する場面が数多く見られる構成に変化した。(例：スカイプで、ニュージーランドとペルーの学生と話す課など) また、実存する登場人物の半生や社会的偉業を紹介した課(本稿では、偉人カテゴリーに含まれる人物)では、中学校の教科書と同じ傾向として、実際の日本人が最も多く登場する構成に変化した。国籍に関して言えば、英語を外国語とする国の人物も数多く登場し、共通語としての英語を意識した構成への変化も検出され、国際英語論の方向性が示された。したがって、国際英語論が支持されるという作業仮説1は支持されたと言える。この点において、従来、米国を含む中心円の国と日本の二項対立の傾向は、少なくとも今回の調査対象の教科書では見られなかったと言える。この傾向に対して、教科書に見る日本の英語教育の在り方と言えることは、従来、中学校の英語教科書において批判されてきた米国を中心とする中心円主義の英語から脱却し、高等学校では道具としての国際英語としての英語教育のあり方が示され、現在の日本の高等学校への進学率を鑑みても、米国偏重の異文化理解や国際理解は是正される機会が多いにあると言えるであろう。

リサーチ・クエスチョン2では、国際理解への意識や態度に関して、学部や専

攻間での差は検出されるのかという問いに対して、アンケート調査を行った。日本の学習指導要領で、国際理解が明示されているのは、国語・外国語・社会科全般であり、英語を専攻とする大学生は、国際理解への意識も高いと想定されたが、結果としては、英語を専攻としない大学生群の方が、地球的問題とされる多文化共生や環境問題に対して、より高い関心を示していることが検出され、英語を大学で専攻として学ぶことで、国際理解への態度や関心がより涵養されるとは必ずしも言い切れないと言えるのである。また、英語専攻群は、国内における異なる文化を持つ者同士の交流よりも、海外での体験や経験を異文化理解として捉えている傾向が強く表出され、学部間で国際理解への認識や態度は異なるという作業仮説2は支持された。無論、専攻や学部が異なれば、それぞれの国際理解の解釈は異なって当然という意見もある。作業仮説2の目的は、多様な概念を包括する国際理解の捉え方の学部間での差異や認識を示すことであり、何を国際理解とするのか、国際理解の具体的な定義は、英語教育においても、国際理解教育においても全く異なる。最終的には、各研究分野の研究者や教員に委ねられてきたのも事実であり、本稿では、その事実を指摘した上で、実際の学部間での認識を示したことが先行研究への大きな貢献であると言える。

リサーチ・クエスチョン3では、国際英語論の方向性を示す教科書から学んだ大学生の英語規範について、自由記述を含むアンケート調査を行った。結果は、留学を通して共通語としての英語使用を体験したにも関わらず、英語を専攻する大学生群の方が、英語母語話者に強い拘りを持っていることが検出された。両群共に、「最終的には、通じれば良い。」という立場を支持し、作業仮説3の国際英語論を支持するという仮説は支持されているようにも見受けられるが、「英語を勉強するなら、先生は英語を母語とする人が良い。」という質問に対して、「あまり思わない」や「全く思わない」を選んだ回答は0件であった結果であった。したがって、今回の被験者においては、英語学習では英語を母語とする教師を希望すると捉え、作業仮説3の国際英語論を支持するという仮説は棄却されるという判断とした。自由記述の内容を見ると、英語を専攻する学生は、英語の発音面において、「母語話者に対する憧れ」や「自身の勉強の到達点」という記述が大半であり、これは、Timmis (2002.p,242)でも、“It was clear that some students saw native-speaker pronunciation as a benchmark of achievement.”と指摘されているように、英語が外国語である国の学習者には、しばしばあることと言える。筆者は、「ネイティブ・スピーカー（英語母語話

者)」という言葉こそが、英語学習におけるバイアス、言い換えれば、非母語話者教師に対する「偏見」を生み出す要因になると捉えている。今回の調査においても、アンケート調査において、「人や友達をその出自で選んではいけない。」という平等や公平性の質問に対して、ほとんどの回答者が「強く同意する」あるいは「同意する」と示しているにも関わらず、英語学習においては、英語母語話者を選ぶ傾向が検出された。つまり、教科書や外国人指導助手をはじめとするテレビや語学参考書などの様々なメディアによって作り上げられてきた「英語教師像」が固定概念化され、無意識のバイアスとして、英語を母語とする教師への自動的選好が引き起こされたと考えることができるのではないだろうか。そして、一度、固定概念になってしまった認識や物の見方は、簡単には払拭できないことをBanaji & Greenwald (2013)においても指摘されており、実際に、様々な国の人々と共通語としての英語使用を経験したにも関わらず、英語母語話者を理想とする学習法が定着している被験者も数多く見られた。

リサーチ・クエスチョン4では、教科書における男女平等に関する問いを立てた。分析は、登場人物の性別と、絵や写真の描写に関する男女の表象と二種類行った。結論を先に言えば、読解の教科書とされる英語コミュニケーションでは、登場人物の男女比が是正される方向ではなく、拡大する方向に変化が検出された。英語表現の教科書では、男女比は是正される方向に変化が検出された。したがって、現行の教科書では、男女の登場人物は、平等の方向に改善されるという作業仮説4は、英語コミュニケーションでは棄却され、英語表現では支持された。先行研究への貢献としては、高等学校の教科書においては、質的には、男女平等を意識した構成⁸と言えるが、登場人物の数量的には、国際貢献を行った人物や模範とされる実存する偉人を登場させた結果、教科書自体が男性優位の構成となり、まさに無意識のバイアスの作用するところではないだろうか。また、実際の著名な日本人が偉人として教科書に数多く登場する構成となり、学習指導要領に記載の教育基本法において「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」と明示された結果と言え、先行研究への貢献と

⁸ 20年前の教科書では語られていた男女平等の題材や「男は外で仕事」や「女は家で家事と育児」という性別役割の内容は姿を消し、性別やジェンダーに関する話題や、男女不平等に関する話題が、パキスタンの事例を除いては、一切登場しない。

しては、未だに、高等学校の英語教科書においても、日本人優位の英語教科書が引き継がれているということが明らかになった。以上が本稿での仮説検証から得られた先行研究への貢献である。これらを踏まえて、次節で教育的示唆を示す。

第5章：結論

第2節：教育的示唆

国境を超えた人々の往来が加速し、地球上の情報が瞬時に入手できる時代において、英語は、英国や米国の生活や習慣を知るための教養的役割から、多様な文化的背景を持つ多様な他者と意思疎通を行うための道具となり、教科書の国際理解も英米の文化を紹介する異文化理解から、様々な国籍の人々と話すためのツールや地球を一つの共同体とする視点を含めた構成となった。

しかしながら、日本社会の日常生活では、特殊な教育環境や、外国人観光客を相手とするサービス産業や飲食業などを除いて、一般の生活圏内において、実際に英語を使う場面はほとんど無いに等しい。したがって、学校で使用される教科書こそが日本の学習者らの英語のモデルとなり、知識と同時に、模範となる人間像や、こうあるべき価値観を大きく与える媒体となる。

本稿では、国際理解とジェンダーの観点から、教科書の比較や学習者に存在する無意識のバイアスについて論じた。ここでは、各章での結果と考察を踏まえて、教育的示唆を述べる。

現行の英語教科書は、特定の集団に対しての差別や偏見とも取れるような明示的な記述どころか、暴力的な場面や世界の窮状を伝える場面は、ほとんど検出されない。教科書検定が厳しく精査に行われ、そのような場面や記述は校閲の対象となる証拠である。

例えば、国際理解の観点から言えば、黒人が社会の中で虐げられ続けた話ではなく、白人と黒人が一致団結して行うスポーツ競技の話や、戦争の話で言えば、日本軍が行った朝鮮半島での強制的な統治の話ではなく、戦争を体験した偉人たち⁹の経験が、漫画や発明に活かされたという、非常に直接的で暴力的な表現が消え、友好的で、平和的な内容の間接的な教科書に変化した。この国際理解の観点における教育的示唆としては、僅か20年の間で、国際社会の様々な問題が実際に起こった事例として提示されず、模範的な場面ばかりの教科書、言い換えれば、様々な争いや偏見のない画一化された理想的な教科書で、学習者ら

⁹アンパンマンの生みの親であるやなせたかし氏と、カップヌードルを発明した安藤百福氏

の固定概念が覆され、現行の学習指導要領が目指すところの価値観の変容は促されるような教育に貢献できるのかという点である。ユネスコの示した国際理解教育は、究極的には、戦争を繰り返さないための平和や人権を尊重する人間的教育が目指されている。戦時中の非人道的な行いや、社会の中で黒人に対する差別が公然と行われていた過去を知ることが、自らの価値観に対し、疑問を投げかけて自省するきっかけになるのではないだろうか。

ジェンダーの観点から言えば、男女の性別役割に関してどうあるべきかと問いかけることも、従来の男は仕事、女は家事と育児という記述も一切なくなった。一方で、支援が必要な「ひとり親世帯」と記述するのではなく、「母子家庭」という教科書作成者の無意識のバイアスとも取れるような記述も存在するものの、全体的に見れば、敢えて何も語らないことが、教科書上の男女平等と見受けられる。しかしながら、本稿の男女平等のために教科書はどうあるべきか？の作文調査でも明らかになったように、男性は社会を基軸に、女性は自身の家庭を基軸にジェンダーに対する認識が形成される。そして、白熊の養育者が男性であるにも関わらず、養育する者の呼称としては、圧倒的に母親(mother)が多かった事実から、学習者自身の「養育者は母親」という強い固定概念が示されたように、ジェンダーに関しては、教科書以外で、すなわち、被験者を取り巻く社会環境や家庭環境が大きくジェンダーや男女はこうあるべき価値観や認識の形成に作用する。教科書上の男女平等とは、敢えてその話題や性別役割を強調しないことを男女平等としているが、学習者に男女平等とは何かと考える機会や、価値観や意見の交換の機会を奪うことも事実である。

また、教科書の作成者側に一切の差別意識や偏見はなくとも、特に偉人として登場する人物が男性優位である事象においては、「社会的偉業や国際貢献をする人物は男性である。」という認識を与え、女性の学習者が自身の可能性を、教科書によって狭めてしまう要因になり得ることが何よりも懸案される。加えて、日本も含めた国際社会では、同性愛者やトランスジェンダーの人々に対する理解や認知が進む中、教科書の登場人物は未だに、男女の枠から抜け出せていない。多様な他者を尊重することを教育目標に掲げるのであれば、教科書こそが積極的に彼らを登場させ、学習者らの意識や理解の促進を目指すべきではないだろうか。

最後に、本稿の知見を教員の役割に換言すれば、教科書にもバイアスが存在し、自身にも無意識のバイアスがあることを認識する必要がある。過去の先行研究でも指摘されてきたことであるが、気づかぬうちに特定の学習者らに対して否定的な見解を与えている恐れがあることを自覚しなければならない。常に自らを内省し、従来の固定概念や価値観に捉われて、本質的な判断を見誤ることがないように律する必要がある。最終的には、教員の力量に尽きるのかもしれないが、教科書の取り扱いにおいては、現実社会との乖離を指摘する批判的な視点を養い、教科書に存在する些細な偏向した思想を見抜いた上で、教員自身が教科書に対して問題提起を行い、学習者らが様々な価値観と出会うきっかけになるような授業づくりの一助になれば幸いである。

第5章：結論

第3節：本調査における限界

本節では、本調査における3つの限界点を述べる。一つ目は、第3章で示した題材の分類方法である。例えば、地雷撤去後のカンボジアでハーブを使った商品を作り、地域に安定した生活収入源をもたらす仕組みを構築した日本人女性の話は、ある角度から見れば、地球的課題の国際協力に分類されるし、別の角度から見れば、偉人女性という分類になると言える。このように二つのカテゴリーに選別可能な題材も存在した。その際は、大学生に複数人に教科書を読んでもらい、登場人物の知名度・内容・記述の観点から分類作業を行ってもらい、最終的には筆者の判断によって分類した。したがって、ある題材に関しては、可能な限り第三者の意見も踏まえた上で、筆者の判断によって分類されていることを示さなければならない。

二つ目は、教科書の選定方法である。2017年は、日本の高等学校全体の採択率の7割を占める主要な4つの出版社から発行された教科書を選定した。しかしながら、教科書単体ごとの採択数までは示されておらず、教科書によって同じ出版社でも採択率が大幅に異なる可能性があることを指摘しなければならない。さらに、現行の高等学校の教科書の数は30冊を超えており、採択率の低い教科書においては調査が及ばず、女性優位な教科書や、本稿の調査で使用した教科書には検出されなかった差別や暴力などの明示的な記述がある教科書も存在する可能性もある。また、2000年の教科書においては、国立国会図書館や、東京の教科書図書館においても、当時の採択率と合致する教科書は残っておらず、筆者が入手可能な教科書に偏ってしまったことも事実である。

三つ目は、被験者の選定である。今回質問紙の対象とした大学生は、近畿圏内の4つの大学に通う大学生に調査の協力を依頼した。彼らの8割が関西圏内の出身であり、日本人の大学生の傾向と言えるほどサンプル数も多くないのが現状である。

今後の課題と展望して、今回、対象としたのは採択数では七割を占める教科書ではあるが、種類では全体の三割である。したがって、次回の調査では、分析対象の教科書の冊数を増やし、採択数が少ない教科書においても同様の調査の

必要性を課題として示したい。そして、今回は大学生を対象としたが、より結果の一般化を行うためには、実際の教科書から学ぶ高校生を対象としたアンケート調査や実証実験を、対象地域を拡大して行う必要があることも事実である。また、本稿は、教科書が男女平等を前提に作成されているという認識の元、教科書の無意識のバイアスを表出することを念頭に置いた。しかしながら、教科書が意図的に偉人として男性を優位に登場させたか否かは、教科書を実際に作成した著者にしか分からないことである。男性を優位に登場させ、女性の数が少ないことを学習者に気づかせる狙いがある可能性もある。筆者が教科書作成に携わる英語教員数人に聞き取り調査を行ったところ、明示的な男女平等に関するガイドラインは存在しないとの回答が得られた。したがって、次回の調査では、教科書記述に関して、教科書執筆者にインタビューを行い、無意識のバイアスの表出か否かを確認する作業の必要性を指摘したい。

付録 1 : 英語コミュニケーション教科書まとめ (2017 年度版)

以下は、教科書の登場人物を国籍と性別に分類した表であり、教科書ごとの登場人物の分類と題材・内容の結果を示す。

2017 年 教科書	国籍				性別		
	日本	米国	他 ¹⁰	合計	男	女	合計
CROWN	7	7	12	26	23	3	26
VISTA	2	2	6	10	7	3	10
MY WAY	3	0	4	7	3	4	7
All aboard	4	0	11	15	9	6	15
Power On	6	5	2	13	9	4	13
PROMINENCE	8	8	17	33	27	6	33
POLESTAR	10	2	5	17	11	6	17
BIG DIPPER	2	0	6	8	5	3	8
COMET	10	0	5	15	10	5	15
ELEMENT	6	7	7	20	16	4	20
LANDMARK	8	2	7	17	13	4	17

¹⁰ 国籍や出自が記載されていない人物や架空の人物も含む

CROWN				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	若田光一	2・9	宇宙飛行士	日本
2	辻井伸行	4	ピアニスト	日本
3	クロード・ドビュッシー		作曲家	フランス
4	フレデリック・ショパン		作曲家	ポーランド
5	ルートヴィッヒ・ヴァン・ベートーヴェン		作曲家	ドイツ
6	スティーヴィー・ワンダ		ミュージシャン	アメリカ
7	ヴァン・クライバーン		ピアニスト	アメリカ
8	チャールズ・E・マクジルトン	5	NPO 理事	アメリカ
9	ジェイソン	Reading 1	学生	記載なし
10	Kenji	6	記載なし	記載なし
11	板茂	7	建築家	日本
12	ジョー・オダネル	8	写真家	アメリカ
13	石黒浩	9	工学者	日本
14	S (ロボットを作った博士の名)		ロボット研究者	日本
15	チャールズ・M・シュルツ	10	漫画家	アメリカ
16	ラナトゥング・カルナナンダ	Optional Lesson	元陸上競技選手	スリランカ

17	ビリー・ミルズ		陸上競技選手	アメリカ
18	バラク・オバマ		大統領	アメリカ
19	市川崑		映画監督	日本
20	デボン・ハリス		ボブスレー選手	ジャマイカ
21	ダドリー・ストークス		ボブスレー選手	ジャマイカ
22	クリス・ストークス		ボブスレー選手	ジャマイカ
23	マイケル・ホワイト		ボブスレー選手	ジャマイカ
1	内野加奈子	3	海洋写真家	日本
2	ジェーン・グドール	6	動物行動学者	イギリス
3	ファン・ティー・キム・フック	8	平和運動家	カナダ

	カテゴリー ¹¹		本文の内容
	大	小	
1	多	言	文字がない視覚情報のみで構成されたピクトグラムについて。絵や写真で他者に意味を伝えるという行動も言語活動の一部であり、作業中や非常階段の印などが登場。
2	グ	共	宇宙飛行士の若田光一が登場し、様々な国の乗組員と共に過ごし、宇宙での様子や地球市民という考え方に至るまでの体験や経験の話。
3	偉人		ハワイのホクレア号に日本人初の乗組員として乗船した内野加奈子の物語。ハワイの伝統的な航海戦術である星や風のみを頼りに移動する 2000 キロの船旅の話。
4	偉人		盲目のピアニストである辻井伸行が国際コンクールで 1 位を獲得し、世界的に有名になるまでの話と、東日本大震災での犠牲者に対するチャリティイベントの話。
5	地	環	アメリカ人のチャールズ・E・マクジルトンは日本で最初のフードバンクを設立し、余剰食料を飲食店や企業から寄付を募り、困窮する世帯に配るというシステムを構築した話。
6	偉人		チンパンジーの研究で世界的に有名なジェーン・グドールが、野生のチンパンジーと人間の共通点をインタビュー形式で答える話。
7	偉人		建築家である坂茂の家づくりを通じて社会貢献を行う話。主に震災や災害で被災し、家をなくした人々が避難する場所で、快適に過ごせるように工夫した。2014 年に国際的な賞を受賞してもなお、より良い世界のために邁進し続ける話。
8	地	戦	20 世紀を振り返るというテーマで、アメリカ人ジョー・オダネルが撮影した第二次世界大戦時に長崎で撮影された写真とベトナム戦争中に撮影された写真について語る話。
9	グ	科	ロボット技術の進化について。ロボットがより人間に近くなった話や、災害救助や将来的には、自身で人間のように自身で物事を考えることのできるロボットが開発されるであろうと予測を立てる話。

¹¹ カテゴリーの分類は、それぞれの頭文字を使用し表記している。多は多文化社会、グはグローバル社会、地は地球的課題を示す。

10	偉人	スヌーピーの生みの親であるチャールズ・M・シュルツの生い立ちから晩年までの人生を、登場人物のルーシーやライナスのモデルとなった人々を交えて紹介する話。
----	----	---

VISTA				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	マイク	2	学生	アメリカ
2	ピエール・ド・クーベルダン	4	オリンピック委員会事務局長	フランス
3	ディック・ブルーナ	9	グラフィックデザイナー	オランダ
4	辻井伸行	10	ピアニスト	日本
5	ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン	10	作曲家	ドイツ
6	スティーブ・ジョブズ	12	実業家	アメリカ
7	アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ	Reading 1	作家	フランス
1	彩	2・5	学生	日本
2	アルニイ	8	学生	タイ
3	ソライダ・サルワナ	8	医者	タイ

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	地	環	沖縄県慶良間諸島にある「ケラマブルー」と呼ばれるサンゴ礁の話。強い波の防波堤の役割や海の生き物たちを守る役割をしている。
2	多	比	アメリカの留学生のマイクが彩に質問をする話。飲み物売るだけでなく、傘や花を売る自動販売機や日本の高校の制服について。
3	多	比	メキシコの代表的な料理であるタコスやブリトーが、日本でも人気になった。サボテンを食べる文化も、日本の味噌汁と融合するのではないだろうか、と食文化を紹介する話。
4	地	平	スポーツの祭典であるオリンピックは、若者の身体と精神を鍛え、世界平和に貢献する。1896年のオリンピックがアテネから発祥し、様々な競技が行われてきた話。
5	地	環	どんなに厳しい環境でも生息できるマダガスカルのパオバブの木の話。近年、現地の人々がパオバブの木をロープ作りや薬のために、土地を大量の水で覆い、根を腐らせることを意図的に行っており、保護する方法はについて話し合う。
6	多	日	日本の浮世絵に描かれている、江戸時代の歯磨きの習慣についての話。歯ブラシは、当時、房楊枝と呼ばれ人々の間で人気であり、歯磨き粉売りは、長い刀の先に粉を付けて売り歩いた。
7	グ	世	世界遺産の一つであるペルーのマチュピチュの話。太陽の光を受けて、影を作る大きな石が当時の時計代わりであり、段々畑にはジャガイモやとうもろこしが植えられていた。
8	地	戦	人間が地中に埋めた地雷で足を傷つけた象の話。命を救うために足を切断し、義足を付けて今は生活を行っている。
9	偉人		ディック・ブルーナの代表作のミッフィーの生まれた経緯や、ユニセフをはじめ、様々な国際的な機関の支援を集めるためにミッフィーが
10	偉人		盲目のピアニストである辻井伸行が国際的なピアノコンサートで優勝するまでの道のりの話。常に目標を持つことが重要と語っている。

11	グ	共	自然界に存在する動物や植物の形状が、我々の身の回りの物に実は活かされている。車の車体のデザインや、ファスナーなどがその一例。
12	偉人		コンピューターの世界に革命を与えたスティーブ・ジョブスの半生を紹介する。常に他人と異なる思考や、ハングリー精神を持ち続けることの重要性を説いた。

MY WAY				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	やなせたかし	2	漫画家	日本
2	ピエール・ド・クーベルタン	3	オリンピック委員会事務局長	フランス
3	クルクメール	7	医療士	カンボジア
4	アウンサンスーチー	1	政治家	ミャンマー
5	山本容子	4	銅版画家	日本
6	篠田ちひろ	7	起業家	日本
7	ビアトリクス・ポター	10	作家	イギリス

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	比	名前（性と名）の順番は国や文化によって異なる。従来、英語では名前が先であったが、近年の主流は自分で決めること。カンボジアやモンゴルでの名前の順序にも言及。
2	偉人		アンパンマンの生みの親であるやなせたかしの半生について。第二次世界大戦の頃の困窮した経験により、ヒーローは人々の問題の解決を助ける存在であるという考えから作られたのがアンパンマンである。
3	地	平	オリンピックの起源や目的や、世界が一つに団結する重要性について。勝利が最終的なゴールではなく、参加することに意義がある。
4	多	比	近年、人気を博している病院内での絵画や作品について。ホスピタルアートと呼ばれ、患者だけでなく、医療従事者も心を落ち着かせ、癒しの効果を与えている。世界各国のホスピタルアートが登場。
5	多	言	世界の様々な文字がどのように変化して現在の形として定着したのかを探る。古代の文字や、文章を書く方向の種類、世界の字の使われ方は各地で異なる。
6	多	比	フランス・メキシコ・トルコの世界の食文化について紹介し、和食に必要な4つの要素について説明。日本人が食べる洋食の伝来や和食を守るための活動について紹介。
7	地	国	篠田ちひろがカンボジアで起業するまでの経緯。地雷とハーブについて学び、地雷の村からハーブの村と呼ばれる場所に変え、地元の人々に安定した仕事を供給することが夢と語る。
8	グ	科	ギリシャの島の海中で見つけた宝の箱。それはアンティキララの機械と呼ばれ、古代ローマの時代において、月や太陽の周期の計算に使われていたことを現代の科学技術によって解明された話。
9	グ	共	世界の様々な国や地域で放映されているセサミストリート。セサミストリートは様々な異なる外見や特徴の子同士も仲

			良くする。多様性の重要性について。
10	地	環	イギリスの工業化と発展共に、環境は悪化し、ピーターラビットの作者であるビクトリアス・ポターは一の作者湖水地方の自然を守るべく環境活動に従事する話。

All Aboard!				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ドージ	1	学生	モンゴル
2	ジャックスミス	2	学生	オーストラリア
3	錦織圭	2	プロテニス選手	日本
4	歌川国芳	6	浮世絵師	日本
5	若田光一	8	宇宙飛行士	日本
6	警察官	Reading1	警察	記載なし
7	鰻屋の亭主	Reading1	店員	記載なし
8	けちな男	Reading1	記載なし	記載なし
9	定吉	Reading1	記載なし	記載なし
1	木村結衣	1, 3	学生	日本
2	ラーラ	1	学生	アイスランド
3	ソフィエデレ	3	学生	フランス
4	マララ・ユスフザイ	10	人権運動家	パキスタン
5	女性	Reading1	記載なし	記載なし
6	おかみさん	Reading1	記載なし	記載なし

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	比	モンゴルの遊牧民であるドージとアイスランドに住むラーラが自分の家を紹介し、気候や土地にあった家の形状や材質が示される。
2	偉人		世界のトップテニスプレイヤーの1人である錦織圭の話。13歳の時にアメリカの有名なテニス学校に入学したものの、英語が全くわからずに辛い経験をしたものの、17歳でプロになる迄の経緯。
3	多	日	日本の漫画は、世界でも有名であり、多くの言語に翻訳されている。オーストラリア人とフランス人の留学生が、母国での日本のアニメ人気について語る話。
4	グ	世	リンダが休暇中にボリビアを旅行し、世界遺産に選定されたウユニ塩湖について感動したという内容のメールを結衣に送る。
5	多	日	北海道の帯広農学校に在籍する農場を専門にする高校生の話。彼らは毎日、牛や豚、その他の動物の世話をし、将来も農業に関連する仕事に就きたいと話す。読者の夢は何か？と問いかける。
6	多	日	美術クラブに所属している結衣が、江戸時代の有名な画家である歌川国芳が描いた浮世絵についてプレゼンをする。
7	地	環	南極に住む皇帝ペンギンの話。餌であるオキアミが地球温暖化によって減少し、食糧が少なくなり栄養失調に陥っている。今後も地球温暖化が進むと、皇帝ペンギンは絶滅するであろう。
8	偉人		5歳の時に見たアポロ11号の月面着陸を見て、若田光一が宇宙飛行士を志した幼少期の話から、国際宇宙ステーションでの活動の様子や仲間との信頼関係の築き方について。

9	地	戦	第二次世界大戦後、沖縄県全体が飢餓に苦しんでいた当時、ハワイに住む日系アメリカ人は、友情の証として多数の豚を沖縄に船で送った話。
10	偉人		17歳で平和ノーベル賞を受賞したマララ・ユスフザイの人生の話。銃撃され危篤状態に陥り、一命を取り留めた話やニューヨークの国際本部で教育における男女平等を訴え、演説した回想録。

Power On				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	長友佑都	3	プロサッカー選手	日本
2	安藤百福	6	発明家	日本
3	古川聡	7	宇宙飛行士	日本
4	若田光一	7	宇宙飛行士	日本
5	比嘉光龍	8	講師	日本
6	ネルソン・マンデラ	9	政治家	南アフリカ共和国
7	アントニオ・ガウディ	10	建築家	スペイン
8	外尾悦郎	10	彫刻家	日本
9	ネルズ	Reading1	記載なし	アメリカ
1	カトリーン	Reading1	学生	アメリカ
2	クリスティーン			
3	ダグマー			
4	ジェンセン			

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	日	日本の象徴として富士山の紹介。お札や銭湯などあらゆる生活の場面で描かれている。富士山への登山も近年、人気が出てきており、山頂から手紙を送ることや、山頂で結婚式を挙げることも可能である。
2	グ	科	様々な動物たちの睡眠の研究を報告する話。肉食動物や草食動物の寝方や時間の差や、まだ解明されていない渡り鳥の睡眠について。
3	偉人		長友選手の幼少期の困難な状況から、大学へ進学し、プロのサッカー選手になるまでの経緯の話。努力は必ず報われると、若者へのメッセージとして示している。
4	多	日	「かわいい」という日本語は、実は世界の各地で使用されている。特に、ハロー・キティが、その言葉の代名詞として有名であり、海外での日本の文化について。
5	地	環	バナナは、巨大な草に生育し、皮から紙や糸を作ることができる。バナナを余すところなく循環させて環境保護に役立てようという話。
6	偉人		安藤百福が発明したインスタントラーメンが誕生するまでの物語。第二次世界大戦後、食べ物がないことがどんなに辛いことかを体験した。アメリカのスーパーで、紙コップでラーメンを出されたことからカップヌードルの開発を思いついた。
7	偉人		宇宙飛行士である古川聡の国際宇宙ステーションでの経験や仲間との話。地球上では当たり前前の空気が、宇宙では貴重なものとなり、価値観が大きく変わったという。
8	多	日	沖縄に住む比嘉光龍（ふいじゃ・ばいろん）は、日本の国内の消滅の危機にある言語の一つ沖縄語（ウチナーグチ）の保存・継承活動を行っている話。
9	地	人	アパルトヘイトが撤廃されてからも、南アフリカ共和国では人種差別横行していた。しかし、ラグビーのワールドカップで、南アフリカ共和国で開催され、歴史的勝利を収めた瞬間は、黒人も白人も両方が喜び合った。

10	偉人	今もなお建設が続くスペインのサグラダ・ファミリア。そこで働く日本人彫刻家の外尾悦郎の話。外尾は、成功の秘訣は、真似をするのではなく、自然から学ぶことだと強調。
----	----	---

PROMINENCE (男性登場人物)				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ユーリイ・ガガーリン	1	宇宙飛行士	ロシア
2	若田光一	2	宇宙飛行士	日本
3	ルネ・デカルト	2	哲学者	フランス
4	チャールズ・ダーウィン	3	自然科学者	イギリス
5	ジャックマクフライ	3	記載なし	記載なし
6	ファビオ・チャベス	4	音楽家	アルゼンチン
7	ニコラス・ゴメス	5	記載なし	記載なし
8	トーマス・エジソン		発明家	アメリカ
9	クリストファー・コロンブス		探検家	イタリア
10	マルティン・ルター		神学者	ドイツ
11	葛飾北斎		浮世絵師	日本
12	クロード・モネ		画家	フランス
13	フィンセント・ファン・ゴッホ		画家	オランダ
14	パブロピカソ		画家	スペイン
15	フェリックス・ブラックモン		画家	フランス
16	やなせたかし	6	漫画家	日本
17	マーク・エイブラハムズ	7	編集者	アメリカ
18	ロイ・グラウバー		物理学者	アメリカ
19	井上大佑		発明家	日本
20	親見正則		医者	日本
21	今井真介		研究者	日本
22	ロバート・メイ		物理学者	オーストラリア
23	三浦公亮	8	宇宙工学者	日本
24	ルートヴィヒ・グットマン	9	神経学者	ドイツ

25	フィリップ・ルイス	9	記載なし	イギリス
26	ロバート・モーゼズ	10	政治家	アメリカ
27	エレノア・ルーズベルト	10	大統領	アメリカ

PROMINENCE (女性登場人物)

数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	レイチェル・ルイーズ・カーソン	1	生物学者	アメリカ
2	内野加奈子	3	海洋写真家	日本
3	ターニャ	4	オーケストラ奏者	記載なし
4	ジュリアナ・ペニャランダ	5	映画製作者	記載なし
5	ジェイン・ジェイコブズ	10	ジャーナリスト	アメリカ
6	シャーリー・ヘイズ	10	記載なし	アメリカ

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	地	環	宇宙飛行士のガガーリンの言葉や、レイチェル・カーソンなど早くから地球の環境問題に対して警鐘を鳴らしていた著名人たちを紹介。
2	グ	科	動物にも感情はあるのか？という問いに対して、科学的に解明を行う。例えば、象には死に対する概念を持っており、死んだ仲間の象に対して、畏敬の念を払うという。
3	偉人		ハワイのホクレア号という星や風の動きで航海する船に、日本人初の乗組員として乗船した内野加奈子の物語。同じ船の上では、仲間とのコミュニケーションを大事にし、気配りが大切だと感じた。
4	地	国	パラグアイで最も貧しい町の一つであるカテウラを舞台にした話。ファビオ・チャベスは学校に行けない子供に音楽を教え、ゴミの山から楽器に使えるような様々なものを再利用しオーケストラを作った。世界中の様々なメディアが注目し、映画化された実話。
5	多	日	ヨーロッパで高い人気を誇る日本文化。特に絵画がの世界では、未だに浮世絵師である葛飾北斎の人気は衰えることを知らない。
6	偉人		アンパンマンの生みの親であるやなせたかしの半生を紹介。正義の戦争と言われて中国の戦争体験から困っている人々を助けることが本当の正義のヒーローだと考え、アンパンマンができた。
7	多	比	マーク・エイブラハムズによって創設されたイグ・ノーベル賞は、不名誉な賞という意味で、毎年日本人は受賞している。本文では、歴代の世界中のイグノーベル賞の受賞作品を振り返る。
8	偉人		日本の伝統的な折り紙は、今や宇宙科学にも応用されている。三浦折りと呼ばれる三浦公亮が発明した折り形は、宇宙船の衝撃緩和やアルミ缶の飲み物にも採用されている。
9	偉人		パラリンピックを考案したルートヴィヒ・グットマンの半生を描く。病院で勤務していたグッドマンは、車椅子競技を一人の患者に提案し、イギリス代表選手として育てた。

10	偉人	ニューヨークの高速道路建設の都市計画に反対したジェーン・ジェイコブスの話。環境破壊の悪化を防ぐために、市民運動を率先して行い、都市計画を頓挫させた。ジェーンの功績は、各地での都市計画の先駆けとなり、参考にされている。
----	----	--

POLESTAR				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	石川直樹	3	写真家	日本
2	ジョン・ニュートン	5	牧師	イギリス
3	松崎政三	7	教授	日本
4	正岡子規	8	俳人	日本
5	松尾芭蕉		俳諧師	日本
6	小泉八雲		作家	日本
7	ヘルマン・ファン・ロンパウ		政治家	ベルギー
8	ステファン・サットン	9	ブロガー	イギリス
9	ジョー・オダネル	10	ジャーナリスト	アメリカ
10	ウィンストン・チャーチル	Optional Lesson	政治家	イギリス
11	オスカー・ワイルド	Reading 1	詩人	アイルランド
1	本田美奈子	5	歌手	日本
2	ジュディ・コリンズ		歌手	アメリカ
3	白鳥英美子		シンガー ソングライター	日本
4	相川翔子	7	栄養管理士	日本
5	杉本海夢		記載なし	日本
6	玉置明日美		会社員	日本

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	日	日本の和食の食文化は世界的に有名である。フランスから若い料理人が和食を学びに来日し、ロシアで振舞われる日本の寿司文化の紹介など。
2	地	環	プラスチックボトルが開発されたきっかけや、環境汚染の原因とも言える増え続けるマイクロプラスチックに対する各国々の取組みの紹介。
3	偉人		探検家である石川直樹の半生を紹介した話。高校生の時にソインドに渡って以来、旅をすることの魅力に取り憑かれ、北極点から南極点へ行く壮大なプロジェクトの紹介。
4	グ	世	世界遺産に登録されたニュージーランドの小さな島の紹介。観光地として人気があり、夜には満天の星空星が観察できる。
5	偉人		18世紀、奴隷商人であったジョン・ニュートンは、船が沈没するほどの嵐に見舞われ、神に祈りを捧げ、一命を取り留めたことがきっかけで、牧師に転身した。日本でも有名なアメージング・グレースという歌の歌詞が当時作られた。
6	地	人	シエラレオネという小さな国ではダイヤモンドが豊富に取れる。シエラレオネではダイヤモンドを巡って、内戦が起きている。ダイヤモンドと人の命を話。
7	グ	科	関東学院大学の玉置明日美、相川翔子、杉本海夢の三人が、溶けないアイスクリームを科学的に作った話。
8	多	日	日本の文化を代表する俳句が世界で親しまれている。様々な国で、俳句大会が行われており、日本でも英語俳句が有名になりつつある。文化と言語が国と時間を超えて、人々を魅了する話。
9	偉人		15歳で癌を患ったステファン・サットンの半生を描いた話。19歳でこの世を去るまでに自身の体調や様子を、SNSを通じて世界中に発信した。彼への寄付の総額は、5億円以上を超える。
10	偉人		写真家のジョー・オダネルは、第二次世界大戦後、7ヶ月間、広島と長崎でアメリカ軍の指令で、写真を撮ることを

		命じられた。彼が見た世界や状況を写真と共に振り返り、戦争の惨状を伝える話。
--	--	---------------------------------------

BIG DIPPER				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	リー	1	学生	中国
2	ルーク	1	学生	オーストラリア
3	やなせたかし	3	漫画家	日本
4	田嶋幸三	10	日本サッカー協会会長	日本
5	ハンス・ウルフ	Reading 1	兵士	ドイツ
6	ミCHEル	1	学生	フランス
7	ジョアン・ローリング	6	小説家	イギリス
8	マクファーソン	Reading 1	記載なし	記載なし

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	日	フランス、中国、オーストラリアから来た留学生の日本の高校生活に対する疑問点や意見を交換する。制服や放課後の掃除など、各国にはない学校文化について。
2	地	環	動物園の人気者のパンダの魅力について。中国が友好の印としてパンダを日本に送った。現在、パンダは絶滅危惧種とされ、保護や野生のパンダを増やすことが中国では行われている。
3	偉人		アンパンマンの生みの親であるやなせたかしの半生を描く。当初、アンパンマンは顔を食えることから非難が相次いだが、今では多くの子供たちに愛される。原点は、戦争時代の貧しい体験や、困ってる人々を助けることが本当のヒーローの姿だとやなせは考えた。
4	グ	科	電話の期限は 1870 年代のアメリカとされ、現在では、携帯電話が当たり前の世の中である。携帯電話では、家族の前で話すことなくプライベートが守られると共に、新たな問題も生じる。
5	グ	共	どの年代に対しても、使用者フレンドリーであるユニバーサルデザインの紹介。自動販売機、缶、階段の手すり、トランプ、薬のデザインなど。他者を思いやる気持ちの重要性について。
6	偉人		「ハリーポッター」シリーズの作者ジョアン・ローリングが、列車の中で話を思いつき、目的地に到着するまでにシリーズのほとんどを頭の中で完成させた。その後、出版社を探し、苦勞しつつも出版にこぎつけ全世界でヒットとなった話。
7	多	日	自転車に乗る人口が日本では増えつつあり、自転車通勤を奨励している会社もある。世界の自転車先進国であるニューヨークやフランスを参考に、日本での自転車に関する問題を話し合う。
8	多	日	子供から大人になる年齢は、何歳であろうか。日本でいう

			成人の年齢は、海外とは異なる。同じ日本人でも年代によって、大人と定義する年齢は異なるという話
9	地	環	農場から台所までの食べ物の移動距離を示す「フードマイル」について。フードマイルが遠いことで、運搬や輸送に対する二酸化炭素の排出が懸念され、地球温暖化にも影響する。
10	多	日	世界で活躍するプロサッカー選手は論理的思考能力に長け、正しい判断を瞬時に行うことができる。そのような能力を身に付けるためにどのように普段から過ごすべきか。

COMET				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ヒロト	1	学生	日本
2	ケンタ	1	学生	日本
3	トニー	3	カウンセラ ー	記載なし
4	タクミ	3	学生	日本
5	リョウタ	3	学生	日本
6	タケル	3	学生	日本
7	アルベルト	4	学生	ペルー
8	高市敦広	5	飼育員	日本
9	安藤百福	10	発明家	日本
10	上野英三郎	Reading 2	大学教授	日本
1	ミサキ	1	学生	日本
2	ユイ	1	学生	日本
3	エミリー	4	学生	ニュージ ーランド
4	ユキ	4	学生	日本
5	マララ・ユスフザイ	9	人権運動家	パキスタン

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	言	なぜ英語を学ぶのか。その重要性について。クラスで話し合う。アメリカ文化が好きと答える者、テストのため、外国人観光客と英語で話すためなど様々な意見が出る。
2	多	日	日本を代表する文化の一つである和食の特徴について。1つ目は、食事から四季を感じることができ、2つ目は、特別な行事の時にはハレの食事として長年親しまれてきた。
3	多	言	リョウタは、人間関係で悩んでいる。スクールカウンセラーのトニーにメールで相談する。(メールの英文の書き方を学ぶことが意図とされる。)
4	多	比	インターネットを使って、日本の学校と外国（ニュージーランド、ペルー）の学校との違いをそれぞれ話し合う。休み時間の長さや、学校の校舎を小学校と共同で使用している(ペルー)など。
5	グ	共	母親に育児放棄された白熊のピースを飼育員の高市敦広が、親となって育て上げた話。
6	地	国	「空飛ぶ車椅子」という高校生が主体となって活動するボランティアの紹介。壊れた車椅子を自分たちで修理し、アジアの国々に寄贈する。
7	グ	科	鳥や魚の群れは、互いにぶつかり合うことなく群れをなす。なぜ、そんなことが可能なのかを科学的に解明する。その技術は、ロボットカーに応用され、コンピューター・グラフィックで鳥の群れの再現し、そのシーンが映画に使用されるなど、様々な分野で自然界の知識が活かされる。
8	多	日	日本のコンビニが世界で成功した大きな理由について。1つ目は、展示が良いこと、2つ目は、通路に面する大きい窓があり集客につながる、3つ目は、違った大きさの棚のおかげで、全部の棚を一度に見ることができる。
9	偉人		ノーベル平和章を受賞したマララ・ユスフザイの話。テロリストに銃撃され瀕死の重傷を負ったにも関わらず、彼女は学校に行き続け、女性の教育権利の重要性を訴えた。
10	偉人		日清食品の創業者である安藤百福が、カップヌードルをア

		メリカのスーパーマーケットで思いつき、様々な改良を経て、世に送り出すまでの話。
--	--	---

ELEMENT				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	桂かい枝	1	落語家	日本
2	ジョン	2	記載なし	イギリス
3	エース	2	記載なし	イギリス
4	ジョージ	2	ライオンの 専門家	ケニア
5	アイザック・アシモフ	3	作家	アメリカ
6	サー・アーサー・チャールズ・ クラーク	3	作家	イギリス
7	山口彊	4	船の整備士	日本
8	バラク・オバマ	4	アメリカ大 統領	アメリカ
9	池田菊苗	5	化学者	日本
10	村田吉弘	5	料理人	日本
11	トマス・エジソン	6	発明家	アメリカ
12	ニック・ヴァーリー	8	記載なし	記載なし
13	ジェイムズ・ジョセフ・ブラ ウン・ジュニア	Reading 2	音楽家	アメリカ
14	ボブ	9	消防士	アメリカ
15	ポップシー	9	記載なし	アメリカ
16	ネルソン・マンデラ	10	政治家	南アフリカ 共和国
1	ローラ・レーン・ウェルチ・ ブッシュ	6	大統領の妻	アメリカ
2	谷真海	8	パラリンピ ック選手	日本
3	滝川クリステル	8	アナウンサ ー	日本
4	ルーシー・モード・モンゴメ リ	Reading 3	小説家	カナダ

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	日	日本の伝統的な文化である落語を英語で行う桂かい枝に日本人の高校生と彼らの ALT がインタビューを行う。英語を話すことで、日本の文化を世界中に伝えることができると、桂は話す。
2	グ	共	イギリス人のジョンとエースは、デパートで売っていた子供のライオンを衝動的に買った。次第にライオンは大きくなり、二人の手には負えなくなりケニアに返した。1年後、2人はケニアに行きライオンに会いに行くと、ライオンは2人のことを覚えていた。人間と動物の愛を描いた話。
3	グ	科	アメリカ人の作家であり科学者でもあるアイザック・アシモフは未来の予言を 1964 年に行っていた。彼によると、2014 年の地球は、核エネルギーが日常生活で使われ、車は自動運転になり、コンピューターは圧倒的な速さに到達するとの確に予測した。
4	地	戦	山口彊は広島で会社で任務のため働いていた。長崎の自宅に戻る帰路の途中で原爆を体験した。何とか命からがら長崎にたどり着いたが、そこでも原爆を体験し、二重被爆をした数少ない人物の戦時中の回想録。
5	多	日	人間は食べ物を楽しむために五感を利用する。特に、味覚には、料理を美味しいと感じる旨味が重要である。その旨味を昆布の出汁から抽出されることを日本人が発見し、和食に応用した。
6	地	国	地下水を子供たちが遊びながら汲み上げるメリーゴーランドについて。この遊び道具によって女性達は水汲みから解放され、子供達は学校に通うことが出来たという話。
7	地	環	バイオメティクスとは、自然の仕組みから学び、我々の日常生活の様々な面で活かされている。
8	多	日	オリンピックを東京に招致するためのプレゼンテーションの話。「おもてなし」という日本語を用いて、日本の良さや温かさを伝えた。
9	該当なし		白血病の男の子ボブシーの話。夢は消防士になることで、それを知った地元の消防士が、夢を叶えた話。(読み物：カ)

			テゴリー該当なし。)
10	地	人	人種差別の残る南アフリカであったが、ラグビ・ワールドカップで南アフリカは勝利した瞬間は、黒人と白人が共に喜び、国が一体化した。人種差別撤廃への第一歩となった。

LANDMARK				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ウォーレン・ヘースティングズ	2	初代総督	インド
2	ルロワ・ブラウン	Reading 1	記載なし	記載なし
3	ミスターブラウン		警察署長	記載なし
4	ナティーナット		強盗犯	記載なし
5	ミスターディロン		洋服店の店主	記載なし
6	ミスタージョーンズ		洋服店の店主	記載なし
7	山極寿一	4	人類学者	日本
8	山田周生	6	写真家	日本
9	鈴木ケンタ	7	ツアーガイド	日本
10	長井さん	8	記載なし	日本
11	大野修一	9	編集者	日本
12	飯島澄男	9	物理学者	日本
13	マーティン・ルーサー・キング・ジュニア	Reading 3	牧師	アメリカ
1	ミセス・ブラウン	Reading 1	元教師	記載なし
2	サキ	5	学生	日本
3	キャシー	5	学生	アメリカ
4	長井鞠子	8	通訳者	日本

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	比	日本人の多くは、血液型と性格に大きな関連性があると言える。一方で、世界では、血液型と性格は一致しない認識であり国によって、血液型の分布が全く異なる。
2	多	比	日本でも人気の食べ物であるカレーについて。カレーとインドの関係や、使われるスパイスがどのように世界で流通しているのかについて。
3	多	比	日本の学校の制服という制度について。世界の学校の制服を紹介し、学校の制服に賛成、反対の意見を学生に聞く。
4	地	環	ゴリラの専門家である京都大学の山極教授にインタビューを行う。ゴリラと人間は共通点がたくさんあることを紹介する。しかしながら、環境破壊が進むにつれて、ゴリラの住処が奪われている。
5	多	言	Eメールや携帯電話のメッセージで、省略したり、短縮したりと本来の文字の使い方とは異なった使用法について紹介。
6	地	環	山田周生は環境に優しい車で世界を一周した。目的は廃油だけでどこまで行けるのかという挑戦である。小さな努力で環境は保護されることを示した。
7	グ	世	世界遺産に登録された屋久島のエコツアーについて。屋久島の天候や縄文杉を保護するために人数制限を行っている話。
8	偉人		年間 200 本の通訳をこなす日本のトップ通訳者のひとりである長井鞠子の半生について。仕事に取り組む姿勢や、失敗談など、常に準備を怠らないことと、挑戦し続けることの重要性を語る。
9	グ	科	簡単に宇宙へ行くことができる「宇宙エレベーター」の構想について。ロケットで行くよりも環境に優しく、特別な訓練も必要としない。実現される日は来るのであろうか。
10	地	国	イラン・イラク戦争中の時、200 人を超える日本人がイランに取り残された。取り残された日本人を助けたのはトルコ政府だった。日本とトルコの友好の始まりについて。

付録 2：英語コミュニケーション教科書まとめ (2000 年度版)

以下の表は、教科書の登場人物を国籍と性別に分類した表であり、続いて教科書ごとの登場人物の分類と題材・内容の結果を示す。

2000 年 教科書	国籍				性別		
	日 本	米 国	他	合 計	男	女	合 計
Tomorrow	3	4	16	23	17	6	23
New Scope 1 Second edition	1	10	9	20	13	7	20
UNICORN ENGLISH COURSE1	1	1	35	37	22	15	37
APRICOT	5	3	10	15	8	7	15
CROWN	8	4	4	16	12	4	16
Orbit	3	3	15	21	15	6	21
Evergreen Reading	0	3	26	29	22	7	29
The New Age English	0	2	17	19	9	10	19
MILESTONE	1	3	19	22	12	10	22
ACORN English Course I	4	9	16	29	17	12	29
Genius	17	3	25	45	27	18	45

Tomorrow 1997 年発行				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	アキオ	1	学生	日本
2	マルコポーロ	1	旅行家	イタリア
3	コロンバス	1	船乗り	イタリア
4	ティラン	Reading 1	記載なし	記載なし
5	ハリー	Reading 1	学生	記載なし
6	ロッキー	Reading 1	鳥	記載なし
7	ライアン	6	記載なし	アメリカ
8	エルトン・ジョン	6	歌手	イギリス
9	マイケル・ジャクソン	6	歌手	アメリカ
10	キークレー	8	科学者	イタリア
11	マイケル・ジョーダン	9	プロバスケットボール選手	アメリカ
12	ジョン	10	学生	記載なし
13	森下広一	11	マラソン選手	日本
14	ファン・ヨンジョ	11	マラソン選手	韓国
15	ソン・ギジョン	11	マラソン選手	韓国
16	トーマス	Reading 2	記載なし	記載なし
17	ベクサー	Reading 2	教師	記載なし
1	ケイト	1	学生	記載なし
2	アリス	2	学生	記載なし
3	ジュンコ	2	学生	日本
4	ジル・スチュワート	6	生徒会長	アメリカ
5	キャメロン	9	記載なし	記載なし
6	ユミ	10	学生	記載なし

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	言	地球には 180 もの国があり、多数の言語が存在する。英語は、以前はアメリカやイギリスの生活習慣や文化を学ぶものであった。国際語としての英語について。
2	多	紹	米国の代表的な食べ物であるポップコーンの歴史と発祥について。起源は、南アメリカの先住民が洞窟の中で火を起こして食べていたほど、世界の最も古いスナックである。
3	多	言	アメリカ人の教師が、英会話(English conversation)という単語が、日本で多用されていることに驚きを隠せない理由と、コミュニケーションをする上で重要な姿勢について。
4	多	紹	日本人教師とアメリカ人教師の授業における態度の違いについて。アメリカ人教師は、机の上に足を置いて、チップスを食べながら授業を行う。アメリカでは当たり前の光景が、日本では異様に写る。文化の違いについて。
5	該当なし		家庭でペットとして人気の猫の生態について。元々は狩猟を行う猫がどのように人間に飼われるようになったか。 (読み物：カテゴリー該当なし。)
6	地	人	注射による薬害エイズに罹患した少年の話。様々な差別にも果敢に立ち向かう態度は、やがて周りの友人を変え、学校全体でエイズを知るプログラムが立ち上がった。
7	グ	世	インドの歴史と有名なタージマハールに伝わる神様の物語について。
8	グ	科	人間の睡眠には、2つの種類があり、浅い眠りと深い眠りを交互に繰り返す。人間は、1時間半から2時間の周期で夢を見る。
9	偉人		車椅子の少女がバスケットボールを観戦に行く。少女は、マイケルジョーダンのファンであり、バレンタインのチョコレートを渡した。その後、ジョーダンから少女にお礼

			のメッセージが届く。
10	地	環	使い捨てが当たり前となった現代において、リサイクルとリユーズの重要性について話し合う。
11	地	人	1936年のベルリンで開かれたオリンピックのマラソン競技で優勝した韓国人の話。当時、韓国は日本の占領下であったため、日の丸が掲げられた。

New Scope 1 Second edition 2000 年発行				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ビル	1,2	交換留学生	アメリカ
2	ジョー	4	ルーシーの弟	アメリカ
3	ジミー	4	カレンの兄	アメリカ
4	ジョアン	7	料理人	アメリカ
5	ジム	9	住人	記載なし
6	テッド	9	住人	記載なし
7	マイク	9	住人	記載なし
8	ハリー	9	住人	記載なし
9	コーネル・ジョンソン	13	記載なし	アメリカ
10	デイヴィッド・スコット	13	宇宙飛行士	アメリカ
11	ガリレオ・ガリレイ	16	物理学者	イタリア
12	ヤーコプ・ロッヘフェ	17	探検家	オランダ
1	ルーシー	4	学生	アメリカ
2	ホワイト夫人	4	ルーシーの母	アメリカ
3	カレン	4	学生	アメリカ
4	ヒロコ	4	記載なし	日本
5	ティナ	4	住人	記載なし
6	サラ	5	記載なし	イギリス
7	ジリアン	15	記載なし	記載なし

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	言	交換留学生のアメリカの留学生のビルが日本を歩いていると様々な人々が話しかけてくる。外国語を勉強する理由を聞いてみた。
2	多	紹	ビルのアメリカの生活と新しい日本の生活での相違点について。
3	多	紹	未だにイギリスの植民地である香港について。イギリスの文化と中国の文化が交わった街中について。
4	多	紹	アメリカでは、ダンス・パーティは日常生活の一部であり、高校でも開催される。公式のパーティでは正装が義務付けられる。
5	地	環	アフリカのライオンや象が、密猟者によって、百年で絶滅する恐れがある。彼らは生活のためにやむなく密猟を行う事実もある。
6	地	環	再利用が盛んなアメリカのガレージセールについて。引越し前に自宅のガレージで行うことが当たり前である。
7	多	紹	アメリカでは夕食で堂々とインスタントフードを使う。オープンに入れて手軽に楽しむ。
8	多	紹	アメリカ NY での犯罪の高さについて。ジョギング中に財布を取られたと思ったら、部屋に落ちていたというエピソード。
9	地	環	新しい高速道路や鉄道の建設についての是非について住民の間で議論が行われている。
10	該当なし		趣味は楽しみだけではなく、実益をもたらす。趣味が高じて、職業にした人の話。(読み物：カテゴリー該当なし)
11	多	言	食べ物を使った世界のことわざについて。日本ではゴマをするというお世辞を表す言葉が、アメリカではある果物である。その理由について。
12	多	紹	アメリカの不吉なジンクスや忌み嫌われる数について。
13	多	紹	アメリカでトマトが食べられたきっかけについて。

14	地	環	海洋汚染によって魚やエネルギー資源が汚染されている話。
15	多	紹	ニューヨーク観光について手紙を書く話。
16	グ	科	アメリカ人宇宙飛行士がアポロ 15 号で行った実験について。
17	グ	世	チリのイースター島のモアイ像について。その起源と諸説。
18	多	言	外国語は本当に学ぶべきか？グローバル化する世界における外国語学習の意味と意義について。

UNICORN ENGLISH COURSE 2000 年発行				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ドン	Reading1	記載なし	記載なし
2	アラン	Reading1	学生	記載なし
3	関野吉晴	5	医者	日本
4	Noel Moore	7	子供	記載なし
5	Charlie	8	学生	記載なし
6	テネサン	8	先生	記載なし
7	アルベルト	10	記載なし	記載なし
8	アンソニークイン	10	記載なし	記載なし
9	チャールトン	10	記載なし	記載なし
10	ロジャー	Reading2, 12	記載なし	記載なし
11	ジム	Reading3	指揮者	記載なし
12	クランツ	Reading3	記載なし	記載なし
13	フレッド	Reading3	記載なし	記載なし
14	ジャック	Reading3	記載なし	記載なし
1	ベアトリクス・ポター	7	童話作家	イギリス
2	ケイト	8	学生	記載なし
3	キャロル	8	記載なし	記載なし
4	ドリー	8	記載なし	記載なし
5	ミニー・フェイ	8	記載なし	記載なし
6	キャロライン	8	学生	記載なし
7	ジャネット・ランキン	9	政治家	アメリカ
8	ローラ	Reading 2	記載なし	記載なし

名前表記がなく登場した人物 (6名)

男	医者、芸術家、農家、コンピューター技術者、ある男 (全てレッスン1で登場)
女	作家、科学者、母親、乳児、仏教徒、ピアニスト (全てレッスン1で登場)

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	グ	科	インターネットは、他者のプライベートを邪魔することなく、気軽にメールを送ることが可能で、世界中の情報を瞬時に知ることができる。
2	地	国	ユニセフがアジアの貧しい地域やアフリカで行った寺子屋プロジェクトについて。子供たちを教育して自ら生きていく知恵や能力の身につける重要性について。
3	多	日	大豆の起源について。日本の食文化の重要な役割を占める味噌について。日本の各地でも味は異なる。発祥は中国から伝来した。
4	多	言	日本で使用されている外来語の起源は、世界各国から伝わったものであり、例えば、カステラや屏風は、オランダである。
5	偉人		探検家であり、関野吉晴の人生について。旅先で世話になる現地の住民に恩返しをするために日本で外科医になる。南アフリカからアフリカまで旅をした
6	偉人		スティーヴン・スピルバーグが映画の世界に入り、監督になるまでの半生を紹介
7	多	紹	イギリスのピーターラビットの人気の秘密と作者の人生について。 作者は、イギリスの湖水地方を守るために、本の収益の一部を環境問題のために寄付を行っている。
8	多	紹	アメリカの高校の文化祭で行われるミュージカルに向けて、学生は一生懸命練習する。ミュージカルで踊る「Hello,Dolly!」のダンスについて話し合う。
9	偉人		アメリカ合衆国の政治家であり、史上初の女性アメリカ下院議員。生涯を通じて平和主義を訴え、女性の公民権運動にも参加。
10	グ	科	インターネットが進化するにつれて、様々な弊害も登場する。例えば、プライバシーをどのように保護するか。またマスメディアが事件を報道することの功罪について。

11	グ	世	チリのイースター島モアイ像についての謎やその期限について。様々な諸説がある
12	地	環	レイチェル・カールソンの沈黙の春について。環境問題の悪化によって住処を奪われる昆虫や小動物について。便利な世界と引き換えに、人間は自分たちの住む環境を破壊していく。

APRICOT 1994 年				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ジャン	1	学生	アメリカ
2	ジム	2	学生	アメリカ
3	タロウ	3	学生	日本
4	スミス	3	学生	フィリピン
5	ケン	3	学生	日本
6	マルコ・ベルリーニ	3	料理人	イタリア
7	久里徳泰	6	探検家	日本
8	マンジロウ	Reading 1	漁師	日本
1	ユカ	1	学生	日本
2	ナオコ	2	学生	日本
3	モウリン・コノリー	5	テニス選手	アメリカ
4	フォルソン	5	テニス コーチ	アメリカ
5	フィオナ・ギャンプル	6	登山家	イギリス
6	ガルキガス	7	獣医	記載なし
7	オードリー・ヘップバーン	8	女優	イギリス

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	比	アメリカのホワイトハウスには美しい桜が咲き誇る。日本から80年前に寄贈されたものである。一方、日本の東京にはハナミズキの木がたくさん売られている。これはアメリカから桜の返礼に送られたものである。その後のそれぞれの国での桜とハナミズキの様子。
2	多	紹	アメリカではプロのあらゆるスポーツには、必ずマスコットが存在し、ファンの人気を博している。また、動物がモチーフとなった大学もあり、アメリカの文化における動物が象徴するイメージについて。
3	多	紹	ニュージーランドの果物の収穫祭が有名なクロムウェルの町について。果物の早食い競争や、果物の箱を最も高く積み上げる競争など、様々な競技が行われる。
4	多	紹	イタリア料理に欠かせないオリーブは、実は、国際連合や平和の象徴としても使われている。料理人のベルリーニがオリーブを日常的に食べる効能について話す。
5	偉人		幼い頃より、テニスの才能を発揮したモーリーン・コノリーの人生について。コーチとの出会いから別れ、度重なる故障によって、テニス人生を諦め、結婚して平和な家庭生活を送るが、病魔に冒され短い人生を終える。
6	偉人		探検家である久里徳泰の人生について
7	地	環	絶滅の危険があるとされるオラウータンの保護について。熱帯雨林を焼畑農業で奪われ、密猟者も後を絶たない。オラウータンを守るため、多くのボランティアの賛同者が集まった。
8	偉人		妖精と呼ばれたオードリー・ヘップバーンの生い立ちから、女優として数々の映画に登場し、ユニセフの活動に従事した晩年について。第一次世界大戦の経験から弱者への献身的な活動に

CROWN 2003 年				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ククリット	1	学生	タイ
2	松尾芭蕉	1	詩人	日本
3	星野道夫	2	写真家	日本
4	グーテン・バーグ	3	発明家	ドイツ
5	リチャード・フリードマン	3	心理学者	アメリカ
6	アキラ	5	学生	日本
7	ケンジ	6	学生	日本
8	ケン	7	学生	日本
9	スン・ミ	7	写真家	韓国
10	ジョー・オダネル	8	写真家	アメリカ
11	チャールズ・M・シュルツ	8	漫画家	アメリカ
12	コウジ	8	学生	日本
1	ユミ	1	学生	日本
2	プアンニ・ウィルヘルム	4	先生	アメリカ
3	ジェーン・グドール	6	動物行動学 者	イギリス
4	ファン・ティー・キム・フック	8	平和運動家	カナダ

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	言	タイの留学生がメールで日本人のユミに松尾芭蕉の俳句について質問をする。俳句の意味や季語など日本語独特の表現の説明の難しさにユミは頭を抱える。
2	偉人		写真家の星野道夫のアラスカでの撮影の様子や、16歳でアメリカをヒッチハイクで渡った時の回想記。
3	グ	科	20世紀の偉大な発明品について、レポーター役のリチャードが説明を行う。グーテンベルクの活版印刷術や、コンピューターやインターネットにも言及。最後は、印刷に必要な紙の原料となる木の伐採や科学技術の発展の鋼材について。
4	多	言	ハワイ語や日本のアイヌ語などの消滅の危機がある言語の維持や存続に関する活動や取り組みを紹介。古い伝統と新しい文化を融合させる重要性についても言及。
5	多	日	与那国の魅力について。日本の最も西に位置しており、美しい海や魚など自然が残る。海底には数々の遺跡が残っており、人々が住んでいた集落や文字盤なども見つかる。
6	グ	共	チンパンジーとの共生について。環境破壊によって、住処を奪われる野生のチンパンジーを守るボランティアグループと食物連鎖の重要性について。
7	地	戦	学生のケンと韓国人留学生のスン・ミが20世紀の写真展に訪れた。20世紀に起こった数々の事件を振り返る。特に、戦争のコーナーでは、ジョー・オダネルの写真が紹介される。
8	偉人		スヌーピーの作者チャールズ・M・シュルツの半生について。絵の才能に溢れていた幼少期の話や、小学校で、仲間外れにされた経験から、チャーリー・ブラウンの誕生を思いつき、実際に飼っていた犬のスパイクは、スヌーピーの原型である。2000年にシュルツが亡くなった

Orbit 1998 年				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	スミス先生	2	先生	カナダ
2	ジョー	3	金融会社 勤務	記載なし
3	フレッド	3	金融会社 勤務	記載なし
4	内田 弘慈	7	僧侶	日本
5	エノック	8	記載なし	記載なし
6	フィリップ	8	記載なし	記載なし
7	トーマス・エジソン	9	発明家	記載なし
8	トーマス	10	記載なし	イギリス
9	アンソニー	10	記載なし	イギリス
10	サム	11	ボクサー	記載なし
11	ティノ	11	記載なし	記載なし
12	ボブズ	11	記載なし	記載なし
13	ジム・ラヴェル	12	宇宙飛行士	アメリカ
14	ジャック・スワイガート	12	宇宙飛行士	アメリカ
15	フレッド・ヒューズ	12	宇宙飛行士	アメリカ
1	エミコ	2	学生	日本
2	スミス夫人	3	記載なし	記載なし
3	荒岡るり子	6	記載なし	日本
4	アニー	8	記載なし	記載なし
5	マリー	10	トーマスの 妻	イギリス
6	アン	11	記載なし	記載なし

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	該当なし		親子で釣りをした話 (読み物：カテゴリー該当なし。)
2	多	言	言葉の語源の話。クロワッサンはなぜ、三日月の形をしているのか、なぜテニスのゼロをラブというのか。言葉の誕生について。
3	該当なし		ジョーとフレッドは、スミス夫人の家にある重いカップボードを運ぶ。(読み物：カテゴリー該当なし。)
4	該当なし		学校から車で帰宅途中に、交通事故を起こした少年の後悔の話。 (読み物：カテゴリー該当なし。)
5	地	環	アラスカの海に生息するラッコは、毛皮の代わりにたくさんの脂肪を蓄えている。それを狙って密猟者が後を絶たない。1989年には、オイルタンカーの事故で多数のラッコが命を落とした。地球環境を守ることの重要性について。
6	地	戦	荒岡るり子の実際の戦争体験時の様子について。原爆で、家が倒壊し、3歳の弟が被曝し、顔と手がパンパンに腫れ亡くなった様子や、祖母がどこを探しても見つからなかったことについて。
7	地	国	カンボジアのアンコールワットで井戸を掘る僧侶の話。汚染された水を飲んで下痢になり、命を落とす子供の姿を見て、井戸を掘ることを決意した。井戸の掘り方を住民に教える。ボランティアと感じなくなった瞬間が、本当のボランティアであると話す。
8	該当なし		エノック・フィリップ・アニーの3人の幼なじみの成長した時の話。(読み物：カテゴリー該当なし。)
9	グ	科	かの有名な発明家であるエジソンの最初の白熱電球は竹を使って作った。橋や家や食料にまで、様々な用途に使用されている竹について。
10	地	戦	17世紀のイギリスの市民戦争の話。スパイ容疑をかけられたトーマスを庇うべく、兵隊に居場所を聞かれたアンソニーは、夢の中にいると言った。

11	該当なし		電話が普及していない時代の列車の旅の話。ボクサーであるサムとアニーの話。(読電話が普及していない時代の列車の旅 (読み物：カテゴリー該当なし。))
12	グ	科	実際のアポロ 13 号で起こった爆発事故の話、残り少なくなった酸素と電力が、33 万キロ離れた地球に帰還するまで緊迫した様子について。

Ever Green Reading 2000 年				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ハンス	2	学生	オランダ
2	ポール	2・3	学生	オランダ
3	バークレイ	3	民俗学者	アメリカ
4	ピート	3	記載なし	記載なし
5	ウィルアード	3	運転手	記載なし
6	エディ	4	記載なし	記載なし
7	マシュー	4	学生	記載なし
8	ジョー	7	学生	記載なし
9	ヴィッチーダ	8	ビジネスマン	記載なし
10	ローゼン	10	画家	記載なし
11	ローゼンストック	10	歌手	記載なし
12	マジスター	10	記載なし	記載なし
13	ランキニー	11	先生	記載なし
14	フレッド・ポール	11	記載なし	アメリカ
15	メイナード	Reading 2	記載なし	アメリカ
16	マーク・キャドウエル	Reading 2	記載なし	記載なし
17	キース	Reading 3	記載なし	記載なし
18	ビリー・ウェーバー	Reading 3	記載なし	記載なし
19	クリストファー	12	記載なし	記載なし
20	グレゴリー	12	記載なし	記載なし
21	ウェーバー	13	記載なし	記載なし
1	アン	1	記載なし	記載なし
2	サリー	3	記載なし	記載なし
3	バドマー夫人	3	運転手	記載なし
4	ディエラ	7	記載なし	記載なし
5	クレメンテッィナ	11	歌手	記載なし
6	キャドウエル	11	学生	記載なし
7	イダ・メイ	12	記載なし	記載なし

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	紹介	アメリカのNYは豪華な劇場や老舗の有名なホテルが立ち並ぶ世界一の都会である。一方で、NYの路地裏に立ち並ぶアパートに住む人々の日常生活も紹介される。
2	地	環	車を所有することの功罪について。車は便利で快適である一方で、道路の渋滞、維持費の問題や排気ガスの問題もある。
3	多	比	縁起を担ぐことの意味について。ほとんどが迷信とされているラッキーナンバーや、ジンクスについて。欧米と日本ではその意味や行動が全く異なる。迷信と信じながらも日々の細かい問題を抱える我々はついつい行ってしまう。
4	該当なし		野球をする少年と見守る母親の話。ある日、スターティングメンバーにマシューが選ばれた時のエピソード。 (読み物：カテゴリー該当なし。)
5	多	紹	アメリカでのチップの渡し方について。チップの習慣がある国では、貰う額が少ないと逆に怒られる場面も。筆者のアメリカでのチップにまつわる体験記。
6	地	環	ゴミを減らす習慣について。ゴミ問題が深刻な環境問題の悪化に影響を及ぼしている。アメリカではリサイクルを行うことが前提であり、雨や風にさらされると土に還る皿なども売っている。
7	該当なし		画家を目指すジョーと、歌手を夢見るディエラが結婚し、貧しいながらも成功の希望を抱いて、NYで幸せな生活を送る話。 (読み物：カテゴリー該当なし。)
8	多	比	祝い事や行事で必ず食べる食事は世界各国によって異なる。アメリカの代表的な食べ物の紹介。
9	グ	共	ペットは心のストレスを緩和し、精神を安定させる。介助犬やセラピーアニマルの紹介。
10	該当なし		長距離バスに乗車した男の話（米国）
11	グ	共	日本人女性の社会進出に関して。世界で活躍する女性と

			これからの女性像のあるべき姿について筆者の意見。
12	該当なし		若い青年が下宿している宿の女主人との会話 (読み物：カテゴリー該当なし。)
13	グ	科	日常の何気ない動作には、科学的根拠に裏打ちされた出来事が多数ある。猫が雨の前に髭を触るなど。

The new age English 1995 年				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	デイヴィッド	2	高校生	アメリカ
2	ボブ	5	大学生	記載なし
3	ターナー	4	記載なし	記載なし
4	エリオット	6	記載なし	記載なし
5	E.T.	6	記載なし	記載なし
6	ポール	7	記載なし	記載なし
7	ジークムント・フロイト	9	精神科医	オーストリア
8	ヨーゼフ・ブロイアー	9	内科医	オーストリア
9	アレキサンダー・シャウス	10	心理学者	アメリカ
1	キャサリン	3	主婦	記載なし
2	アリス	4	記載なし	記載なし
3	グラミー	4	記載なし	記載なし
4	イブ	4	記載なし	記載なし
5	ターナー夫人	4	記載なし	記載なし
6	サラ	4	記載なし	記載なし
7	ヴァイオレット	5	記載なし	記載なし
8	マリー	7	不動産業	記載なし
9	マーガレット・ジョーンズ	7	バレリーナ	記載なし
10	ホルト夫人	11	記載なし	記載なし

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	言	英語を話すことで、世界中の人々と意思疎通を行い、会話をすることの重要性について。
2	多	紹	アメリカ人の学生が日本にホームステイする前にホストファミリー向けに書いた手紙。アメリカでの生活の様子や日本の生活への質問など。
3	多	紹	子供が喜ぶとされている英語で書かれた面白い話の紹介。
4	該当なし		固定電話で延々と話す女性の話 (読み物：カテゴリー該当なし。)
5	該当なし		アメリカ人のカップルの話 (読み物：カテゴリー該当なし。)
6	グ	科	SF 漫画が、近い将来、実際に起こる可能性を示唆した話。科学技術の進歩についても言及。
7	該当なし		泣くことの心理的意味 (読み物：カテゴリー該当なし。)
8	該当なし		動物が生まれた瞬間から備わっている能力について。 (読み物：カテゴリー該当なし。)
9	グ	科	人間の睡眠には、2種類あると言われている。レム睡眠とノン・レム睡眠と呼ばれている。良い夢を見たければ、眠る前にポジティブなことを考えて、眠りにつく必要がある。
10	該当なし		人間の色へのイメージや、言葉にも用いられる色の使い方について。(読み物：カ
11	地	環	アメリカのリサイクル社会の現実と、国としての環境問題への取り組みについて。様々な社会的立場の人々が各自の意見を言い合う。
12	地	環	自動車を所有することの是非について。便利ではあるが環境問題の悪化にも繋がる。友人なのか敵なのかと問い、地球に優しい車の開発の可能性について
13	多	比	場所が変われば習慣も変わる。実際の体験談での誤解について。

14	多	日	日本語の漢字が外国人にとって難しい理由と、象形文字や漢字の旧字体がどのように今の常用漢字に変化したか。
15	該当なし		スポーツから学ぶこととは何か。強い精神力と体や、チームメイトと共に動くことで協調性や他者を思いやる心が養われる。日本では、基礎練習や基本が重要視される。

MILESTONE 2002 年				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ビル	1,6,9	学生	記載なし
2	ヨシ	2,6,9	学生	日本
3	スティーブ	2,10	学生	記載なし
4	ジム・アボット	3	野球選手	アメリカ
5	クロード・モネ	8	画家	フランス
6	アイスマンの発見者	9	記載なし	ドイツ
7	マーチン・ルーサー・キング Jr.	10	牧師	アメリカ
1	ミホ	1,3,7,8,10	学生	日本
2	マリア	2,7,9	学生	記載なし
3	佐々木貞子	2	日本	日本
4	ローザ・パークス	10	公民権運動 活動家	アメリカ

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	言	世界の 30 の国の若者が一同に東京に集まった。そこでは、英語で地球の問題について話す。英語が共通語として使用されている事実と、グローバル化について
2	多	比	他者とコミュニケーションを行う時に、相槌で頭を動かす動作は、国によっては相手に NO と伝わるサインになる。日本では、アイコンタクトを避けることが良いマナーとされている。各国の比較。
3	偉人		障害を持ったプロ野球選手であるジム・アボットのプロ野球選手になるまでの経緯と活躍の様子。
4	多	紹	唐辛子の由来と起源について。中南米が発祥の地とされており、カプサイシンと言う成分が体内の熱量を上げ、汗をかくとされている。
5	多	紹	広島平和記念公園にある原爆の被曝者である佐々木禎子について。折り鶴を千羽作れば元気になると信じていたが、叶わぬ夢となってしまった。
6	グ	科	地震予知について。中国の海城大地震の時に、豚が柵を登ろうとしたり、冬なのに蛇が地上に現れたり、様々な動物たちの奇妙な行動が発見された。災害時の危機管理の重要性について。
7	該当なし		電報が人々の交信の手段として日常的に使用されていた時代の若い男女の話。(読み物：カテゴリー該当なし。)
8	多	比	印象派とされるモネの美術や浮世絵について二人の高校生が語り合う話。
9	グ	科	人間の祖先とされる 5300 年前のミイラが見つかった話について。アイスマンと呼ばれ、当時の狩猟や採集に必要な道具も見つかり、今もなお人類の歴史を解明するためにイタリアの博物館で眠っている。
10	地	人	アメリカの公民権運動について。1954 年の学校における人種差別廃止の歴史や、バスの運転手の命令に背いて、白人に席を譲らなかったローザ・パークスが逮捕

			された事件や、キング牧師の有名な演説について。
11	地	環	限りあるエネルギー資源について。化石燃料に依存する先進国の二酸化炭素排出量や太陽エネルギーの可能性について。

Acorn 2000 年 (男性登場人物)				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	ムスタファ	1	学生	メキシコ
2	ドナルド	1	学生	オーストラリア
3	ケヴィン	1	学生	アメリカ
4	ケン	3	記載なし	記載なし
5	ジョン・ボン・ジョビ	5	ミュージシャン	アメリカ
6	フランク	6	学生	記載なし
7	ラモス瑠偉	6	サッカー選手	ブラジル
8	マイケル・ジャクソン	9	ミュージシャン	アメリカ
9	ジョン・レノン	9	ミュージシャン	イギリス
10	ポール・マッカートニー	9	ミュージシャン	イギリス
11	リンゴ・スター	9	ミュージシャン	イギリス
12	ジョージ・ハリソン	9	ミュージシャン	イギリス
13	ケン	9	学生	日本
14	楠 敏雄	11	医者	日本
15	アーサー・コナン・ドイル	Reading1	小説家	イギリス
16	ケヴィン・マクカリストター	Reading2	記載なし	アメリカ
17	フランク	Reading2	記載なし	アメリカ

Acorn 2000 年 (女性登場人物)				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	アレクサ	1	学生	フランス orbit
2	マナカ	1	学生	スリランカ
3	ジュエナ	1	学生	ブラジル
4	ホワイト先生	1	先生	記載なし
5	スミス先生	2	先生	記載なし
6	スージー	3・6・10	記載なし	アメリカ
7	ユキ	2・6	学生	日本
8	マドンナ	9	歌手	アメリカ
9	レスリー	Reading2	記載なし	記載なし

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	言	英語を学ぶ意味について。世界各国の生徒たちが自己紹介を行う。
2	多	紹	オーストラリア人の先生に年齢を聞いた生徒と先生のやりとりについて。先生は、車を運転できる年齢ですと答え、他の生徒を笑わせる。
3	多	紹	ハンバーガーはアメリカの食べ物というイメージが強いが、実は、原産国は世界各地からである。そのハンバーガーの名前は、ハンブルグというドイツの街に由来する。
4	地	戦	広島平和公園の中にある小さな石碑に刻まれる峠三吉の詩について。
5	該当なし		色のイメージと視覚効果について。(読み物：カテゴリー該当なし。)
6	偉人		ラモス瑠偉のサッカー人生について。ブラジルでサッカー選手になる夢が叶わなかったので来日し、プロ入りする。ドーハの悲劇と呼ばれる国際試合について。
7	多	比	洋食と和食の比較。健康的と言われる和食について。出汁や調理法の紹介や、欧米人と日本人の1日の平均のカロリー差について。
8	多	紹	日本の香川県には、どんぐり銀行という名前の銀行がある。金銭のやり取りではなく、どんぐりを産出する樹木を増やす目的のため、どんぐりを集めて、翌年苗木をもらう緑化運動の活動について。
9	偉人		イギリスのロックミュージシャンであるビートルズの世界的な人気について。日本での来日公演でのファンレターの中には、11メートルにも及ぶものがあった。
10	多	紹	食事に使われる道具の歴史について。指、フォーク、箸と主に3つのタイプに分類できる。
11	グ	共	大阪の嶺塚中学校に通う盲目の楠敏夫のために、友人たちは街のファミリーレストランのメニューに点字も加えるように各店のオーナーに頼んだ話。

12	グ	共	家事や育児は女性の仕事という考え方について。世界の各都市と日本の意識の比較を行う。ニューヨークやパリと比べると東京の男性は、ほとんど家事を手伝わないという結果が示されている。
----	---	---	---

Genius 1995 年				
数	名前	登場箇所	職業	国籍
1	佐藤先生	1,7,11	先生	日本
2	ジョアン	1	レポーター	記載なし
3	ジュン	3,4,5,13,15	生徒	日本
4	手塚治虫	3	漫画家	日本
5	ジェローム・デヴィッド・カーン	4	作曲家	アメリカ
6	テリー・ジャクソン	4	ゲスト	アメリカ
7	リック	5,8,10,11,13,14	交換留学生	記載なし
8	トール・ヘイエルダール	5	探検家	ノルウェー
9	エーリッヒ・フォン・デニケン	5	作家	スイス
10	ピーター・ラビット	9	擬人化 (うさぎ)	イギリス
11	ベンジャミン	9	擬人化 (うさぎ)	イギリス
12	ノエル	9	家庭教師の 息子	イギリス
13	アゴニー	10	カウンセラー	イギリス
14	チャールズ・ダーウィン	11	学者	イギリス
15	クリス・ボニントン	16	登山家	イギリス
16	ドン・ウィランス	16	登山家	イギリス
1	スパノス先生	2,3,4,7,9,10,15	教師	オーストラリア
2	ヘザー・ゴールド	1	レポーター	記載なし
3	ルミ	7	子供	日本
4	カヨ	8,9	生徒	日本
5	ビアトリクス・ポター	9	作家	イギリス
6	アン・サリバン	13	家庭教師	アメリカ

7	ヘレン・ケラー	13	教育家	アメリカ
---	---------	----	-----	------

	カテゴリー		本文の内容
	大	小	
1	多	比	世界の春について（英・日・カナダ・米）でそれぞれの春の季節の楽しみ方や咲く花の違いについて紹介し合う。
2	多	紹	オーストラリアでは、日本と季節が逆になり、真夏のクリスマスをビーチで祝う姿が有名である。オーストラリアの人々の暮らし方や食べ物の紹介
3	グ	共	手塚治虫が鉄腕アトムで描いたように、21世紀の世界はどのような世界だろうか。宇宙から眺めた地球について、環境破壊について警鐘を鳴らす。
4	多	紹	「Old Man River」(Jerome Kern 作曲のアメリカのフォークソング) について、アメリカの古き良き時代の紹介。
5	グ	世	チリのイースター島にあるモアイ像について。様々な諸説や期限などの説明やどのように運んだのかについて
6	地	戦	広島の親戚を尋ねた時に、原爆が投下され幼い少女（ルミ）の命が奪われた話
7	多	言	日本語と英語の言い方の違い
8	多	紹	ピーターラビットの作者の話とナショナルトラストというイギリスの環境を保護する団体の話
9	該当なし		高校生が、架空の人物宛に自らの悩みを打ち明ける話。 (読み物：カテゴリー該当なし。)
10	グ	共	自然界に存在する動植物の形状は、主に5種類に分別できる。ヒトデや葉っぱなどの星形、羽や蜂の巣などの直列、レモンや松ぼっくりなどの卵型、貝殻やリンゴなどの円形、魚や翼などの動的な形。それぞれの形と効率的な動き方について。
11	該当なし		宮沢賢治の注文の多い料理店の英訳版 (読み物：カテゴリー該当なし。)
12	該当なし		リックとジュンが、もし目も見えなくなり、耳も聞こえなくなったらどうするか？ということについて語り合う。仮定法過去完了を使った表現 (読み物：カテゴリー該当なし。)

13	該当なし	長距離バスで旅行していたアメリカ人の青年の話。席が近くの人々と他愛もない話をする。(読み物：カテゴリー該当なし。)
----	------	---

参考文献（和文）

- 飯塚和子・青木幸子・岡村貴子・大竹美登利 (2001).「高等学校家庭科教科書のジェンダーバイアスに関する分析（第1報）—家庭経営領域について—」日本家庭科教育学会『日本家庭科教育学会誌』44(2),pp.127-136.
- 石川慎一郎 (2012).『ベーシックコーパス言語学—A basic guide to corpus linguistics—』ひつじ書房.
- 石川慎一郎 (2017).『ベーシック応用言語学—L2 の習得・処理・学習・教授・評価—』ひつじ書房.
- 石川尚子・大竹美登里・堀内かおる・由比ヨシ子 (1999).「小学校家庭科教科書のジェンダー分析」『日本家庭科教育学会関東地区会誌』(2),pp.98-105
- 石原千秋(2005).『国語教科書の思想』筑摩書房
- 伊藤央子・石川尚子・林隆子 (1993).『新しい家庭科教育—男女共修の新時代を迎えて—』教育図書.
- 伊藤良徳・大脇雅子・紙子達子・吉岡睦子(1991).『教科書の中の 男女差別』明石書店.
- 魚住忠久 (2000).『共生の時代を拓く国際理解教育—地球的視野からの展開—』黎明書房
- 氏原陽子 (2008).「教科書の隠れたカリキュラムによって伝達されるジェンダー・メッセージの変遷—中学校社会科・公民教科書及び政治・経済・社会教科書の分析—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』6(4),pp.47-60.
- 内田健三 (1987).『臨教審の軌跡—教育改革 1100 日—』第一法規出版
- 江利川春雄 (2008).『日本人は英語をどう学んできたか—英語教育の社会文化史—』研究社
- 江利川春雄 (2015).『英語教科書は「戦争」をどう教えてきたか』研究社
- 江利川春雄 (2018).『日本の外国語教育政策史』ひつじ書房
- 大津和子(1994).「社会科におけるグローバル教育の4つのアプローチ」日本教育学会『教育学研究』61(3), pp.279-286
- 大津和子(1997).『グローバルな総合学習の教材開発（社会科教育全書36）』明治図書出版
- 小串雅則 (2011).『英語検定教科書—制度、教材、そして活用—』三省堂.
- 片岡徳雄 編著 (1987).『教科書の社会学的研究』福村出版
- 金田向子(2005).「日本の中学校英語教科書にみる異文化理解—題材の観点からの教科書分析—」龍谷大学英語英米文学会『英語英米文学研究』(33), pp.129-142,
- 唐澤富太郎 (1961).『教科書と国際理解(教科書から見た世界の教育 第3巻)』中央公論社

- 河野銀子・藤田由美子 編著 (2018).『教育社会とジェンダー』学文社.
- 菅野琴・西村幹子・長岡千寿子 編著 (2012).『ジェンダーと国際教育開発—課題と挑戦—』福村出版.
- 北村友人 (2015).『国際教育開発の研究射程—持続可能な社会のための比較教育学の最前線—』東信堂.
- 木村涼子 (1999).『学校文化とジェンダー』勁草書房.
- 教育課程審議会 (1987).『幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について (答申)』文部省
- 教科書レポート編集委員会 (2015).『教科書レポート No.58 2015』日本出版労働組合連合会.
- 教科書レポート編集委員会 (2016).『教科書レポート No.59 2016』日本出版労働組合連合会.
- 久保田竜子 (奥田朋世監修) (2015a).『グローバル化社会と言語教育—クリティカルな視点から— (久保田竜子著作選 1)』くろしお出版
- 久保田竜子 (奥田朋世監修) (2015b).『英語教育と文化・人種・ジェンダー (久保田竜子著作選 2)』くろしお出版
- 久保田竜子 (2018).『英語教育幻想』筑摩書房
- グラッドル、デイヴィッド (山岸勝榮訳) (1999).『英語の未来』研究社出版.
- 五島淳子・関口智子(2010).『未来をつくる教育 ESD 持続可能な多文化社会をめざして』明石書店
- 小林亮 (2014).『ユネスコスクール—地球市民教育の理念と実践—』明石書店
- 佐藤群衛 (2001).『国際理解教育—多文化共生社会の学校づくり—』明石書店
- 佐藤群衛 (2007).「国際理解教育の現状と課題 : 教育実践の新たな視点を求めて」日本教育学会『教育学研究』74(2),pp. 215-225.
- 佐藤学・木曾功・多田孝志・諏訪哲郎 編著 (2015).『持続可能性の教育—新たなビジョンへ—』教育出版
- 末澤奈津子(2018).「高校英語教科書におけるジェンダー分析—コーパスを用いたコミュニケーション英語 I の比較研究—」『日本ジェンダー研究』21, pp.95-106
- 鈴木佳苗・坂元章・森津太子・坂元桂・高比良 美詠子・足立にれか・勝谷紀子・小林久美子・櫃淵めぐみ・木村文香 (2000).「国際理解測定尺度(IUS2000)の作成および信頼性・妥当性の検討」日本教育工学会『日本教育工学雑誌』23(4), pp.213-226,
- 田中治彦・三宅隆史・湯本浩之 編著 (2016).『SDGs と開発教育—持続可能な開発目標のための学び—』学文社

- 田中和江 (2015).「高等学校家庭科教科書のジェンダー視点からの分析」『女子栄養大学栄養学部教育学研究室紀要』 12,pp.130-150
- 鳥飼久美子(2011).『国際共通語としての英語』 講談社
- 永井滋郎 (1989).『国際理解教育—地球的な協力のために—』 第一学習社
- 長尾史英 (2009).「中学校英語教科書におけるジェンダー分析」『飯田女子短期大学紀要』 26, pp.37-46.
- 中村桃子 (1995).『ことばとフェミニズム』 勁草書房.
- 日本環境教育学会・日本国際理解教育学会・日本社会教育学会・日本学校教育学会・グローバル コンパクト ネットワーク ジャパン 編著(2019)『事典 持続可能な社会と教育』 教育出版
- 日本国際理解教育学会 編著 (2010).『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ—』 明石書店
- 日本国際理解教育学会 編著 (2015).日本国際理解教育学会編『国際理解教育ハンドブック—グローバル・シティズンシップを育む—(日本国際理解教育学会創立 25 周年記念出版)』 明石書店
- 橋本紀子 (2015).「中学校社会科公民的分野教科書のジェンダー視点からの分析」『女子栄養大学栄養学部教育学研究室紀要,12,pp.114- 134
- 長谷川淳一(2016).「中学校英語教科書における題材の取扱い」『桜美林論考 言語文化研究』 7, pp.29-43
- バナージ, M.R.・グリーンワルド, A.G. (北村英哉・小林知博訳) (2015).『心の中のブラインド・スポット—善良な人々に潜む非意識のバイアス—』 北大路書房
- 原田種雄・赤堀侃司 編著 (1992).『国際理解教育のキーワード—基本概念・用語の解説=240 ポイント—』 有斐閣
- 樋口耕一 (2014).『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』 ナカニシヤ出版.
- 堀口俊一 編著 (1994) .『外国語における国際理解教育』 エムティ出版
- 馬淵仁(2007).「英語教育に見られる文化の捉え方」『大阪女学院大学紀要』 (4),pp.1-12
- 馬淵仁(2010).『クリティーク 多文化、異文化—文化の捉え方を超克する—』 東信堂
- 馬淵仁 編著(2011).『「多文化共生」は可能か—教育における挑戦—』 勁草書房
- 臨時教育審議会 (1988).『教育改革に関する答申—臨時教育審議会第一次～第四次(最終) 答申』 大蔵省印刷局
- 和田稔 (1991).『国際交流の狭間で—英語教育と異文化理解—』 研究社出版

参考文献（欧文）

- Anthony, L. (2012). AntConc. Retrieved from <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/software.html>
- Apple, M. W. (1979). *Ideology and Curriculum*. London: Routledge. pp.63–64
- Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2013). *Blindspot: Hidden Biases of Good People*. Delacorte Press.
- Bertrand, M., & Mullainathan, S. (2004). Are Emily and Greg more employable than Lakisha and Jamal? A field experiment on labor market discrimination. *American Economic Review*, 94(4), pp.991-1013.
- Bolton, K. (2008). English in Asia, Asian Englishes, and the issues of proficiency. *English Today* 24(2), pp.3-12.
- Byram, M., Nichols, A., & Stevens, D. (2001). *Developing Intercultural Competence in Practice*. Multilingual Matters.
- Byram, M. (2008). *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections*. Multilingual Matters.
- Carroll, D., & Kowitz, J. (1994). Using concordancing techniques to study gender stereotyping in ELT textbooks. In J. Sunderland (Ed.), *Exploring Gender: Questions and Implications for English language Education* pp. 73–82. New York, NY: Prentice Hall.
- Clarricoates, K. (1978). ‘Dinosaurs in the classroom’—A re-examination of some aspects of the ‘hidden curriculum in primary schools. *Women's Studies International Quarterly*, 1(4), pp.353-364.
- Connell, R. & Pearse, R. (2015). *Gender : in world perspective*. Cambridge, UK: Polity Press.
- Davies, A. (2003). *The Native Speaker: Myth and Reality*. Clevedon Buffalo: Multilingual Matters.
- Deem, R. (1978). *Women and Schooling*, Routledge and Kegan Paul.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56(1), pp.5-18.
- Dovidio, J. F., Hewstone, M., Glick, P., & Esses, V. M. (2010). *The SAGE Handbook of Prejudice, Stereotyping and Discrimination*. SAGE
- Elgar, A. G. (2004). Science textbooks for lower secondary schools in Brunei: Issues of gender equity. *International Journal of Science Education*, 26(7), pp.875-894.
- Faez, F. (2011). Reconceptualizing the native/nonnative speaker dichotomy. *Journal of Language, Identity & Education*, 10(4), pp.231-249.

- Gooden, A.M., & Gooden, M.A. (2001). Gender Representation in Notable Children's Picture Books: 1995–1999. *Sex Roles* 45, pp. 89–101.
- Graci, J. P. (1989). Are foreign language textbooks sexist? An exploration of modes of evaluation. *Foreign Language Annals*, 22(5), pp.477–486.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6), pp.1464–1480.
- Hartman, P. L., & Judd, E. L. (1978). Sexism and TESOL materials. *TESOL Quarterly*, 12(4), pp.383–393.
- Holliday, A. (2006). Native-speakerism, *ELT Journal*, 60(4) ,pp.385-387.
- Huang, M., Yoneyama, S., Shim, D., & Tsai, C. (2014). Paternalistic leadership in four east Asian societies: Generalizability and cultural differences of the triad model. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 45(1), pp.82–90.
- Jackson, P. W. (1990). *Life in Classrooms*. Teachers College Press.
- Jasmani, M. F. I. B. M., Mohd, Y., Mohamad, S., Hamid, B. A., Keong, Y. C., Othman, Z., & Jaludin, A. (2011). Verbs and gender: The hidden agenda of a multicultural society [Special issue]. *Southeast Asian Journal of English Language Studies*, 17, pp.61–73.
- Jassey, I. A. (1997). *Gender Representation in Japanese Elementary School Textbooks* (unpublished Ed.D. dissertation). Columbia University.
- Jenkins, J., Baker, W., & Dewey, M. (2017). *The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca*. Routledge.
- Kachru, B. (1992). *The OtherTongue : English Across Cultures*. Urbana: University of Illinois Press.
- Kachru, B., Kachru, Y., & Nelson, C. (2009). *The Handbook of World Englishes*. John Wiley & Sons.
- Kubota, R., & Lin, A. M. (2009). *Race, Culture, and Identities in Second Language Education: Exploring Critically Engaged Practice*. Routledge.
- Lane, K. A., Banaji, M. R., Nosek, B. A., & Greenwald, A. G. (2007). Understanding and using the implicit association Test: IV: What We Know (So Far) about the Method. In B. Wittenbrink & N. Schwarz (Eds.), *Implicit measures of attitudes*, The Guilford Press, pp. 59–102.
- Lee, J. F. K., & Collins, P. (2008). Gender voices in Hong Kong English textbooks – Some past and current practices. *Sex Roles*, 59(1), pp.127–137.
- Lee, J. F. K., & Collins, P. (2009). Australian English-language textbooks: The gender

- issues. *Gender and Education*, 21(4), pp.353–370.
- Lee, J. F. K., & Collins, P. (2010). Construction of gender: A comparison of Australian and Hong Kong English language textbooks. *Journal of Gender Studies*, 19(2), pp.121–137.
- Liddicoat, A.J. (2004). Intercultural language teaching: Principles for practice *New Zealand Language Teacher* 30, pp.17-24.
- Mbo, C. (2012). The name game: Using insults to illustrate the social construction of gender. *College Teaching*, 60(1), pp. 25–30.
- Matsuda, A. (2002). Representation of users and uses of English in beginning Japanese EFL textbooks. *JALT Journal*, 24(2), pp.182–200.
- Matsuno, S. (2002). Sexism in Japanese radio business English program. *JALT Journal*, 24(1), pp.83–97.
- McConnell, A. R., & Leibold, J. M. (2001). Relations among the implicit association test, discriminatory behavior, and explicit measures of racial attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 37(5), pp.435-442.
- Mustapha, A. S. (2012). Dynamics of gender representations in learning materials, GÉNEROS. *Multidisciplinary Journal of Gender Studies*, 1(3), pp.243–270.
- Nosek, B. A., Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2002). Math = male, me = female, therefore math ≠ me. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83(1), pp.44–59.
- Phillipson, R. (1992). *Linguistic Imperialism*. Oxford University Press
- Porreca, K. L. (1984). Sexism in current ESL textbooks. *TESOL Quarterly*, 18(4), pp.705–724.
- Rubin, D. L. (1992). Nonlanguage factors affecting undergraduates' judgments of nonnative English-speaking teaching assistants. *Research in Higher Education*, 33(4), pp.511-531.
- Sadker, M., & Sadker, D. (1975). Microteaching for affective skills. *The Elementary School Journal*, 76(2), pp.91-99.
- Sakita, T. I. (1995). Sexism in Japanese English education: A survey of EFL texts. *Women and Language*, 18(2), pp.5–12.
- Schön, D. A. (2017). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Routledge
- Seidlhofer, B. (2013). *Understanding English as a Lingua Franca - Oxford Applied Linguistics*. Oxford University Press.
- Skutnabb-Kangas, T., & Phillipson, R. (1994). *Linguistic Human Rights:*

Overcoming Linguistic Discrimination. Walter de Gruyter.

Smith, L. E. (2003). English language, role in international communications. *Encyclopedia of International Media and Communications*, pp.523-528.

Spencer, S. J., Steele, C. M., & Quinn, D. M. (1999). Stereotype threat and women's math performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 35(1), pp.4-28.

Suezawa, N. (2018). Gender disparity in the East Asia EFL textbook. In M. Suwarsih, H. A. Fuad, W. A. Renandya, C. Coombe, & B. Yazid (Eds.), *ELT in Asia in the Digital Era : Global Citizenship and Identity : Proceedings of the 15th Asia TEFL and 64th TEFLIN International Conference on English Language Teaching, July, Yogyakarta, Indonesia*, London, UK: Routledge. pp.229-234,

Táboas-Pais, M. I., & Rey-Cao, A. (2012). Disability in physical education textbooks: An analysis of image content. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 29(4), pp.310-328.

Timmis, I. (2002). Native-speaker norms and international English: A classroom view. *ELT Journal*, 56(3), 240-249.

UNESCO (2009). *Promoting Gender Equality through Textbooks*, France

UNESCO (2006). *Framework for the UNDESD International Implementation Scheme*. Paris: UNESCO.

Widdowson, H. G. (1994). The ownership of English. *TESOL Quarterly*, 28(2), p.377.

World Commission on Environment and Development. (1987). *Our Common Future*. Oxford: Oxford University Press.

Yang, C. C. R. (2012). Is gender stereotyping still an issue? An analysis of a Hong Kong primary English textbook series. *Hong Kong Journal of Applied Linguistics*, 13(2), pp.32-48.

参考 URL

国立教育政策研究所(2012)『学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 (最終報告書)』 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_saishuu.pdf retrieved November 25, 2017

中央教育審議会(1996)『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第一次答申)』 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm retrieved November 25, 2017

日本ユネスコ国内委員会 教育小委員会(2015)『持続可能な開発のための更なる推進に向けて』

<https://esdcenter.jp/wpcontent/uploads/2016/04/bd15d8dae70f1f847d76052fd8f0ce7b.pdf>

retrieved June 13, 2017

文部科学省 高等学校外国語科目 学習指導要領

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf retrieved November 25, 2017

文部科学省 学校統計要覧

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1356065.htm

retrieved November 30, 2017

文部省(1946)『新教育指針』 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1281779>

retrieved November 25, 2017

文部省(1947)『社会科 学習指導要領』 <https://www.nier.go.jp/guideline/>

retrieved November 25, 2017

McKeown, Rosalyn. (2002). Education for Sustainable Development Toolkit

http://www.esdtoolkit.org/esd_toolkit_v2.pdf retrieved June 13, 2017

UNESCO global monitoring report 2005

<http://unesdoc.unesco.org/images/0022/002256/225654JPN.pdf>

retrieved June 13, 2017